

目高箱と幽波紋！！

人參天国

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神様転生に付き物の転生特典。強靱な肉体、不思議なパワー、特殊な技術。選択肢は選り取り見取りだ。きつと誰もが、手に入る筈がなかった能力を選ぶ事だろう。だから、俺もこう願った。

「スタンドチートしたいんですが、かまいませんね！」

俺は自重をやめるぞオーツ!!

(注) にじファンに投稿していた『異常と過負荷と悪平等と幽波紋!!』を改訂した作品。ストーリーは変わらずです。

目次

第一話：目高箱と幽波紋！	1
第二話：新たな我が家と幽波紋！	14
第三話：箱庭病院と幽波紋！	22
第四話：初戦闘と幽波紋！	42
第五話：黒神邸と幽波紋！	69
第六話：ヤンデレさんと幽波紋！	90
第七話：あの子の決意と幽波紋！	118
第八話：中学デビューと幽波紋！	127
第九話：新入部員と幽波紋！	144
第十話：改造人間と幽波紋！	159
第十一話：濃すぎる奴らと幽波紋！	200
第十二話：依頼第一号と幽波紋！	223
第十三話：生徒会のプリンスと幽波紋！	239
第十四話：水中運動会と幽波紋！	269
第十五話：新入り会計と幽波紋！	299
第十六話：風紀委員長と幽波紋！	

第一話：目高箱と幽波紋！

ふと気付けば、俺はそこにいた。

ひたすら白い空間だった。果ては見えず、上もわからず、地面に立っているのかも定かではない程白で染まり切った場所。

この世の光景とは到底思えず、俺はただ呆然と立ち尽くすしかなかった。

「まあ、実際はこの世ともあの世とも違うんだけどね」

「!？」

聞こえてきた声でようやく我に返る。振り返ると、そこには見知らぬ男がいた。金髪碧眼の……美青年。今にも「世界が愛で満ちればいいのに！」と言わんばかりの穏やかな微笑みを浮かべ、その神秘的な雰囲気はこの場にこれ以上なくマッチしている。イケメン爆発しろ。

「……君、結構余裕あるね。混乱が一周して冷静になった？　ま、とにかく座って座って」

見れば、その男が座る真っ白なソファの対面にはもう一脚同じソファがある。ふんわ

りしていて、実に座り心地が良さそうなソファだ。

「……いやいや、その前にあんた誰？　ここどこ？　何で俺はこんな所にいんの？」

「一言で言うとなんプレ乙」

「なるほど」

「悲しくなるほど理解が早いね……これから詳しい事情を説明するよ」

再度座るよう促され、ようやく自分も対面のソファに腰かける事に。

「さて、じゃあさっきの君の質問に答えていくとしようか。もう察しがついてるみたいだけど、僕は神様をやっている、普段は自分が担当する世界を管理するのが仕事だ。君がいた世界も僕の管理世界だったんだよ」

「それはつまり、創造神的な……？」

「ちよつと違うな。確かに僕が新しい世界を創る事はできるけど、実は世界って勝手にポコポコ生まれてきちゃうものでね。それを管理してるだけだから、創造神っていうわけじゃないな」

「はあ……」

まあ、日頃SS巡りをしている自分にとつたら話の展開としては意外ではなかったが、しかしいざ本物に出会ってみるとスケールがでか過ぎて反応に困る。たぶん、気にする様な問題ではないと思うが。

「それで、ここは結局どこ……なんですか？ 死後の世界で、自分は既に死んでいる、とかですか？」

「それも違うね。君が考えているのは天国とか地獄の事だろうか？ それがあるのは『天国・地獄がある世界』であつて、そこは『現世』も含めてあくまで一つの世界として成り立っているんだよ。」

でも、ここは君がいたその世界の外。普通なら絶対に来られない場所なんだ」

わかるようなわからないような話だが、とにかく凄惨所らしい。

「そして、確かに君は既に死んでいる。本来なら君の世界の天国なり地獄なりに行く所だったんだけど、故あつて僕がここに連れて来たんだ」

「やっぱり、死因に何か問題があつたんですか？」

「さつきから口調が堅いなあ、もつと気楽に話していいよ。でも君の予想は当たつていてね、これが実に申し訳ない話なんだ……」

決まり悪そうにこちらを見てくる。まさかあれか、死ぬ筈じゃなかったけどミスしちゃつて、つて話か。

うーむ、確かに殺されたなら納得出来ないが、こう申し訳なさそうにされるとこちらとしても怒りにくい。わざとじゃないならそれも尚更だ。

ともかく話を聞いてみよう。出来るだけ怒らず冷静に……

「実は世界群を使ってビリヤードしたら、キューが君の世界を貫いちゃって。そのせいで規模は小さいんだけど次元震が発生しちゃって、君だけ運悪く巻き込まれたんだ。ほんとゴメンネ?」

「歯ア食い縛れコラ」

世界の平和を乱す奴に正義の鉄槌を!!

「待って、とりあえず話し合おう。暴力反対」

「殴るだろ! そりゃ殴るだろ!! 死因が世界を使ったビリヤードって何なんだよ、もはやスケールがでかいのか小さいのかわかんねーよ!」

「しようもないって事だけは確かだねー」

「唸れ俺の右拳!!」

渾身のストリートだったが顔を反らしてあっさり避けられてしまった。この澄ました表情がまた一段とムカつく。

「まあまあ落ち着いて。怒るのももつとみだけど、それより君の今後の事を話すよ」

「チツ……」

殴れなかったのは非常に残念だが、どうやら相手が悪そうだ。仕方ないので再びソファに座り直し、聞く体勢になる。できればぶん殴ってやりたいが、今は我慢だ。

「この件は完全にこつちに非があるから出来れば生き返らせてあげたいんだけど、実は

もう既に君の世界では『突如発生した空間の亀裂に巻き込まれた不幸な少年』って話題で賑わっていてね……」

「それって……」

「うん、君の事。その瞬間を目撃した人がいたみたいで、亀裂自体も塞ぐのが遅れちゃってね。もう世界規模で有名になっちゃったけど……それでも生き返る？」

「いや、やめとく……」

報道陣の人波に飲まれていく自分の姿が容易く想像出来た。すっかり有名人になってしまったらしいし、もはや普通の生活は望めそうにない。俺はそこまで目立ちたがりではないのだ。

「それで、君の選択肢はこのまま君の世界の天国なり地獄なりに逝くか、もしくはお約束的な転生をするかのどっちかだけど……どうする？」

「転生で」

「だよー。なので転生特典として三つ願いを叶えてあげよう。好きな事言つてよ」

「……マジ？」

「マジマジ。あ、でも願い事増やせてのはダメだからね。あとあんまりマズイ内容だったら制限ぐらいはつけるけど」

「マジか！ じゃあアレだ……『あらゆるスタンド能力を自由自在に使いたい』って願い

は」

「君、思いつきり趣味に走ったね」

ジョジョ好きの俺にこれ以上の願いがあろうか。いや、ない!

「うーん、まあ、趣味とはいえ十分チートな願いだね。全てって事はレクイエムも?」

「もちろん!」

「自由自在っていうのは?」

「具体的にはスーパー・フライとかチープ・トリックとかヘビー・ウエザーとかを制御できるときに」

「チート乙」

「それほどでもない」

むしろできなきや死ぬしかないし。

「でもその願いならある程度制限をつけさせてもらおうよ。」

1：二体以上のスタンドを同時に扱う事はできない。

2：スタンドの能力は別のスタンドを出したら解除される。例えばゴールド・エクスペリエンスで生物に変えた物は別のスタンドを使ったら元に戻る。ただし、体の一部にしていた場合は解除されない、みたいな例外は有り。エニグマも紙にした物は解除されない様にしてあげる。

3：発現に条件があるスタンドは条件を満たさないと発現できない。例えばタスクの A C T 2 以降は黄金の回転が必要。レクイエムは本来矢が必要だけど、そこはオマケしよう。

4：影響範囲が自由に決められないスタンドもある。わかりやすい奴では時間関係のスタンド、あとグリーン・デイ、ボヘミアン・ラプソディー、C—MOONなんかもうだから、注意して使ってね。

5：フー・ファイターズは独り歩きかつ遠隔操作型にする。ダメージは共有されず、出しているフー・ファイターズが全滅しても新しく出せる。ただし出したフー・ファイターズは一定量からは増殖しなくなるし、同時に二体以上を人型にして運用する事はできない。基本的には君の意向に添うし操作もできるけど、意思はあるし視覚共有もできない。長距離君の下を離れる事はできるけど、フー・ファイターズをしまいか全滅するかしないと別のスタンドを出す事はできない。

……やれやれ、こんな所かな」

随分長くなったが、その程度の制限は問題ない。これ以上を願ってはバチが当たるっ
てもんだ。今でも十分に跳ね回りたい程嬉しい。

「ウツヒョー!!」

「跳ねてる跳ねてる」

……つい取り乱してしまった。とりあえず落ち着こう………よしつ、じゃあ次の願いは………つて待てよ？

「転生先はどうなんの？」

「先にそれを聞くべきだと思っただけどね……悪いんだけど、都合がつかなくて選択肢が五つしかないんだ。一応有名な所を選んだから、この中から選んでほしい」

という事は、突然誰もいない世界に放り出されるわけじゃないって事か。

よし、とりあえずその選択肢って奴を見てみよう。

「まず一つ目、バイオハザード」

「ふむふむ」

「二つ目、サイレントヒル」

「ほうほう」

「三つ目、呪怨」

「うんうん」

「四つ目、不安の種」

「へえへえ」

「五つ目、めだかボックス」

なるほどなるほど。

「めだかボックスで」

「だよー」

選択肢なんてなかった。

「つてフザケンナ！ 何だそのチョイスは!!? むしろ豊富だよ、選択肢が！ 悪い意味でー」

「と言われても、ここ以外にはないし……」

「そこはほら、東方とかリリなのとか、そういう選択肢は」

「そこら辺は人気があってねえ、既に他の転生者達がいるから無理なんだ」

「お前そんなにミスしてんの!?!」

「ミスをする神が僕だけだと思わない事だ!」

「何でこんな時だけ感嘆符付けてんだお前は!」

まさか世界を丸ごと使つてビリヤードする様な神が複数いるというのか。実はこいつらこそが世界を混乱させている元凶じゃないのか。世界の管理をしているとは言いが、この分だと普段どんな管理の仕方をしていいのかわかつたもんじゃなかった。

「でも君はまだ幸運な方だと思うよ？ この前なんか『最強の肉体』と『無限の魔力』と『ネギまの全技術』を持った転生者（笑）が『生徒会役員共』の世界に転生してたし」
「めだかボックスで」

そんな事になったら、俺は泣く自信がある。生きる気力を失う自信もある。ホラー系とは違う意味でシャレにならない転生先だった。

……しかし、俺の転生先のめだかボックス、これはこれでまずい。

確かにめだかボックスは嫌いではないし、スタンド能力も場違いと言う程ではないだろう。むしろかなり便利な筈だ。

しかし問題は……

「あの世界ってジャンプも『ジョジョの奇妙な冒険』もあるよね」

そうなのだ。もうこれでもかって程ジャンプが普及しているのだ。

しかも作中では承太郎の名前すらはつきり出てしまっている。確実にジョジョもあるだろう。

そんな所へスタンド能力なんて持って行けば……

「安心院なじみにあつという間に目をつけられて色々調べられて最終的に漫画の世界だと気付かれると。改心フラグ見事にブチ折ってない？」

……やべええええ!! あんなのまともに相手したくないって!

細かい数は覚えてないけど、スキル1京個以上も持つてる超絶チートキャラだぞ?!
全スタンド使っても勝てねーよ馬鹿っ。

そもそもめだかボックス自体クリスマスの生徒会選挙が終わった所までしか読んで

ないから、最近どんな展開したのかも知らねえし！

「程よく混乱してるね。ちなみに正確には1京2858兆519億6763万3865個だ」

「どつちにしろ絶望的だよチキシヨウ！」

くそつ、まさかジョジョそのものが死亡フラグになるとは！ どうにかならないのか
!?

「……一応探せばジョジョが存在しないめだかボックスの世界もあると思うけど？
(ぶっちゃけスタンドを諦めれば手っ取り早いんだけど)」

「……えっ、マジか!？」

「面倒だけど、願いの一つって事なら何とか探してみようよ」

それはこの上なくありがたい提案だった。しかしそんな都合のいい世界があるんだろうか。

「探せばあると思うよ。主要人物が全員男になってる世界があるくらいだし」

「なんかイヤに生々しい例だ……」

しかし今はただただ感謝するばかりだ。ピンポイントで悪い世界で軽く絶望していたが、これで少しは生き易くなる筈だ。

「どうする？ 『ジョジョのないめだかボックスの世界に転生』って願いにする？」

「……ああ、それで頼む。あんなヤバイ奴と敵対するなんて冗談じゃない」

しかし、あの世界には安心院なじみ以外にも理不尽な能力を持った奴は大勢いる。そうなるとう然対策は必要だろう。スタンドだけでは対処できそうにない能力の奴もいるし。

……よし、こうなったら。

「じゃあ最後の願いは『スキルを防ぐスキル』が欲しい」

「それはどういう？」

「無許可で干渉してくるスキルを完璧に無効化できるスキルだ。こつそり記憶を読まれたりしない様にな」

「ふーん……」

下手すりやスタンドを奪ったり、問答無用で消したりできるスキルもあるだろうし。本当に理不尽な世界だな、あそこ。

「わかった、その願いも叶えよう。制限は……特になし。スタンドとスキルは転生後に使える様にするよ。これならちよつとやそつとじゃ死なないだろうし、向こうでも頑張つてね」

「ああ、ありがとう」

激励を受けて感謝を告げると、何故だかだんだんと眠気が襲つて来た。どうやら早速

転生するらしい。

ひどい目にはあつたが、次の世界でも楽しく生きていこう。まどろみの中で、そう静かな決意を固めた。

「0才児からリトライか。心を強く持つて生きてね。本当に」
……さっそく心が折れそうになった。

第二話：新たな我が家と幽波紋！

俺が転生して最初に見た物は、天井から吊り下げられたオモチヤ（『メリー』とか言った気がする）と、こちらを上から覗き込む初老の……いや、中老くらいの見知らぬ女性の顔だった。

最初はかなり驚き、お前誰だよと混乱しかけたが、これまでの経緯を思い出して自分は転生したのだと思い至る。

となると俺は赤ん坊になったのかと思い、試しに声を出してみるが、「あー」とか「うー」なんて声しか出ない。たぶん喋るのは無理。

身体にかけられた毛布から手を出して掲げてみると、元の自分とは大違いな小さい手が視界の端から伸びて来た。うむ、やはり俺は赤ん坊になったらしい。

ならば目の前の女性は……まさかマイマザー？ ……え、ちよつとお歳がアレ過ぎじゃない？ いや、確かに3、40年前は美人だったかもしれないけどさ……うーん？ 「なんかムカつく事考えてそうなガキだねえ」

……おっと、今口汚く罵られましたよ？

驚いている俺を暫定母がヒョイと抱き上げる。

「ここが今日からあんたが暮らす場所だ。ほら、他のガキ共にも挨拶しな」

母がそう言つてしやがみこむと、俺の目に三人の子供が映つた。真下に居たのでわからなかつたらしい。灯台もと暗しという奴だった。

彼らもこの女性の子供なのだろうか。しかし全員顔がまったく似ていないのは何故？

「おおー、ちっちゃいなー」

「わ、ほつぺたがすごいプニプニしてる」

「にやあ……いい感触」

「あぶばー……（いてっ、いてっ、つつくなつつくな）」

三方向から指でドスドスとつつかれる。三人は子供だが今の俺よりはずつとでかい。しかも手加減ができていないので地味に痛かった。赤ん坊なので抗議の声も言葉にならず効果無し。

ああ、俺はこのままハゲワシに群がられる死骸の如く果ててしまうのだろうか。なんて短い新しい人生だったんだ。

「興味があるのはわかるけど落ち着きな。こいつの頬を突き破る気かい」

物騒な事を言われたが、それを聞いた子供達は渋々つつくのをやめた。

デッドエンドは回避できたらしい。

「……この子の名前、なに？」

「名前かい？ そうだねえ……」

「あうー（え、決めてなかったの？）」

決まっていなかったらしい。

そして黙考する事二分弱。

「よし決めた。あんたの名前は奏丞だ。人を丞たすけながら前に奏すすんで行ける男になれる様に、奏丞。」

「いい名前だろう？」

「いいとおもうよ！ よかったなソースケ！」

「これからよろしくね」

「……よろしく、ソースケ」

カップラーメンより早く名前ができてしまったけど、確かにいい名前だと思う。

やるじゃないか母よ。

「ばーさん、おれにも持たせてよ！」

「あんたみたいな口が悪いガキには任せられないね」

「えー、ケチ！」

「あつ、じゃああたしに持たせてよ！」

「いやあ、わたしも……」

「ここは騒がしいけど暖かいな。」

転生したばかりで不安だらけだったけど、ここならきつと楽しくやっていけると思う。

「こちらこそ、これからよろしくな。」

「……………」とここでそろそろマイフアーザーに挨拶したいんだけど、どこにいるんだ？

☆☆☆

俺がこの世界に生まれ、『うきそつすけ宇城奏丞』の名前を貰ってから二年が経った。

ハイハイしかできなかつた身体は二本足で走り回れるくらいに成長したし、周囲の環境についても色々と理解できた。

これはかなり早く気付いた事だが、実は俺が暮らすここは親がいない子供を育てる、

所謂児童養護施設という奴だった。そして最初に会ったあの人は母ではなく施設長で、なんと一人でここを経営していたのだ。

とにかく俺は孤児という事になる。

俺捨てられたの？　と思っただが、調べてみると俺には最初から親がおらず、どうやら赤ん坊となつて直接この施設の門前に送られたらしい。

これは転生と言うのか？　とは思つたものの、そこはどうでもいい。

肉親だろうと肉親じゃなからうと、もう俺にとつたら皆は新しい家族だ。この境遇に文句などない。

そして能力に関してだが、貰つたスキル（厨二力全開で『傑壁晶』ハイドロックと名付けてみた）についてはよくわからない。

いや、存在しているのは確かなんだけど、実際に効果を確認できたわけではないのだ。それもそのはず、そもそもこのスキルはスキルを防ぐスキルだ。つまり干渉してくるスキルが無い以上、目に見えた効果など確認のしようがないのだ。

まあ、まさか使えないなんて事はないだろうし、追い追い確認していけばいいだろう。さて、それよりも問題はスタンドの方だった。憧れのスタンドが本当に使えるかどうか。

結論から言おう。

めっちゃ使えた。

そりやもう死ぬ程使えた。

スタープラチナでパラパラ（古っ）だって踊れた。

というかテンション上がり過ぎて死ぬかと思った。

なにせ好きだけオラオラとかガオンとかできるんだ。これ以上の幸せはあるまい。

精神はともかく、流石に身体が幼過ぎたのかほとんどのスタンドが少々縮んでいたが、それでもかまわなかった。

『The Book』で自分の経歴を調べる分には問題なかったし、小さくなってますます普通のクワガタっぽくなった『灰タワー・オブ・グレイの塔』を飛び回らせてみて、普通の人にスタンドが見えないのも確認できた。

時止めも一応できたが、残念ながら止まっていたのはほんの一瞬だった。どうやらこれは慣れが必要らしい。どんな武器でも技でも使えるけど、熟練度は自分で上げてネ、という事だろう。

なのでこの二年間、しょっちゅうスタンドを使っていたんだけど……そのせいで新たな問題が発生してしまった。

なんとばーちゃん（施設長の事。ばーさんと言うと怒る）にスタンドを使っている所を何度も見られていたのだ。いや、スタンドは普通見えないので、正確には触らずに物

を動かしている所をだけど。

しかしどっちにしても異常な事には違いない。最初のうちは錯覚かと思っていたらしいが、何度も見ているとそうも言えなくなり、この度めでたく俺は箱庭総合病院とか言う病院で検査を受ける事となった。

……完全に原作組遭遇フラグです本当にありがとうございます。

いや、実の所俺は原作介入についてはどうでもよかった。

確かにスタンド能力という武器ならあるが、それを使って「俺ww最ww強wwフwwwwwwww」とかしたかったわけじゃない。

それなりにチートな能力を持っているとは言え、無敵というわけでもないのです、あの死亡フラグ満載の世界に突入するとなったら二の足を踏むのが現状だった。

かと言って検査を逃げるわけにもいかず、悩んでいる間について病院に来てしまった。

「待てよ、少なくとも黒神めだかと球磨川禊の邂逅は一度だけだったハズ。最も死亡フラグが建っている一日がドンピシャで今日なわけがない！」

……そんな樂觀的予想が見事にはずれたのは、診察を終えて知り合いの所へ挨拶回りに行っているばーちゃんを待とうと託児室へ向かう途中の事だった。

「『まったく』『なんのためだなんて』『みんな大人のくせに』『的外れだよねえ』」

ボロボロのウサギのぬいぐるみを挟んで座る、どこかで見覚えがある女の子と男の子がいた。

「『人間は無意味に生まれて』

『無関係に生きて』

『無価値に死ぬに決まってるのにさ』

『きみたちもそう思うだろう？』

『えーと』『めだかちゃんと』『奏丞ちゃん？』

……とりあえず俺に話しかけるのは的外れだと思わず。

第三話：箱庭病院と幽波紋！

黒神めだか達に出会う三十分前。奏丞は手持ち無沙汰に診察の順番待ちをしていた。一緒に来ていた施設長はこの病院に知り合いが多いらしく、挨拶回りに行ってしまったので、奏丞は現在一人きりだ。診察後は迎えに来るまで託児室で待つ事になっている。

順番を待つ間は暇だが、話し相手がおらず、しかし周りにいる子供に話しかける気にもなれず、奏丞はお呼びがかかるまでタワー・オブ・グレイを飛ばせて暇を潰していた。……マイナーで特に思い入れもないスタンドなのに結構使っている気がするのは何故なのか。

「宇城くん、五番検査室に入ってくれる？」

「はい」

ようやくか、と腰を上げてタワー・オブ・グレイを戻し、言われた部屋に向かう。どうやらスタンドが見えた人はいなかった様だ。

「(さて、担当は誰だろ。まさか『あの人』だったりしないよなあ?)」

とある合法ロリの陰を脳裏によぎらせつつ、五番検査室に入る。果たしてその部屋で待っていたのは……

「宇城奏丞くんね？ 私は君の担当医になる人吉瞳！ よろしくね！」

予想は大当たりだった。

椅子に座って待っていたのは小学生くらいの小さい女の子……の様に見える子持ちの人妻、人吉瞳。そのありえない若々しさはアンチエイジングどころの騒ぎではない。なるほど、こりや凄え。色んな意味で。

奏丞はそう思った。

「そんなに緊張しなくても大丈夫！ ほら、いつまでも立ってないで、座って座って」

「はあ……」

気の抜けた返事をしながら、言われた通り瞳の前の椅子に座る。

近づいてみてもやはりロリにしか見えなかった。瞳エキス（エロくない）を抽出して売り出せば、若さを求める世の奥様方も諸手を挙げて喜ぶのではないだろうか。たぶん。

「君は宇城先生の子供なんだよね？ 私も昔はあの人にたくさんお世話になったの

よー」

「え、先生もばーちゃんに育てられたんですか？」

「……………どういう意味でかな？」

「あ、あー、その……………医者という意味ですわ……………？」

「誤魔化せてないわよ……………こんななりでも結婚して子供までいるんだから。」

まあ、医者として言うのは正しいけどね」

「……………ん？ という事はばーちゃんは元医者なんですか？」

「あれ、聞いてなかった？」

「ばーちゃん、あまり昔の事話そうとしませんから。ここに知り合いがいるのも昨日初めて聞いたし」

「そうなの……………」

何故か物憂げな表情をする瞳。

明らかに過去に何かあった様な顔で非常に気になったが、言われないという事は詮索すべきではないのだろうと思えば聞くは聞かなかった。

「宇城先生が言っていないなら私の口から言うわけにもいかないわね。」

ごめんね、詳しい事話せなくて」

「いえ、ばーちゃんの事が少しでも知れたんでよかったです。」

今日は本当にありがとうございました」

「どういたしまして。何かあったら遠慮なく頼ってちょうだいね」

「はい、その時はお願いします。

じゃあさようならー」

「さよならー……………つて待ちなさい！」

「…………チツ」

残念ながらそのまま去る事はできなかった様だ。

「あつ、そうか、検査の事忘れてた！」

「いやいや、さっきの舌打ち聞こえてたから」

瞳は口元をひくつかせて言った。

「もう、なんで逃げようとするの？ 検査はちゃんと受けないとダメよ」

「と言っても俺、特に悪い所とかないですし」

「今回の検査は、君が言う様な一般的な病気を調べる為の検査じゃないわ。常人とは違

う能力、異常アブノーマルと呼ばれるモノを調べる為の検査なの」

「アブノーマル……………なるほど、人吉先生の旦那さんみたいな人の為の検査ですわかり
ます」

「縫い付けるわよ」

「ごめんなさい」

何をとは言わなかったが、恐ろしい事というのはよくわかった。

「それで、どうやって調べるんですか？ 痛いのはあんまり……」

「しないしない。カウンセリングみたいな物だから、怖がる事もないわよ。というか、既に大体わかったし」

えっ。

「短い間だけど、こうして話してみると、少なくとも生まれて二年の子供には似つかわしくないインテリジェンスを備えている事はわかったわ。だから常人と違うのは確かかなんだけど……作ったキャラじゃないとしたら、異常アブノーマルと言うには普通過ぎると思うのよねえ……？」

そりやまあ、スタンド使いだけど中身は一般人ですし。

そう思ったが、もちろん口には出さない。転生した奏丞には既に、元高校生として普通の精神が備わっているのだ。転生特典として後から与えられた異常も人格に大きな影響を及ぼす様な物ではないし、生来の強烈なキャラクターを持つ本場本物の異常達と比べれば、普通ノーマル寄りと思うのも当然だ。

……時々テンションが上がると、スタイリッシュ（笑）かつセクシー（爆）なポーズをとりたくなってしまうが、そこはスタンド能力の影響が強いのだろう。常日頃からしているわけでもない。

ぶつちやけ奏丞は特殊な力を持っているだけの普通ノーマルと言えるのだ。

「普通なら別に問題ないですよね」

「普通ならね。」

そもそも私の仕事は異常の子供達が社会に馴染める様に、幸せになれる様にすることよ。その点君は少し精神が早熟なだけだから、問題なく社会に馴染めると思うわ」

「そうですか、じゃあ俺は大丈夫って事ですね。ばーちゃんに心配かけなくてよかったですあ」

「でも……なんか隠してそうなのよねえ？ 君って」

「……………」

「具体的な事はわからないけど、この私を相手に全部を隠し通そうなんて無駄よ。異常も普通も合わせて、私がこれまで何人の人と向かい合ってきたと思う？ 悪いけど、対人経験は君よりずっと豊富だし、心療外科医として相手の感情を読むのは得意分野なの」

奏丞は頭をかく。どうにも相手は相当格上だった。

重ねて言うが、奏丞はあくまで特殊な力を持つ普通で、しかも前世と合わせても二十年も生きてはいない。そんな奏丞が瞳に心理戦で勝てる道理はなかった。

もちろん、スタンド『天国への扉』^{ヘブンズ・ドア}を使えば簡単に誤魔化す事はできる。しかし悪意のない相手をそうやって好き勝手に操る様な真似はしたくなかった。

「まあ、そこらへんは追い追い聞いていくとして、しばらくは通院してもらおうけどいいかしら？」

「だが断る」

「却下よ」

「拒否権ないなら聞かないでくださいよ……」

「自己決定権って大切だと思わない？」

「パターンリズム的展開だった気がするのは気のせいですか」

「二歳なのに的確にツツコミできるのね。やっぱり通院決定」

「ひでえ……」

誘導尋問とか卑怯だと思いません。

「まあ、特に問題はなさそうだし、通院も案外早く終わるかもね？ 場合によったら入院

してもらおうけど」

「……しないで済むよう祈ってます」

「それはこれからの君次第ね。じゃあ今日の診察はここまで。今後の予定なんかは君のおばあちゃんに知らせておくれ。」

「……そう言えば君、しばらくおばあちゃんを待つ事になってるんだっけ？」

「そうですね、託児室で待ってるって言われてます」

「託児室の場所はわかる?」

「……まあ、探せば」

病院内の構造を把握しているわけではないが、こんな時にも便利なスタンドがあるので簡単に調べられる。そうでなくても院内の地図が貼り出されていたんだから迷う事はないだろう。

「ならいいけど……そうだ、今託児室に私の子供がいるの。よかつたら友達になつてあげてくれないかしら」

「俺がですか?」

「うん、君が。あの子も一人じゃ寂しいだろうし、君も悪い子じゃなさそうだしね」

原作では球磨川禊と関わらせない様に気をつけていたが、奏丞ならばいいらしい。眼鏡になつて光栄と思うべきだろうか。

しかし元々託児室には行くつもりだったし、せっかく親御さんに認可されたんだから会つてみるぐらいはしておこう。

「んじや早速行つてきますね。次来た時もよろしくお願いします」

「またね。あの子をよろしくー」

奏丞はそう言つて検査室を出る。

結局異常ありと診断されて通院が決定してしまつたが、スタンドの事をばらすわけに

もいかない。いざとなったらスタンドを巧くスキルとして偽るしかないだろう。

俺もまだまだ未熟よのう、などと考えながら、奏丞は早速託児室を探す事にする。

その為にもまずは地図があつた場所に向かおうと待合室を通り抜けようとして……

「『まったく』『なんのためだなんて』『みんな大人のくせに』『的外れだよねえ』」

どこかで見覚えがある女の子と男の子が二人並んで座っていた。

「『人間は無意味に生まれて』」

『無関係に生きて』

『無価値に死ぬに決まつてるのにさ』」

黒神めだかと球磨川禊で間違いなかった。

「(ここで介入するのは転生者、だけど自分はよく訓練された転生者。死亡フラグなんて

華麗にスルーしてやるぜ——)」

「『きみたちもそう思うだろう?』」

『えーと』『めだかちゃんと』『奏丞ちゃん?』」

「……………」

……おかしいな、何か自分の名前とよく似た言葉が聞こえたぞ?

「『ひどいなあ』『無視しないでよ奏丞ちゃん』『きみだよきみ』」

右を見る。

左を見る。

前後を確認してついでに上下も見る。

奏丞という名前の人間は、いない。

「……俺？」

「うん」

「ええー……」

あれほど通行人Eの如き一般人に徹していたのに話しかけられてしまった。どうやらこの溢れんばかりの凡人オーラが目に入らないらしい。チクショウ。

「めだかちゃん」『きみもきつといっぱい人を終わらせてここに来たんだよね』

『いいんだよそれで』

『僕たちはなにをしてもいいんだ』

『ね』『奏丞ちゃん』

「……いや、突然そんな哲学的な質問しないでくれ。俺はお前が期待する様な回答なんてできないぞ」

「『なんだ』『肯定してくれないの?』『まあいいけど』『でも後学のためにも』『きみの考えを聞かせてよ』」

襦だけでなくめだかまで奏丞を見ている。

まいったなー、と思いながら、奏丞は一つため息をついて話し始めた。

「意味も関係も価値も、そいつが人生の中で自分で見つけていくもんだろ」

「『えー』『そんなものなんてないの？』」

「そりゃ今のお前にはそう思えるかもしれないけどよ、案外人生つてのも馬鹿にできないぞ？」

なんせカワイイ女の子と付き合えるのも、美味しい料理を食べるのも、好きな漫画を読み漁るのも、全部生きてる間にしかできない超期間限定のイベントだからな。

死んだら寝る事しかできないぞ」

「『ふーん』『きみはそんな事が人生の意味になると思うんだ？』」

「そいつがいいならそれでいいんじゃないの？」

愛し愛されたいとか世界中の美味しい物を食い尽くしたいとか人の役に立ちたいとか命がけのスリルを味わっていたいとか。人の価値観なんて人それぞれだし、そいつの人生の意味なんてそいつ自身が勝手に見つけて決めればいい。

そうやって生き抜いて、死に際に『悪くない人生だった』って思えたなら、きつとそいつには価値のある人生だったんだろうよ」

「『ふーん』」

……さて、語りすぎて恥ずかしくなってきた。二十年も生きてないくせに、何を人生

語ってんだ、と。

「(認めたくないものだな、若き故の過ちというものは……)」

穴があつたら入りたかった。

「『まあ』『そんな考えもあるよねえ』『僕は愛とか美味しいものなんか興味ないけど』
意外にも禊は奏丞の意見を頭ごなしに否定するわけではなかった。

しかし。

「『でもさ』『それって結局は幸福プラスの考え方だよね?』」

「……そう言われちゃ返す言葉がないな」

この考え方は確かに禊が言う通り、幸福でポジティブな考え方だろう。

例えばとんでもなく不運な生まれで、絶望にまみれた人生を歩んだとして、奏丞はその時でも同じセリフを言えるとは思っていない。

しかし、厨二力を全開にしたとはいえ、奏丞はその全てが間違っているとも思わなかった。

「『でも面白い話だったね』『うーん』『だけど気になるなあ』」

「……何がだ?」

「『もし幸せなきみが突然理不尽な不幸に直面した時に』『同じことが言えるのかなあ?』」

——そう言えばきみのおばあちゃんも来てるんだっけ？

そう禊が言った瞬間だった。

ゾクリ、と。

奏丞の背中を冷たいものが走っていった。前世でもかつて感じた事のない感覚だった。

好奇心に満ち満ちた禊の表情を見て、何が言いたいのか一瞬で理解する。

「(こいつ、施設の皆に何かする気か!?)」

口は悪いがなんだかんだで気に掛けてくれる施設長。

いつも遊びに誘ってくれる三人の先輩達。

奏丞にとって彼らは大切な家族だったし、彼らに何かあったらそれはこの上なく辛い事だろう。自分のせいで巻き込まれたというなら尚更だ。

……上等だ。

「何が言いたいかは知らないけどよ、妙なマネはするんじゃないぞ」

これもまた、かつてない感覚。

『守らなければならぬ』

その感覚が、奏丞にある決意をさせる。

奏丞は椅子に座る禊の前まで歩いて行った。手を伸ばせば容易に届く距離まで。

『妙な真似?』『僕には想像もつかないけど』『例えばどんな事かな?』

「……そうだな、もし俺んここに美味しい饅頭でも送られて来た日には怖くて夜も眠れなくなりそうだ」

『『ははっ』『面白いこと言うね』『なんだかきみと友達になりたくなってきたよ』』

『そいつは光栄だな。でもその楽しみは十年後ぐらいにとっておくとするよ』

奏丞と禊がそんな事を言いあっている。

「球磨川くーん、五番検査室に入ってくれるー?」

『『僕の番だ』『もう少し話してみたかったのに』『残念だなあ』』

禊は椅子から降り、ぬいぐるみを引きずりながら歩き出す。

『『でもやっぱりなんの意味もないんだけどね』』

『『だって世界には目標なんてなくて』』

『『人生には目的なんてないんだから』』

「……………」

そう言つて去つて行く禊を見送つてようやく、奏丞はスタンドを戻した。

ヘブンス・ドア
天国への扉。

相手を本に変えて過去を読み、更に命令を書き込む事ができるスタンド。

『宇城奏丞とその身内に攻撃する事はできない』

→

この決まりはなくさないしなくさせない』

襦に近づいた時にそう書き込んだのだ。

操る事に罪悪感があったものの、襦が油断ならない相手という事はよく知っていた。だからこそ、奏丞は「しておくべきだ」と判断した。

「……さつさと託児室に行くか」

いつまでも立ち止まっても仕方がない。

奏丞は襦が去った方向に背を向けて歩き出そうとして――

「待て」

「ぐえっ」

襟首を引つ張られ呻き声を出した。

「げほっ! げほっ! おまつ、殺す気か!」

「あ、ああ、すまない。ちよつと貴様に聞きたい事がある」

「聞きたい事お?」

奏丞と襦が話している間、終始空気だったためだかだった。

その聞きたい事とやらも、原作を読んだ奏丞には大方の予想はついた。

「貴様は人生の意味は自分で生きて見つけろと言っていたな。ならば私が生きている意

味も見つかると言うのか？」

「見つかるんじゃない？」

「……………」

あまりに投げやりでアッサリした返答に、一瞬言葉を詰まらせるめだか。

「……………」しかし私はあやつの言う通り、多くの人を終わらせてきた。そんな罪深い私が生きる事にどんな意味がある？」

「知るか」

「……………」

また、絶句。

「いや、当たり前だろ。俺達は初対面で、俺もお前も互いの事は何にも知らないんだぞ(嘘)。仮に俺が今『お前の人生はクロッキーに捧げるべきだ』って答えたとして、その言葉にどんな説得力があるんだ？俺はお前の運動能力どころか人柄だつて知らないつてのに(大嘘)」

「むしろ何故クロッキーを例にしたのかがわからない」

「……………」だけど、とりあえず聞いてみるつて姿勢は悪くない。

探し物つてのはそうやって探してらうちに、案外簡単に見つかっちゃうもんだぜ」

今ここであの言葉をめだかに贈る事は容易い。しかし何のやりとりもしていない奏

丞が言った所で、めだかの心には響かないだろう。やはりそれを言うのは彼の役目なのだ。

そして運がいい事に、彼が今この病院にいる事が既にわかっている。

「よし、俺もちようど暇だったし、お前の生きる意味って奴を探してみようぜ。まずは手始めにこの病院内からだ！」

「いや、ちよつと待て。私はこれから診察があるんだが……」

「今の診察とこれからの人生、お前はどっちが大事だ!? (どーん)」

「むう……! わかった、そういうことなら私も付き合おう！」

「(うわあ、この子チヨロいわあ……)」

こうして幼女をたぶらかした奏丞は、まんまと託児室まで連れて行く事に成功した。二人で中に入ってみれば、たくさんの玩具に囲まれた子供が一人いる。フードを被ってこちらに背を向けているので、その顔は見えなかった。

「先客がいたな。挨拶ぐらいはしておこうぜ」

「そうだな。」

おい、そんな単純なパズルに何をてこずっておる？ 貸せ、私がやってやる」

「うん、できれば最初は『こんにちは』とか『はじめまして』って挨拶をしような」

「……? きみたち誰ー?」

そんな奏丞の注意を余所に、子供がいじっていた知恵の輪を受け取ったためだかは簡単にそれを解いて子供に返した。

「うわあつ、すごいねきみ！　どうやっても解けなかったのに！　ありがとう！　すつごくうれしいよー！」

「……礼には及ばない。私にとっては取るに足りないことだ」

「じゃあ、じゃあさ！　これも解いてよー！」

「……いいだろう」

「あ、もしかしてきみもこんなの解けるの!?!」

「俺か？　よし、任せとけ。たかが子供向けパズル、あっさり解いて………うん、今回はお兄さんじゃなくてこっちの女の子に任せてみような」

「きみはおにーさんなの?」

「細かい事は気にしない」

子供と二人でパズルを解いていくめだかを見守る。簡単な物も、幼児向けとは思えない様な物も関係なく、めだかは部屋にあった知育玩具をあつという間に全て解いてしまった。

「早えー……」

「うわあああ！　全部本当に解いちやった！　すごいすごいすごい！　きみはすつごく

「すごいや!!」

ぴよんぴよんと飛び跳ねて喜ぶ様子をめだかは冷めた目で見る。

「……すぐくなんかない。それにすぐくたつて何にもならない。」

私が生きていることに、私が生まれたことには、何の関係もないのだから」

「えー、そうかなー？ そんなことないと思うけど？」

「……だつたら私に教えるがよい。私は一体何のために生まれてきた？」

「あはっ！ そんなことは簡単だよ。会つたばかりの僕をこんな嬉しい気持ちにしてくれなきみなんだ」

子供が被っていたフードがずり落ち、花が咲く様な笑顔が見えた。

「きつときみはみんなを幸せにするために生まれてきたんだよ！」

「!!」

雷に打たれたかのような衝撃に、めだかは目を見開いた。多くの知識を得てなおわからなかつた答えは、この少年によってアツサリと見つかつてしまったのだ。

めだかにとつて、それはまさに天啓の様な言葉だつた。

「……な？ 探してみると案外簡単に見つかるもんだろ？」

「……ふふ、そうだな。まさかこんな所に転がっていたとは」

「ねえねえ、もつと一緒に遊ぼうよ！」

「おう、いいぞ。パズル系以外ならなんでもやってやんよ」

「ならばトランプでもしてみるか？ パーティゲームには最適だと聞いている」

「いいよー！ やろうやろう！」

転生して二年、奏丞に初めての友達ができただ日の話である。

第四話：初戦闘と幽波紋！

めだかと善吉に出会ってからも、奏丞は何度か箱庭総合病院に通院していた。

担当した医者は全て知らない医者で、瞳は既に病院を辞めてしまったらしい。恐らくあの日に裸に会って、原作通り脅迫されてしまったんだろう。善吉の家に行く機会があり、その時にそれとなく訊ねてみたが、巧くはぐらかされただけだった。

通院してバレている事と言えば、今の所精神が早熟な事ぐらいだ。診察した人間の中に瞳ほど鋭い人はいなかったらしく、秘密はほぼ守られている。通院を止める日も近いのかもしれない。

「(でも、昨日のアレは何だったんだ……?)」

思い出すのは昨日の診察。

いつも通りのつまらない診察かと思っていたが、途中から人が入れ替わり立ち替わりする変な診察になったのだ。

きつかけとなったのはあの奇妙な質問だったと思う。

「君の秘密を話してください」

そう唐突に聞かれたが意味がわからず、「秘密って何ですか？」と聞き返すと目の色を変え、「嫌いな食べ物は何？」とか「好きな歌を歌ってくれ」とかわけのわからない事を言われ、何故かと聞くと今度は驚愕の表情を見せた。

その後何人か人が来て、その度に「駄目だ」とか「効いてない」だとか言っていたが、何の事かはわからなかった。

しかし今となったら予想がつく。

そう、あまり良くない予想が。

——ピンポン——

……随分イヤなタイミングで呼び鈴が鳴った。

どうやらお客さんが来た様だ。

☆
☆
☆

「奏丞を引き取りたいだつて？」

「はい、是非とも彼を養子に迎えたいのです」

やって来たスーツの男はそんな事を言い出した。

当初対応していたのは施設長だけだったが、「奏丞君にも聞いてもらいたい」という男の言葉があり、奏丞も一緒に話を聞く事になったのだ。

「妻とは結婚してもう長いのですが、実はこれまで一人も子供ができていないのですよ……」

その話によると、男の妻は生まれつき子供ができにくい体質らしい。不運な話だが、妻は子供好きで常々子供が欲しいと願っていたし、自分も仕事の跡継ぎは欲しい。

ならば代理出産してもらおうかという話も出たが、最近になってある子供の噂を聞いたのだ。ある養護施設に年齢のわりに大人しく良い子供がいる、という話だ。

言わずもがな、奏丞の事である。

将来的には跡継ぎになってほしいのだから、養子にするならもちろん賢い子の方が良い。なのでまずは会ってみようところこうして来てみたが……

「噂通り聡明そうな子でした。是非私達の息子になってほしい」

そういう事らしい。

確かに子供らしい所をあまり見せた事はないし、近所の奥様方に良い子と思われているのも一応は事実だった。ぱつと聞いて特におかしな所もない様に思える。

……少々話が急で、しかもタイミングが良過ぎる、いや、悪過ぎるという点以外は。

「この子があんたの期待に応えられなかった時はどうするんだい？」

「どうもしませんよ。そんな事で我が子を捨てるなんてあり得ません。妻が子供好きなのは変わりありませんし、跡継ぎだって別の手段も考えられます。

ですが、心配は無用ですよ。私の目は曇っていません。この子は私の期待にも必ず応えてくれます！」

「大袈裟だねえ……そりゃこの子は悪い子じゃないが、その期待に押し潰されやしないか心配だよ」

「たとえ肉親関係でも大なり小なり期待はするものですよ。それに貴女も、子供には父親と母親が必要という事はわかっていてでしょう？ 彼の為にも、どうか色好い返事を」

「色も何も、突然そんな話をされちゃあ心配にもなるさ。大事な話なんだ、決めるにはもう少し時間が欲しい」

「そうですか……君は奏丞君と言ったね？ 君はどうか、家族が欲しいとは思わないかい？」

これまで黙って聞いていた奏丞に、男は説得する相手を変える様に訊ねてきた。

「気持ちにはわかるよ、君はこの人達と離れたくないだろうか？ でも安心してほしい、一生の別れをさせるつもりはないんだ。会いたくなったらすぐここに連れて来てあげるよ」

「……………」

「それにここにいる大人は彼女一人なんだろう？ 君達四人の子供の世話をするのは大変な筈だ。君の大切なおばあちゃんの負担も、できるだけ軽くしてあげたいと思わないかい？」

「…………それはそうですね」

「奏丞」

男の言葉を肯定した奏丞に施設長が口を開く。

「あたしはね、あんた達を小生意気なガキだと思った事はあっても、負担だと思った事は一度だつてないよ」

「…………こんな時でも真正面から小生意気なんて言えるなんて、流石だぜばーちゃん」
「そういう所が小生意気なんだよ。」

でもね、それでもあたしがあんた達と一緒にいるのは、あたしがそうしたいからなんだ。あたしが好きでやってる事をあんたが気に病む事はないし、あたしの我が儘にあん

たが縛られる事もない。

あたしがやりたい様に生きてるみたいにな、あんたもやりたい様にやってみな。それが自分らしく生きるって事なんだから」

「ばーちゃん……………そんな重要な事決めさせないでよ。俺まだ二歳児だぞ?」

「いいからあんたの考え言ってみろってんだよクソガキ!」

「痛い痛いこめかみ痛いからごめんささいごめんささい!」

グリグリとこめかみを抉られて悶える。痛みは伴ったが、二人の間の重苦しい空気は払拭できた。そんな事を言われずとも、奏丞は施設長の事を信じている。妙にシリアスぶる必要などないのだ。

「ははは、面白い子だ。で、奏丞君はどう思うんだい?」

しかし男の方はそうではない。油断ならない相手だし、その正体を見極めなくてはならないのだ。

奏丞は思考を切り換え、男を見る。

「ん……………念の為、一つ質問していいですか?」

「うん? 構わないよ、一つと言わず、何でも聞いてくれ」

「そうですか」

……………話は変わるが、ここである面白い能力を持つスタンドについて話そう。

「さつき跡継ぎがどうこうなんて話をしてもらいましたけど……」

『アトウム神』というスタンドがそれだ。このスタンドは珍しい事に二つの能力を持つており、一つに敗北によってスキが生じた魂を奪い取るという凶悪な能力がある。

「実はそれは嘘で、本当は俺を異常の研究に利用するとかではないんですか？」

「ッ!？」

「……………」

そしてもう一つの能力。それは相手の思考を読み取る能力だ。

「……突然なんだい？ よくわからないが、どうやら穏やかな話ではなさそうだな」

複雑な思考を読めるわけではない。しかし『YESかNOか？』『右か左か？』質

問する事によっていずれを選択しているかはわかる。『外角か内角か？』『高めか低めか？』『変化球か直球か？』100%の的中率で判別できる。

「唐突にすみません。最近きな臭い出来事があったもんで、つい心配してしまうんですよ」

「ふむ、何があったかは知らないが……しかし安心してほしい」

そしてもし今、そのスタンドを使ったとしたら——

「そんな研究に利用するなんて事、あるわけないからね……」

『YES！ YES！ YES！』

YES！ YES！ YES！』

「……………そうですか、なら良かったです」

「奏丞、お前まさか」

施設長が何かを言う前に手で制し、再び口を開く。

「今から少し考えさせてもらってもいいですか？」

「ああ、いいよ。何せ人生に関わる事なんだからね。よく考えてみてほしい」

「ありがとうございます」

礼を言い、黙考する様に目を瞑る。

しかし考える事は養子云々という事ではない。

「（ハーヴェスト！）」

奏丞が出したスタンドは六本の手足を持つ小さなスタンド。パワーはないが、群体型のハーヴェストは凄まじい数を誇る。その数、実に500体。500体全てで一つのスタンドなのだ。

「（ハーヴェスト、隠れている敵を見つけ出せッ！）」

ハーヴェスト達が一斉に散り、施設内とその周辺を探り始めた。

「……扉の外に二人、窓の外に二人、外の車に一人、そして目の前に一人、計六人か。スーツの下にはしつかり防護服を着てやがるし、武器も隠してやがる。交渉が決裂した時、実力行使で来る可能性あり。……兄貴達が学校に行つててくれてよかったな。でも思ったよりも数が少ないな。こつちをナメているのか？ はたまた初日だから様子見のつもりなのか？ こつちにとつたら好都合だが………ん？」

そこで気付く。自分の真後ろにある、妙な空間に。ハーヴェストが何かに触れているのに、そこには何も見えないのだ。

「何かある……いや、何かいる！ 集まれ、ハーヴェスト！」

ハーヴェストに徴集をかけ、次々とその空間に群がらせていくと……見事に人の形が浮き上がった。

「そんな事だろうと思つたぜ。『透明になるスキル』つて所か？ 攻撃される前に気付いてよかった……」

しかも触つてわかつたが、皮膚の様な柔らかい感触が全くない。装甲を纏っているみたいで全身が硬く、ハーヴェストのパワーでは砕けそうにない。透明になっているのはこの装甲のせいという事も考えられるだろう。

これに関してはすぐには対処できそうにないので、まずは部屋の外の敵から無力化していく事にする。

「そうだ、跡継ぎって言いましてけど、具体的にはどんな事を？」

「ああ、私はある病院の院長をしていてね。継いでもらいたいのはその病院だ。ここからはちよつと遠いけど、立派な病院だよ」

「へえ、お医者さんだったんですか。なら俺も行く行くは医者になるんですね」

あまり待たせると怪しまれてしまうので、ちよいちよい会話しながらハーヴェストで細工を続ける。

やがて残ったのは目の前の男と、背後の何者かだけになった。

「……決めました」

「私達の息子になってくれるかい？」

「いいえ、俺はあなた達の家族にはなれません」

「……理由を聞こう」

「俺にはもう、家族がいますから。俺は今の家族と一緒にいたいんです」

「……まあ、突然こんな事を言われたらそう答えても仕方ないだろう。時間はあるから、もう少しじっくり考えてみては「その必要はありません」……」

「俺の答えは変わりませんよ。俺はあなた達とは行けません。申し訳ありませんが、跡継ぎは別の人にしてください」

「……そうか」

しばし男は沈黙していたが、やがて残念そうに目を伏せた。

「残念だな、いい話だと思ったんだが。君を迎える事ができなくて、本当に残念だよ」
顔を上げた男は、視線をチラリと奏丞の背後に向けた。

「しかし君は本当に賢い子だ。どうやら全てわかっているみたいだし、簡単に諦める事はできそうにないよ。

なので——」

力づくで連れて行くとしよう——

「ッ!? 逃げるんだ奏丞——」

しかし彼女の叫びに意味はなく、無情にも不可視の一撃が奏丞の背後から振り下ろされ……

——ブワアアア！——

「……………は？」

「な、なにい!?!」

その衝撃はソファを伝わり、床に散っていった。

コ、コ、コ、コ、コ、コ、コ、コ、コ、コ、コ、

「……ホント、勘弁してほしいぜ。今後の人生に関わる初陣なんてよ」

奏丞以外は誰一人見えていない。攻撃エネルギーを受け流す、全身に纏ったスタンド『20th センチュリー・ボーイ』の姿が。

「どこまでやれるかわからないけど、こつちも必死なんだ。存分に正当防衛させてもらうぜッ！」

奏丞はスタンドを即座にスタープラチナに換え、

「オラアッ！」

「——ッ!?!」

敵がいるであろう場所に全力で拳を振るう。確かな手応えがして、見えない何かは壁を突き抜けて隣の部屋まで吹っ飛んでいった。

しかしそれでもあまり効いた様には思えない。直撃こそしたものの、伝わってきた感触はそう思わせる程硬かった。

「このガキ!?!」

男が懐から拳銃を取り出し、発砲する。銃口から飛び出したのは普通の弾丸ではなく、何かを注入する針が付いた弾だ。おそらくは、麻酔弾。

「無駄アッ！」

「なっ……」

スタープラチナで弾を弾く……が、今の弾をセックス・ピストルズあたりで跳ね返しておけば良かったと若干後悔した。いや、それ以前に他のスタンドを使っていれば、さっきの奴に関しては既に勝負がついていたかもしれない。

使うスタンドは場当たり的ではなく、もつと的確に選択しなくてはならないのだ。

「そこからへんは今後の課題つてとこだな」

「クソツ、あいつら何をしてる!?! 早く来てこいつを」

「てめーは黙ってる!」

「カペツ!」

喚く男を殴り飛ばした。スーツの下には防護服を着ているので、狙うのは何もつけていない顔面だ。拳に伝わる感触は気持ちのいい物ではないがちゃんと効いたみたいで、男は倒れたまま起き上がってこくる事はなかった。

「奏丞、さっきから何が起きて……いや、あんた一体何をしているんだい!」

「……後で全部説明する。とりあえず台所に逃げよう!」

これで残るのは見えない敵一人になった。厄介な相手だが、奏丞はわざと行き先を喋り、追って来た所を迎撃する作戦を選んだ。

部屋を飛び出すとやはり見知らぬ男が二人待ち構えていたが……

「ま、まてえ……」

「……………（返事がない、ただの屍の様だ）」

どちらも死にかけだった。

「邪魔！」

「グエツ……………」

踏みつけられた男はカエルが潰れた様な呻き声をあげて沈黙した。死者に鞭打つとはこの事だろう。

「奏丞、さつきからわからない事だらけなんだが、とりあえずあの男達はどうしたんだい
!？」

「血管に直接アルコールを注入した！ 部屋にいた二人以外の敵全員にだ！」

「アルコール？ 確かに酔っ払いみたいなの状態だったけど、だが二人つてのは」

「あの部屋にはもう一人、姿が見えない奴がいたんだ！ 俺達の真後ろにね！」

「…………何が何だかわからなくなってきたよ」

説明している間に台所に到着した。

この部屋の入口には扉がない。なのでテーブルを立て掛け、申し訳程度のバリケードにする。あくまで侵入に気付く為のバリケードなのでこれでいい。決着はここでつけるつもりだ。

「えーと、これとこれとこれと……………」

「……今度は何してんだい？」

「目印」

簡潔にそう答えた。

二酸化炭素を探知するエアロ・スミスで敵の位置を確認しつつ、小麦粉等の粉類や、牛乳や醤油等色がついた液体を床に並べていく。姿が見えなくても、これをぶっかけてやれば良い目印になるだろう。

「あんたは本当にかわいげがないガキだねえ……」

「失敬な、知恵が回る子と言ってくれ」

「小賢しいって言うんだよ、このエセ二歳児」

「さつきからひどい言い草じゃね？ ……これ、今から床にまくけどいい？ 答えは聞
いてない」

「だったら聞くんじやないよ……あたしも手伝うよ」

「サンキュ」

牛乳やら醤油やらを床にぶちまける。これで探知ができるスタンドを使わずとも居場所がわかるだろう。直接ぶっかけて身体の輪郭がわかる様になれば尚良しだ。

「とりあえずばーちゃんはそこに隠れてくれ。俺が来た奴をぶっ倒す」

「……わかったよ。だけど奏丞、あんたは奴らの事を知ってたのかい？」

施設長はそう聞いてきた。オープンキッチンの陰に隠れてしまったので、その表情を見る事はできない。

「いや、知らないよ。でも見当はつく。どうせ俺を^{モルモット}実験材料にしようとしてるんだろ」「それだけわかってりや十分さね。

……今更言うのもなんだが、あんた、今すぐここから逃げな」

「……………」

「あんたの予想通り、奴らは異常の研究の為にこうして襲って来てる。奴らは貪欲だからね、一度追い払ったって簡単には諦めないだろう。ここで勝っても根本的解決にはならないんだ」

「……………なら、どうしたらいい?」

「隠れるんだ、奴らに見つからない様に。人吉の家は度々行ってるから憶えてるね?ひとまずあの子の所に匿ってもらうんだ。あたしが時間を稼いでる間にこっそり逃げな。あんた一人ならできるだろ?」

元部下にはろくな奴がいないが、あの子だけは信頼できる。彼女はそう言った。

しかし奏丞はその案に頷く事はできない。

「ばーちゃんが囿になったとして、ばーちゃんは一体どうなるんだ?」

「……………」

「それだけじゃない、ばーちゃんに何かあったら兄貴達はどうなる？ 俺がいなくなれば、あいつらはここにはもう絶対来ないの？」

「それは……」

もしかしたら居場所を曝るよう拷問でもされるかもしれない。人質にされるかもしれない。親がいない子供三人、仲良く連れて行かれるかもしれない。悪い未来はいくらでも想像できた。

「厄介事を呼び込んだ張本人だけが逃げるなんて冗談じゃない。そんな事をするぐらいなら俺は自分からあいつらについて行く。俺は絶対に逃げないよ」

「でも現にどうにもならないだろう！ それともあたしにあんたを差し出す様な真似をしろって事かい!？」

施設長が怒声をあげるが、それに反して奏丞の心は落ち着いていった。

結局の所、彼女は誰にも傷ついてほしくないのだ。皆が大切に天秤にかける事ができないのだ。

そして、それは奏丞も同じだった。

「ばーちゃん、さつき『やりたい様にやれ』って言うてくれたよな」

「はっ、あたしやそんな事言った覚えはないね」

「なんだ、もうボケが始まってたのか」

「ぶっ飛ばすよクソガキ」

「クソガキでいいぜ。それでも俺は逃げないからな」

「……………」

「俺はやりたい様にやる。皆で明日を迎えられる、最善の道を選ぶ。ばーちゃんはどっしり構えて待つててくれよ」

「そんな都合良くできるわけが」

「できる！」

「！」

エアロ・スミスが敵の居場所を教えてください。敵はもう、入口の所まで来ている。

スタンドを換え、準備は整った。

「俺は『スタンド使い』だからなッ!!」

——ピチャツ、ピチャツ

濡れた床を何かが転がる音が聞こえてきた。入口を塞ぐテーブルの隙間から透明な何かが投げ込まれたのだ。

「無駄無駄、『エピタフ』で見えてるぜ！」

数秒先の未来を見れる、キング・クリムゾンのエピタフ。その未来が示すのは、光と音で埋め尽くされた世界だった。投げ込まれたのは、スタングレネード。

「耳を塞いでー！」

隠れている彼女にそう叫ぶ。隠れていても爆音は防げないが、処理する時間もないので、なんとか耐えてもらおうしかない。

「キング・クリムゾンッ！」

過程は消え去り、結果だけが残る！

『スタングレネードが爆発し、テーブルを押し退け突入してきた』過程は消え、『突入した』という結果だけが残るッ!!

「そしてお前の居場所もよくわかるぜッ！」

床に広がる液体が跳ねる様子を、消えて行く世界の中で見つける。そこに駆け寄って行き、世界が元通りになった瞬間、

「オラオラオラオラオラアッ!!」

「——ッ!?!」

硬いモノにラッシュが命中。吹き飛んだ所へ瓶入りのソースを投げつけ、皇帝エンペラーで撃ち抜いた。

バラまかれたソースは空間を染め上げ、見る見るうちに装甲服の様な物が現れる。

「二歳児相手に物騒な装備しやがって……」

しかし二歳児だからこそ重装備が一人だけですんだのかもしれない。何人も押し掛

けて来られていたら、奏丞も危なかつただろう。そう考えれば不幸中の幸いといった所か。

「おっと、妙な真似はするなよ？ あんたを倒すのは簡単だが、これ以上やりあうのも面倒だし、聞きたい事もある。

でも顔くらいは確認しておきたいからな、とりあえずその体勢のまま、ヘルメットを外してもらおうか」

ソースで真つ黒になった装甲服が僅かに身動ぎした、次の瞬間。

「――」

まるでテレビを消すかの様に、パツと装甲服が消えてしまった。付着していたソースと一緒に。

「……ま、そりやそうだよな」

消えた場所を見つめながら呟く。当然だ、こんな子供の命令を素直に聞くわけがない。

このまま不意打ちしてくるか、逃げるのか、もしかすると人質をとろうとしているのか……しかし、そんな事は関係ない。

奴は既に捕らえているのだ。周囲に張り巡らした、緑色の紐によって。

「さあ、お仕置きの時間だ、つてな」

——ピンッ

ガガガガガガガガガガガガガッ!!

「——ッ!!」
ハイエロフアント

法 皇の結界が反応し、エメラルドスプラッシュが発射される。

空中からはひたすら硬い物を打ち付ける音が聞こえ、やがて……

「やつと姿を現したな」

「——ッ!」

雨霞と降り注ぐエネルギー弾に晒されてスキルが解けたのか、装甲服の全貌が現れた。

あちこちが凹みボロボロになっているが、逆にここまでやっても分解していないのを見ると、恐ろしく頑丈な装備だ。余程金が掛かっているんだろう。

現れた姿を見て、奏丞は一度法皇ハイエロフアント・グリーンの緑を解除する。

「じゃあ今度こそ色々教えてもらおうぜ。その物騒な服も脱いでな」

「……………」

倒れたままの装甲服に近づいて行き、

「——! (ガバッ)」

一瞬で身体を起こし、襲いかかって来た装甲服に。

「アリアリアリアリアリアリアリアリアリアリア！」

「——ッ!?!」

ステイツキイ・フィンガーズのラッシュを叩き込まれ、その身体には縦横無尽にジツパーが貼り付く。

そして、そのジツパーを開いてやれば。

「なっ、なあ!?!」

「やあ、ご機嫌よう」

装甲服が分解した。

中から出て来た、ピツチリとしたタイツを着た男が愕然とこちらを見る。

「——そしてさよならだ」

ドゴオッ!

「あばあっ!?!」

拳一閃。

堅牢、かつ不可視という恐るべき敵は、このトドメの一撃で漸く沈黙したのであった。

☆ ☆ ☆

「やっぱり狙いは俺のスキルだったな。抵抗されたら死なない程度に傷つけてもいいとか……もうちよつと手加減しろよ」

「これもスタンド能力って奴かい。人を本にするなんて、どう考えても異常どころじゃないよ……」

「まあ、スタンドは完全にオカルトな能力だしね。人を本にしたり壊れた物を直したり」「過負荷^{マイナス}とも違うみたいだし、他にもヘンテコな能力持つてんじゃないのかい？」

「さて、どうかかなー」

あれから気絶していた施設長を起こし、倒した敵全員をリビングに集めていた。泥酔状態だけでは心許ないので、ヘブンズ・ドアを使って完全に無力化する。

そうしたら次は情報収集の前に互いの情報交換だ。

奏丞はスタンドの概要を説明し、施設長は過去にしていた仕事について話す。今回の件でお互い隠す事はできなくなってしまうからだ。

「なるほど、あんたはスタンドとは別にスキルを無効化できる異常も持つてたのか。それはそれで、確かに珍しいスキルだ。こいつらにとつたらとても興味深いスキルだろう

ね」

「こつちにはいい迷惑だよ。部下の教育はちゃんとしといてくれよ、ばーちゃん」
「やった結果がご覧の有り様さ。あたしじゃ何も変えられなかつたんだよ」

施設長は元は異常を専門にした医者兼研究者だつたらしい。その中でもそれなりの高い地位にいたらしく、日々行われる非人道的な実験の数々を何とか止めさせようと動いていたが。

「結局あたしには闇を暴ききれず、最後は逃げ出したのさ。あんた達を養う事が贖罪になるなんて考えていたけど、所詮はそんなもの、自己満足に過ぎないんだ。……悪いね、奏丞。育ての親がこんなみつともない人間で」

「あ、そういうシリアスはいらない。ぶっちゃけどうでも「あ、あ、？」ごめんなさい……」

ギロリと睨まれ、つい謝ってしまった。

「でも実際そんな事は関係ないよ。俺達がばーちゃんを偽善者だなんて言つて恨むと思つて」

「……………」

「安心してくれよ。ばーちゃんの言う自己満足が俺達を救つてくれたのは確かなんだ。俺達はばーちゃんに感謝してるし、ばーちゃんが親でよかつたと思つてる。何があつ

たつてそれは変わらないよ」

「……フン」

施設長は照れを隠す様に鼻を鳴らした。

それを見てこっさり笑いながら、奏丞は作業を続ける。

「えーと、とりあえずこいつらには『世の為人の為に尽力する』とでも書いておくか」
「だがこいつらは命令されて来た駒に過ぎないよ。命令した奴は片付いてないし、駒もまだまだ残ってる。今度こいつみたいに身を固めた奴らがゾロゾロ来たら……」

そう、ただ撃退していくだけでは問題は解決しないのだ。主要人物を片っ端から操つてやれば解決するだろうが、それでは時間も手間もかかり過ぎる。

ならばどうするかという……

「よし、報復として、こいつらを差し向けてきた研究施設内のデータを全部吹っ飛ばしちゃおう」

「はあ？ そんな事が……」

「できるんだなーこれが。そんでこの報復を警告ととってもらおう。手を出して来たら、お前らの研究成果は全部消すぞつてな。異常一人と数多くの異常のデータ、どつちか選ぶなら後者だろ」

「……しかしそう上手くいくかい？ 逆恨みでもされたら……」

「俺に手を出す事のリスクがわかってもらえれば、強行しようとする奴も向こうが勝手に止めてくれるさ。獅子の身中に放り込める虫も手に入ったし、案外早く諦めてもらえると思うよ」

「つくづくガキらしくないガキだね。本当に大丈夫なんだろうね？」

「……たぶん？」

「そこは嘘でも大丈夫って言うもんだよ……」

施設長は一つ溜め息をつく。

「……わかった、ならやつちまいな。失敗してもあたしが全力で庇ってやる。下手したら他の三人も路頭に迷うかもしれないけど、せいぜい成功する様に頑張りな」

「余計なプレッシャー与えてどうすんだよこのババ（ガスン！）いつてえー！ 幼児虐待だぞ?! 訴えたら勝てるレベル！」

「残念ながら敗訴だクソガキ。ごちやごちや言っていないでさつさとやるよ。何か必要な物はあるかい？」

「いてて……何もいらないし、今この場で始められるよ」

「確かにさつさとつて言ったけどねえ。まあいい、だったら早く片付けちまいな。いい加減夕食の準備もしないといけなからね」

「言われなくても」

そう言う奏丞の隣に、バチバチと帯電するスタンドが現れる。遠隔操作型にも関わらず、条件次第で近距離パワー型並のパワーを發揮できるスタンドが。

「ここ、これが『スタンド』!?! 普通は見えないとか言ってたかいたかい!?!」

「こいつは電気と一体化したスタンドだから、普通の人にも見えるんだよ。そして、電線が通る場所ならどこにでも侵入できる!」

いざ、平和な明日を迎える為に。

「さあ、ぶっ壊すぞ! レッド・ホット・チリペッパー!!」

俺達の本当の戦いはこれからだ!

第五話：黒神邸と幽波紋！

「……善吉、こいつをどう思う？」

「すごく……大きいよ」

エロい意味だと思った？

「私の実家、通称『黒神邸』。私が人を招くのは貴様達が最初になる」

「いや、それはいいんだけど……お前んちデカ過ぎだろ」

「すごいすごい、僕の家が建てられちゃう！ デパートに来たみたい！」

「広いだけだ、商店の様に目新しい物もない」

残念、めだかちゃんのお家でした！

さて、本日は奏丞と善吉が黒神家を訪れたわけだが、特に深い理由はない。きっかけはあるめだかの気付きからだった。

「奏丞の家も善吉の家にも行ったのに、私の家で遊んだ事はないな。よし、明日は貴様達を我が家に招待しよう」

と、言い始め、今日それぞれの家にリムジンで迎えに来たのだ。

そしてそれにホイホイついて行き、めだかの家を見て出た第一声が冒頭の会話である。

まあ、家の大きさにも驚いたんだが……

「めだか、この服は洗濯して返した方がいいのか……？」

「返却は不要だ。そもそもドレスコードの事を伝えていなかったこちらに落ち度がある。遠慮はいらん、迷惑料とでも思つて受け取つておけ。

では行くぞ、ついて来るがよい」

車内で着せられた服、総額一千万円以上。黒神邸ではドレスコードがあり、一千万円以上の服を着なければ入れないとか何とか。ドーという事なの。

俺の独断で日本一カレラうどんが似合わない家に認定しようと思う。

「んじゃ、今日は何しようか。せっかく初めてめだかんちに来たんだし、それらしい遊びでもしたいもんだけど」

「そうだな、玩具の類いは一通り揃っているが、今日はそれで遊ぶか？」

「うーん、じゃあ鬼ごっこはどう？」

「玩具があると言われて鬼ごっこを選んじやうか。でも善吉、人様の家で走り回っちゃ駄目なんだぞ？」

「ふーん、わかつたよー」

もしかすると幼児期はそれほど変態ではなかったのかも……

「妹の友達って事は僕の妹も同然だね。僕の事は気軽にお兄ちゃんって呼んでよ！」

訂正、既に片鱗が表れていた。

「……いや、俺は真黒さんって呼ばせてもらいます。善吉もそう呼ぼうな？」

「うん！ よろしくね真黒さん！」

「はっはっは、二人共照れ屋さんだなあ」

照れ屋ではなく、間違つても妹と認識されたくないだけだった。

「しかしお兄様、私達に一体何の用ですか」

「ふふふ、だつてめだかちゃんが初めて友達を連れて来たんだよ？ お兄ちゃんとして

は挨拶しないわけにはいかないじゃないか！」

「……それでは挨拶も終わった事ですし、もう用はありませんね。私達は今後の予定を

話し合わねばならないので」

「つれない事言わないでよ！ 僕も皆と一緒に遊びたいよー！」

「そんな所で駄々を捏ねないでください」

「うーん、いいんじゃないか、せっかくなんだし。ちよつとアレだけど実害はないだろう

しな」

「奏丞」

「僕もいいよ！　一緒に遊ぼうよ真黒さん！」

「善吉もか……」

「おつ、二人共ありがとう！　というわけで僕も一緒に遊ぶからね、めだかちゃん！」

「……二人がそう言うのなら、仕方ありません」

許可を貰い、満面の笑みを見せる真黒。超人めだかも多数決には抗えなかったらしい。

「じゃあ何をして遊ぼうか」

「それを話し合っていた所です。今の所鬼ごっこが有力候補ですが」

「おつとここでも多数決の弊害が。真黒さん、何かいい案はありませんか？　このままだと俺、ぶつ倒れるまで鬼に追いかけられそうなんです」

「そうだねえ、かくれんぼなんてどうだい？　この家は隠れる場所ならいっぱいあるし。それに遊びながら探検してもらえば一石二鳥！」

「かくれんぼ？　いいよ、やろうやろう！」

「初めて来た家で勝手に歩き回ってもいいんだらうか。でも他にいい案ないしなあ……」

「しかしそれならば屋敷の構造を知らない奏丞と善吉は探すのが不利になる。鬼は私がお兄様が……いや、招待した手前、私が鬼になろう」

かくしてかくれんぼをする事に決まり、鬼はめだか、他三人が隠れる事となった。

「範囲は屋敷全体。私は貴様達がこの部屋を出て三十分後に探し始めよう」

「ちよつと待て、範囲が広すぎやしないか？ この家、外から見た分だと相当でかいぞ。待ち時間もかなり長いし」

「私はこの屋敷の構造は全て把握している。貴様達を見つける事など造作ない。それに貴様達が場所を探すには、時間もそれくらいはかかるだろう。ついでに我が家の見学でもして行くといい」

「お前はホントにチートだな……」

スタンドありきの奏丞とは違い、めだかは素でそんな事をやってのける。構造を把握してるぐらいじゃどうにもならんだろうと思うが、そこはめだかだからしょうがないのだろう。自分よりチートだと思うのは気のせいではない筈だ。

「ふつ、心配せずとも貴様もすぐに見つけてやろう。安心して隠れるがよい」

「……おーおー。好き勝手言いなさる。これにはウージさんも苦笑いだよ。ナメんなよ、俺が本気になったら帰る時間になるまで出て来ねーぜ」

「ほう、それは楽しみだ。しかし地の利はこちらにある。鬼ごつこの時とは違い、見つけた時点で貴様の敗北なのも憶えておくがよい」

「あつたりめーだ」

四人でやる筈のかくれんぼが、何故か奏丞とめだかの勝負を呈してきた。実はこの二人、ある因縁がある。

「……めだかちゃんが張り合う所なんて初めて見たな。善吉くんは何か理由を知ってる？」

「うん。前に皆で鬼ごっこをした時なんだけどね、最後にめだかちゃんが奏丞くんを捕まえようとしたんだけど、奏丞くんが全部避けちゃって」

「よ、避ける……？」

「そうだよー。こう、ハッ！ ホッ！ って」

「そ、それは凄いなあ」

単に意地になった奏丞がスタンドを使っていただけである。

この上なく大人気ない真相だった。

「では始めるぞ。部屋を出たら扉を閉める。私は扉が閉まってから1800秒カウントした後に行く」

「よし、じゃあ行くか」

「うん！ がんばってね、めだかちゃん！」

「お兄ちゃんもちゃんと見つけてくれよ？」

いよいよかくれんぼが始まった。めだか一人を残し、三人で部屋を出て……扉を閉め

た。

「じゃあみんな、どこに隠れよっか？」

「それなら僕に任せてよ。隠れる場所ならいっぱい知ってるよ」

「あー、それなんですけど。真黒さん、ここは二手に別れませんか？ 隠れるならバラバラに隠れた方がいいですし」

「二手に？ うーん、確かにその方が良さそうだね。でも誰と誰が一緒に行く？」

「真黒さんには、できれば善吉について行ってあげてほしいです。この屋敷は広いから迷っちゃいそうで。ついでに隠れるのにいい場所をアドバイスしてあげてもらえれば……」

「それはいいんだけど、奏丞くんは大丈夫かい？ この家に不慣れなのは、君もおんなじだろ？」

「道はちゃんと覚えて行くんで大丈夫です。隠れ場所はわかりませんが……まあ、なんとかします」

「……わかった、じゃあ僕は善吉くんと一緒に行くよ。奏丞くんも頑張つて隠れてね」

「はい、最後まで隠れ切ってみせますよ」

「んー？ 僕は真黒さんと行くの？」

「おう、ここで一旦別れよう。善吉はいい場所を教えてもらおうといいよ」

「わかった！ 真黒さんよろしくお願いします！」

「うん、任せて。じゃあ、そろそろ動こうか。僕達はこっちに行こう」

「なら俺はこつちですね。頑張れよ、善吉！」

「奏丞くんもね！ 行こう真黒さん！」

次に会うのはお互いが見つけられた時。理想の隠れ場所を求め、三人はそれぞれの方
向へ走って行ったのだった。

☆ ☆ ☆

別行動をした事に邪な理由はない。善吉が道に迷いかねないと思ったのは本当だし、
めだかが見つけに来るまで知らない場所で一人しておくのが心配だった事も確かだ。

どうも善吉には過保護になりやすいが、将来があんなになるとは思えない程無垢な善
吉を見ていると、過保護になってしまうのも仕方がない……と思う。なんだか弟がで
きた様な気分になるのだ。

なに、めだか？ いやいや、あれはないわー。

「さてさて、どこに隠れようか」

手当たり次第扉を開け、中を確認していくが、眼鏡に適う場所は見つからない。

屋敷の構造を全て把握していると言った以上、めだかは隠れるのに適した場所も全て知っているだろう。ぶつちやけ、真黒が知っている場所は真つ先に狙われかねない。

そんな考えもあつて単独行動をするあたり、奏丞もめだかの事を言えないぐらいには本気だった。

「ん？ ハハハは……」

一際大きい扉を発見。開いてみると、天井まで伸びた巨大な本棚と、隙間なくそれに詰められた大量の本が目飛び込んできた。流石は金持ちの書庫と言うべきか、そんなじよそこのら図書館など目じやない量の本だ。

……が、しかし。奏丞は知っている。ここにはヒジョーに面倒な思想を持つ少女がいる事を。

「誰だてめー、新手の強盗か？」

「見つかんの早えーよ……」

ついつい本棚に目を奪われて気付かなかつたが、部屋の隅にはこれまた大量に本が積み重なった机があり、その前には目に隈を作った少女が一人座っていた。

恐らく彼女こそが面倒な思想を持つ少女、『黒神くじら』だ。

「あー、強盗じゃなくてだな。俺はめだかの友達の宇城奏丞ってもんなんだが……」
「妹の友達だと？ そんな奴が私に何の用がある」

「ああ、今俺達かくれんぼしてる所で、どこかにいい隠れ場所がないかなーと……」

「……………」
「……………」

苦虫を噛み潰した様な表情で沈黙するくじら。なんとも胃が痛くなってくる沈黙だ。

しかし、どうせ出て行けと言われるだろう。そう言われる前にさっさと出て行こうと思っただが。

「……………好きにしろ」

「……………は？ それはあれか、いて良いって事か？」

「そもそもここは私の所有物じゃない。他人だろうが、家のもんが良いって言ったなら使う権利はあるだろうよ」

思わぬ返事が返って来た。てっきり有無を言わさず叩き出されるかと思っていたが。それからくじらは興味を失ったかの様に机に向き直った。

「だが邪魔はするなよ。てめーみたいなガキに構ってられる程、私は暇じゃないんだ」

「あー、念の為に聞いておくけど、何やってるんだ？」

「見てわかんねーか？ 学究に打ち込んでるんだよ」

「……それにしちゃ随分薄汚れてるし、隈もひどいぞ。その巻き付いてる鎖なんか学究にはまったく関係ないだろ」

「ハッ、てめーなんかにはわかんねーだろうよ。これは私が不幸になる為に必要な事だ」
「不幸と勉強は関係なくね？」

「いいやあるね、大ありだ。何故なら『素晴らしいものは地獄からしか生まれぬ』!!」
そう言つて再びこちらを向いたくじらの顔には鬼気迫るものがあつた。

「楽しむ事は怠ける事で！ 喜ぶ事はだらける事で！ 笑う事は不真面目な事だ！ 歴史上の天才達が不遇な人生を送り、偉大な発見を劣等感から生み出した様に！ 私も決して幸福であつてはならないんだ!!」

「ギリシア人が文化を発展させられたのは奴隷に仕事与えて暇人になつたからつて聞いた事あんぞ」

「……」
「ニユートンが落ちるリンゴを見るには外で散歩でもしてないと見れないだろうし、アインシュタインはモーツアルトの曲が大好きだつたつて聞いた事があるし、その他の偉人達だつてバリバリ恋愛したり、趣味持つたりしてたと思うぞ」

「……」
「お前が言う地獄で始終暮らしてた奴なんて、いないんじゃないの？ 苦難も幸福も全

部ひつくるめた人生だったからこそ、偉人達は後で教科書に載る事ができたんだと俺は思うぞ」

「……お前なかなか台無しな事言いやがるな。つまり何が言いてーんだよ」

「べつにー？ 俺は単に地獄って所には素晴らしいものはないんじゃないかなーと
思っただけだよ」

「無駄だったって言いたいのか。私のこれまでの人生が……」

「地獄じゃ何も生まれないとは言わねーよ？ お前の言う素晴らしいものももしかしたら生まれるかもしれない。だけど俺風に言えば『地獄からはおぞましいものしか生まれない』。俺はそう思っただけだ」

しばし無言で見つめ合う。

先に根負けしたのはくじらの方だった。

「……チツ、てめー実は兄貴に頼まれて来たとかじゃねーだろうな。要するに外に出ろって言いたいだけじゃねえか」

「いや、ここに来たのは偶然。真黒さんから何も聞いてないよ」

「つまり遊びでここに来たって事だな。気楽なもんだぜ、人の生き方をさんざ好き勝手に言っついてよ」

「あー、その、なんだ……悪いな」

「謝ってんじやねーよ。てめーの言い分も間違っちゃいねーと思うしな……」

「え？ なんだつて？」

「難聴主人公かこの野郎……もう話は終わりだ。私は勉強に励みたいんだ、てめーは勝手に隠れて勝手に出て行け」

「……そつか、悪いな、手間とらせた」

今度こそくじらは机に向き直り、ペンを動かし始めた。つまりこれで本当にこの話は終わりという事だ。

……流石に初対面の赤の他人が、言葉で生き方を変えるなんてのは無理があつたか。普段は便利なスタンドだけど、こーいう時に限って役に立たないんだよなあー。

そんな事を考えながら、何となく一架の本棚を下から順に見ていってみると。

「(んん？ あれは……)」

本棚に並ぶ哲学書、思想書、数学書、医学書……そんな難解な書物の数々に紛れ、スタープラチナの目を使うぐらいに高い所にある、異色の本。

『赤木が教える麻雀入門書』

「(やだ、すごい気になる……！)」

同姓の別人なのかマジモンなのか。どっちにしても中身はぶっ飛んでそうだ。だがそこがいい。異彩を放つそれを読みたいという欲求がふつつつ湧き上がってく

る。

「……なあ、ここの本読ませてもらっていいか？」

「勝手に読め」

「サンキュ」

許可も貰ったので、早速その本を取ってみる事にする。

くじらがこつちを向いていないのを確認して。

「(行け、エコーズ)」

射程距離が長いエコーズACTIを飛ばし、目的の本を取る。そして自分の下へ持つて来させて――

「おい、高い所にある本ならその梯子を使って……」

「あ……」

突然くじらが振り向き、こちらを見た。エコーズが手を放し、トサツと本が手に落ちて来る。

「……」

「……」

「……おい」

「な、なんででしょう……」

「今、その本浮いてたよなあ……?」

完全に見られていた……いい、いやっ、まだわからない!

「は、はあ? 意味わかんねえって。本が浮くわけないだろ」

「私はよ、書庫の本の位置は全部憶えてるんだぜ……」

T T T T T T T T T T T T T T T T

「そいつは棚の一番上にあつた本だ。梯子も使わずどうやって取つたんだ?」

「え、いや、その……」

「落ちて来た速度もおかしかった。あの高さからそんな分厚い本を自由落下させれば、そんな軽い音でキャッチできる筈がないしな……」

「……………」

ガチャンガチャンと、拘束していた鎖を何故か外し始めたくじら。奏丞にはその音がまるで自分に近づいて来る死神の足音にも聞こえた。

「ちよつともう一回やってみせろよ」

「まあ待て、そして落ち着け。とりあえず話し合おう。言葉のキャッチボールにそんな鋭いシャーペンは不要だぞ?」

「いいからやれつつつてんだろ!」

「のわっ!? てめっ、今足狙つたな!! 何冷静に攻撃してんだ、逆に怖いわ!」

「安心しろ、足が動かなくなってもオネーサンがなんとかしてやるからよオ！」
「動かない時点でもうアウトだよ！」

くじらが突き出すシャーペンを回避しつつ、どうこの状況を打開するか考える。
「俺に勝機はッ?!? ぬ、ぬあああ！」

断末魔の一瞬！ 奏丞の精神内に潜む爆発力がとてつもない冒険を産んだ！

普通の人間は追い詰められ秘密がバレそうになれば誤魔化そうとばかり考える。
だが奏丞は違った！

逆に！ 奏丞はなんとさらに！

秘密を晒した！

——なに奏丞？ 大晦日は紅白よりもガキ使を見せる？ 奏丞、それは意地を張るか
らだよ。逆に考えな。「紅白でもいいさ」と考えるんだ……

「……いいいぜ、お望み通り見せてやる」

「おっ、話がわかるじゃねーか」

「くじらが自ら拘束具を外した……つまり今、この瞬間は不幸よりも未知の現象に興味
を示したという事……これはくじらをこの牢獄から連れ出すチャンスになるはず！」

急かすくじらを尻目に、自分の懐からセラミックスと磁石を取り出す。

「……お前何やってんだ？」

セラミックスに手をかざし、ホワイト・アルバムで超低温にした後、その上に磁石を置けば……

「はい、浮き上がった」

「それは超伝導だろうが！」

やっぱり怒られた。

「ふざけんなよ、お前さつきは本を手で触れずに……いや、ちよつと待て」

くじらは気付く、その異常に。

「磁石を持つていたのはいい。セラミックスを持つていたのも、まあいい。要は陶磁器やガラスだからな。だが、超伝導を起こさせる程の低温だと……？ 本来液体窒素を持ち出す様な温度を、素手で発生させただと……!?!」

「……………(ニヤツ)」

「T T T T T T T T T T T T」

「てめえ、一体何をした!?!」

「はっはっは、教えるわけないだろ。お望み通り浮かべてやったんだ、これで文句はないな！」

「いや、ますます聞きたい事が増えたね！ ちよつと解剖させろ！」

「いやだね！」

「なら力ずくだ！」

くじらがシャーペンを投擲してくるが、危なげなく回避する。今のは確実に目を狙っていてかなり怖かった。

「ケツ、お前みたいなモヤシっ子に俺が捕まるかよ！ 肉喰って出直して来やがれ！」

「てめー調子にのってんじゃねーぞ！ 大人しくしてやがれ！」

「ここにいたか、奏丞！」

「お？」

「ああ？」

やって来たのはめだかだった。……かくれんぼの最中だった事をすっかり忘れていた。

先に見つかったのか、その後ろには善吉と真黒を連れている。奏丞は最後に見つかったらしい。

「まったく、こんな所に隠れるとはな。しかしここにはくじ姉がいた筈だが……」

「いい所に来たなめだか！ そいつを捕まえろ！」

「む、そいつとは奏丞の事ですか？ お姉さまの頼みとあらば吝かではありませんが」

「なにい!? めだか、お前は俺の味方だよな!？」

「敵になるつもりはない。しかしああも生き生きしたお姉さまを見たのは初めてでな

……」

「くじらちゃんどうしたんだい？ 机から離れるなんて珍しいじゃないか」

「兄貴までいるのか……まあいい、とにかく全員でそいつを捕まえろ！ 絶対に逃がすなよー！」

「ふむ、話は見えないが、他ならないくじ姉の頼みだ。この前の鬼ごっここのリベンジといこうではないか、奏丞」

「どうやってくじらちゃんを動かさせたのか、お兄ちゃんも気になるな。奏丞くん、僕にも話を聞かせてもらおうよー！」

「えっと、奏丞くんを捕まえればいいんだね？ 任せてよー！」

「ええっ、何その唐突な四面楚歌!?!」

「一気に敵が四人に増えてしまった。出入口には裏切り者が三人、傍にはマットが一人。救援は、ない。」

「だが、俺は絶対に逃げ切ってやるからな！」

とにかくこの部屋を脱出しなくては。その為にも、まずはあの裏切り者達を突破する！

「勝負だ、奏丞！」

「いくよ奏丞くん！」

「ふっふっふ、愛する妹の為にもここは通さないよ！」

「……てめーはこの私が絶対に捕まえて解剖してやるからな、奏丞！」

「……ふんっ、やれるもんならやってみやがれ、くじら！」

今日を生き残るべく、奏丞はスタンダパワーを全開にしながら、出口に向かって走り出したのだった。

……そして最後に、彼がこの耐久鬼ごっこでなんとか生き残った事を、ここに記しておく。

第六話：ヤンデレさんと幽波紋!

善吉とめだかとはよく遊ぶが、自分一人の時間がないわけではない。

例えば今日のように二人と遊べない時は、奏丞は一人で施設で遊んだり、近所の公園に出かけてみたりする。

なんとなくだが、今日は公園に行きたい気分だった。

「さーて、今日こそは『黄金長方形』を見つけろぞ」

今まで何とか見つけようとしていたものの、未だに黄金長方形を見つける事はできていない。おかげで使える牙はAC^{タスク}TI⁴だけだ。ビジュアルは微妙な感じだが、AC^{タスク}TI⁴はやっぱり使ってみたかった。初登場時の演出には非常に燃えた覚えがある。

まあ、強引に見つけられる様にするという手もあるにはあるが……

そんな事を考えているうちに公園に到着。

テレビゲームが普及した今日では外で遊ぶ子供がいないのか、普段公園内は閑散としているが……

「お、珍しい」

子供が一人、花壇の前に座り込んでいた。こちらに背を向けているので顔は見えないが、頭にリボンをつけているから女の子じゃないかと予想する。

何をしているか知らないが、しかしわざわざ話しかける理由もない。当初はその花壇で黄金長方形を探そうと思っていたが、公園内の花壇は一ヶ所ではないのだ。そこらの木の葉っぱや虫の中を探したっていい。

なので奏丞はその子を気にせず、別の花壇に行つて花を観察してみる事にした。

——三十分後——

「わっかんねー……」

奏丞は下が土なのも気にせず、ゴロンと大の字に倒れた。汚い子供だからこそ許される行為だろう。

探してみたが、どうにも「これだ！」と直感できる事がない。試しにタスクを回してみても、やはり小動物の様なスタンド像は変化しなかった。自然の中の『美』を感じ取れとは言いが、センスがなければ一生無理なんじゃないだろうか。それとも死の間際の様な集中力でも必要なのか。

しかし諦めるつもりもないので、身体を起こして再び花壇の中から探し始めようとしていると。

「何がわからないの?」

「あん?」

振り向いてみると、奏丞の背後に女の子が立っていた。恐らく花壇の前に座っていた子だろうが……

「(……ゲツ、この子は!?)」

黄金長方形はわからないが、その女の子にはビビッと来た。

「ねえねえ、何がわからないの?」

「え……えっと、花に隠されてる物を見つけてやろうと思って」

「お花の中に? お花は何か隠しているの?」

「花だけじゃなくて、実は植物にも動物にも、自然の生き物は全て同じ物を隠してる筈なんだよ。法則みたいなもんなんだけど」

「……それなら私知ってる」

「は?」

「植物にも動物にもある法則なんですよ? それ、私知ってるよ」

そう言って女の子はこちらに両手を見せる。

「植物も動物もみんな等しく、腐ってしまうの。私がこの手で触れた物はなんであれ、生物であれ無生物であれ有機物であれ無機物であれ、腐ってしまうの」

「……………」

……実に反応に困る。

奏丞は今の言葉で確信できた。やはりこの子のかのヤンデレさん、『江迎怒江』に違いない。この異様な雰囲気も、かつて対峙した球磨川禊と非常に似ている。

何故こんな所で会う事になったのかわからないが……まあ、とりあえずそれは置いておこう。

「いや、俺が探してるのはそんなんじゃないよ」

「そんなことないわ、だって全てにある法則なんですよ？ あなただって腐って死ん

じやうのよ」

「そうでもないぞ」

「え？」

奏丞は差し出された両手を掴んだ。奏丞が保有する、スキルを防ぐスキル『傑壁晶』ハドロック。それによって、怒江のスキルは効かないのだ。

「どうだ、腐らないぞ」

「え……ええ？ 何で？ 何であなたは腐らないの？」

「俺はそういう体質なの」

そう言つて一度手を放すと、今度は怒江の方からおずおずと触ってくる。奏丞の手を握つてみたり、胸をつついてみたり、頬を触つてみたり。まるで未知の感触に出会つたかの様に、途中からは夢中になつて触つてきた。

「……………」

「…………ちよつ、何泣いてんだ!？」

「…………だつて」

その瞳からポロポロと涙をこぼし、

「死んじゃうの。私が触ると、可愛いわんちゃんを撫でて、可愛い猫ちゃんを抱いても、みんな腐つて死んじゃうの」

「だけど俺は腐らないだろ」

奏丞は頬に触れる怒江の手を掴み直し、安心させる為に言葉を続ける。

「いくらでも触るといい。泣くぐらい怖がらなくてもいいじゃあないか。安心しろ……安心しろよ……」

わりと安心できない人の言葉だった。

「…………本当に? 本当にいくらでも触らせてくれる?」

「もちろんだ。…………あー、でもその前にしておかなくちゃいけない事があつたな」

「……………」

「わかんないか？ 俺の名前は宇城奏丞だ。お前は？」

「あ……………わ、私は怒江、江迎怒江、です……………」

「自己紹介ぐらいはしとかないな。じゃあ俺はお前の事を怒江って呼ぶから、俺の事は奏丞って呼べ」

「え、いいの……………」

「もちろん。『友達』だからな」

「！」

その言葉を聞いて、怒江は目を見張った。

「と、友達……………」

「そ、友達」

「……………そ、奏丞くん」

「なんだ怒江」

「……………奏丞くん、奏丞くん！」

「はいはい、なんだい怒江」

「奏丞くん、私と友達になつてくれる!？」

「いや、だからそう言つて……………ああいや、うん、俺達はもう友達だぞ」

「奏丞くんっ!」

さっきまでの濁った目が嘘の様な幸せそうな表情で、怒江が奏丞に抱きついて来た。背中に手を回して全身で抱きつく怒江の背に、奏丞も同じ様に手を回す。

「奏丞くん、暖かいのね!」

「おう、生きてるからな」

「奏丞くん、私なんだか幸せ!」

「そうか、よかつたな」

「奏丞くん、これが運命の出会いなんだね!」

「……いや、どうだろうな」

「奏丞くん、幸せな家庭を築こうね!」

「……………」

「私知ってるの。悪い奴に呪いをかけられたお姫様が運命の王子様に助けてもらって一緒にお城に行って幸せに暮らしましたってお話! 初めて読んだ時はそんな都合良くいくわけねえだろって思ったけど、今思えば運命の王子様はちゃんといたんだね!」

だってこうして奏丞くんは私の手を取ってくれたし、抱きしめてくれたもん。運命じゃないならなんなんだって話よね! 違う所は私がお姫様じゃないって事ぐらいかな?

あ、別に奏丞くんの事を疑ってるわけじゃないのよ? 私の出自がそんなに凄い所

じゃないってだけ！ 奏丞くんが私を運命のお姫様だと思ってくれてる事はちゃんとわかっているんだから。それできつと奏丞くんはこれから私を自分のお家に連れて帰ってくれるつもりなんでしょう？ でもダメよそんなの。いや悪い事って意味じゃないのよ？ 奏丞くんの家には行きたいし、奏丞くんも私を連れて行きたいのはわかっている。でも私ばかり幸せにしたらうのは耐えられないわ。だって奏丞くんが私を幸せにしてくれる様に、私も奏丞くんを幸せにしてあげたいもの。一方的に与えるだけじゃやっぱり愛し合っているととは言わないじゃない？ でも私達は本当の意味で愛し合ってるんだから、奏丞くんが私からの愛を断るわけがないよね。それで提案だけど私の家で暮らしましょう。両親がいるけど説得は任せて。奏丞くんのお世話は全部私がするって言えばきつと許してくれるわ。結婚する報告もしなくちゃいけないんだし一石二鳥よね。私達の年齢で同棲生活っていうのはちよつと早いかもしれないけど、二人きりってわけでもないからこれはせいぜい同棲練習って所よね。でもそう考えると練習がこんなに遅れたのはいただけじゃないわ。早いどころか遅すぎよ。生まれた時からとは流石に言わないけど、せめて生後二週間ぐらいからは練習を始めたかったわね。まあ出会ったのが今日なんだし、残念だけど諦めるしかないかな。大切なのはこれからよ。でも結婚するからには奏丞くんのご両親にも挨拶しておかないといけないけど、私明日は家族でお引越しのよね。もちろん奏丞くんもそれについて来る事になるんだけ

ど、おかげで奏丞くんのご両親に会えるのもう少し先になりそう。まあ奏丞くんは構わないって言うてくれるだろうけど、というか私より家族を優先させるわけないだろうけど。それで聞きたいんだけど、奏丞くんの好きな食べ物って何かな? なぜつてもちろん今夜のメニューにするからよ。今日は初めて会った記念日だから奏丞くんの好物を揃えたいんだ。さつき言った通り奏丞くんのお世話は全部私がするんだから、今日から奏丞くんが口に入れる物は全部私が作るんだもの。料理した事はないからちよつと手間取るかもしれないけど、愛情いっぱいのお料理作っちゃうんだから。愛情は最高の調味料って言うし、奏丞くんはきつと全部美味しく食べてくれるよね。残されちゃったら私悲しいから奏丞くんのお腹に直接詰めたりするかもしれないけど。やだ、冗談よ冗談。それで他にするお世話と言えば何かな? 遊びたかったら私が一緒に遊んであげるし、トイレもお風呂も私がついてあげるし、お勉強道具も私が用意してあげるし、とりあえずそれで問題はないかな? あ、もしかしてお世話になりすぎて申し訳ないか思ってる? 気にしないでこれが私の気持ちなんだから。奏丞くんは私を愛してくれていればそれでいいの。だから他の事は何もしなくていいしする必要もないのよ。ふふつ、本当に楽しみな奏丞くん。当たり前だけど私達きつといい夫婦になるわ。結婚する日が待ち遠しいけど、結婚とは関係なくいつまでも愛し合っていいこうね!」

「……………ソウデスネ」

片言になるほど「ソウ」じゃなかった。

「(や、やべえ、なんだこの長台詞!?! まさかこの歳でここまで覚醒していたとはッ!
こ、これは! ううつ……………ま、まずいッ!)」

結構呑気してた奏丞も、怒江が一瞬歪んで見えるほどのマイナス圧力にはビビった。

「な、なあ怒江」

「なあに奏丞くん」

怒江の肩を掴み、その目を見つめる。ほんのり頬を赤く染めている。物凄く幸せそうな顔だ。今の怒江にこんな事を言うとは反応が怖いが……………しかし言わねばならない。

「いいか怒江、落ち着いて聞けよ。そもそも俺はお前と結婚するつもりは」

ガッ!

「あぶなあー!?!」

「……………あれ?」

次の瞬間、スタープラチナが果物ナイフを掴んだ怒江の腕を押さえていた。肩を掴む奏丞の手をそれで刺そうとしたのだ。

「お前アホか! こんなもん持ち歩くな! そして刺そうとするな!」

「あ、ナイフ返してよ!」

「うるさい、没収だ没収! あと人刺すのも禁止!」

ナイフを取り上げるが、所持しているナイフが一本とは限らない。まだ隠し持っているかもしれないので気をつけねばならないだろう。

ナイフを没収された怒江はというと、不満そうにしながらも、不思議そうに自分の手を握ったり開いたりしている。

「まったく、いくら腐らないからって刃物が刺さらないわけじゃないんだぞ? そもそもそうやって衝動的に刃物を出す事自体が……」

「ねえ、奏丞くんも私みたいに変な事ができるの?」

「……………」

目の前でやれば、そりや気付く。

「……………まあ、できるな」

「大きな手に掴まれたみたいだったわ。あれは何だったの?」

「え?」

「ねえ、どんな力なの? 教えてよ」

「いや、大した能力じゃ」

「私の手の事は教えたのに、奏丞くんは教えてくれないの?」

「いや、その……」

そもそも基本的にスタンドはスタンド使いにしか見えないという設定があるのだ。手段を選ばないならば、困った時のヘブンズ・ドアーを使えばいける……かもしれない。試した事はないが、『スタンドが見える』と書き込めばいけるのかもしれない。

……電気スタンドやガソリンスタンドが見えるってオチにはならない筈だ。

「ねえねえ、スタンドが見える人ってどんな人なの？」

「……ん？ そうだな、俺と同じスタンド使いか、あるいは靈感が強かったら見えるかもしれない」

「じゃあ話は簡単よ、私もスタンド使いになればいいのよ！」

「いやいやいや、それは流石に……」

適性はあるが、スタンドのD I S Cを埋め込めばスタンド使いにはなれる。『矢』があれば自由にスタンドを目覚めさせる事もできたが、当然そんな物は持っていない。ブック・サブスが持っているかと思っていたが、あの矢はスタンドとは別物だったらしく、過去に確認したが持っていなかった。おそらく、アヌビス神が刀剣とセットになっていないのと同じ事なのだろう。

「能力が形を持ったのがスタンドなんですよ？ 私も両手で物を腐らせる事ができるし、だったらそれをスタンドにしてしまえばいいのよ」

「そうは言っても、お前の能力は過負荷って能力であって、スタンドとは……」

そこでふと気付く。

怒江の過負荷は両手で触る事で発動する。面白い事に、これはクレイジー・ダイヤモンドやゴールド・エクスペリエンスの様なスタンドと同じ発動条件だ。

「……いやいや、それだけで」

そもそも『過負荷』とは何なのか考えてみよう。

過負荷はめだかボックスの中でも解明されていないオカルトチックな能力だ。異常が（かろうじて）人間の能力の延長線上にあると説明できるのに比べて、過負荷は因果律や概念に干渉できる、説明不可能な能力だ。異常と過負荷、どちらがスタンド能力に似ているかと言われると……まず、過負荷だろう。

「……………」

過負荷の発現には人格や環境が関わっていたと思う。

まず人格についてだが、小説版ジョジョでは『群体型スタンドの本体は精神に決定的欠落を抱えている』という話があった。これは人格の影響を受けている過負荷とほとんど同じ話ではないだろうか。スタンドは本体の精神力で動くというし、そもそもそれ自体が精神エネルギーの塊。過負荷と同じく人格とも密接な関係はありそうだ。

環境についてはどうか。過負荷はその場の環境に合わせた能力が発現していたが、スタンドには特に環境が関わったという話がない。

……が、しかし。その環境に合わせた過負荷を発現させた手段に問題がある。なんと原作ではくじらが自らを改造して過負荷を発現させていたのだ。どう考えてもこれは『スタンドの矢』や『悪魔の手のひら』に相当する行為だろう。過負荷を薬品で発現させたと言うなら、スタンドはウィルスによって発現している。外的要因によって発現するという共通点まで存在していた。

以上より、こう結論できてしまう。

『過負荷とスタンドはかなり似ている』。

「どうしたの、急に考え込んだんじやって」

「……怒江、一応アテができたぞ。可能性は低いけど、もしかしたらお前もスタンド使いになれるかもしれない」

「本当!? じゃあ私達は名実共に似た者夫婦になるのね!」

「ああうん、もう突っ込まないぞ。」

ただその前に約束してほしい」

「約束?」

「ああ、約束だ。」

まず一つに、スタンドについてと、スタンドという形で能力が使えるのを誰にも喋らない事。まあ、後者はスタンド使いになれたらの話だけだ」

「うん」

「二つ目は、その力の使い方をよく考えてくれ」

「使い方？」

「別に人の為に使えって言ってるわけじゃない。だけど間違った使い方はしちゃいけない。それじゃあお前も周りの人も、誰も幸せにはならない」

「……わかんない。どんな使い方が間違いになるの？」

「状況次第で色々あるから、説明するのは難しいんだけど……そうだな、周りへの影響を顧みない事。これは間違いだ」

「どういう事？」

「自分さえ良けりゃあいい、なんて考えちゃいけないって事だよ。怒江はこれまで、好き勝手に動物達を触った事があるか？」

「……ないわ。だって触ったら死んじやうもの」

「そう思えるなら、きつとお前は大丈夫だ。相手の事を考えてやれるなら」
「でも私、手を使わない事ができないよ？」

「……そういえば怒江は力のコントロールができないんだった。」

まあ、そこは大丈夫だろう。

「最悪でもちゃんと入切オンオフがつけられる様にはできる筈だから、問題ないぞ」

「え、それって」

「可愛いわんちゃんも可愛い猫ちゃんも、いくらでも撫でたり抱いたりできるって事だ」

「本当!? 本当に私……」

「俺以外の物に普通に触れる様になるな」

「……!」

「だから泣くなって……」

「だって……だって……!」

「いや、嬉しいのはわかるんだけどさ……」

何度も幼女を泣かせていると、妙に罪悪感が湧いて来て落ち着かない。奏丞が幼いからよかったものの、中身の年齢通りの外見だったら一発で青い人達を召喚されるだろう。

男は女の涙にいろんな意味で弱いのだ。

「まだ何にも片付いてないんだから、喜ぶのは後にしとけ」

「奏丞くん……」

「今からそんなに泣いてたら、終わった後の嬉し涙が足りなくなっちゃまうぜ？」

「……………ふっ!!」

「えええ!? 奏丞くんどうしたの!」

あまりの似合わなさに胸が痛い。場の雰囲気の流れ過ぎた様だ。早く解決して気楽な空気に戻さないとマズイだろう。

怒江の涙も奏丞のキャラもギリギリだった。

「胸が痛いのか？ 大丈夫？」

「あ、ああ、大丈夫だ、問題ない。問題ないとも」

胸を押さえてうずくまる奏丞の背中を怒江が摩つてくれる。

しかし怒江の表情がどこことなく嬉しそうなのは何故なのか。

「私、誰かの背中を摩つてあげるなんて初めて！」

「あ、そういう事」

苦しんでいるのを見て、つて事じゃなくてよかった。

「……よし、もう落ち着いたぞ。じゃあやるか」

「今度は初めての共同作業ね！ 私ワクワクする！」

「んじゃ、そこに立ってろよ」

怒江の言葉は華麗にスルーし、これからする事を決める。

目標は二つ。スキルをスタンド化し、そして能力をコントローラブルな物にする事だ。スタンド使いになれるかはかなり分が悪い賭けだが、少なくとも発現した瞬間に周囲が腐り果てるなんて事にはならない筈だ。

そしてその為に使うスタンドは……やっぱりアレだ。

「いくぞへブンス・ドアー！ 怒江をスタンド使いにするッ！」

☆☆☆

その夜、電話で。

『すまん、今日は遊べなくて』

「通院の為なら仕方ないよ。でもそれも今日で終わったんだろ？」

『うむ。少々退屈だったが、健康診断の為と思えば無駄ではなかったよ。明日からは予定もないのだが……』

「善吉はいないもんなあ」

瞳が商店街の福引きで温泉旅行を当てたとかで、善吉を連れて旅行に行ってしまったのだ。最初はめだかが自腹でついて行こうと言っていたが、残念ながら奏丞もめだかも同伴してくれる保護者がいない。施設長は奏丞以外の三人の子供の面倒も見なくては

いけないし、めだかの親は仕事で忙しい。黒神家のボディガードならいるが、あんな黒服集団を連れて行ったら温泉など楽しめないだろう。

つまり奏丞達が行くと瞳一人に面倒を見させる事になってしまふのだ。

『人吉先生に迷惑をかけるわけにもいかんしな。我々のはのんびり善吉の土産話を待つとしよう』

と、そういう事になった。

『どうだ奏丞、明日も我が家に来んか？ くじ姉もいるし不肖の兄貴もいる。今度は四人で鬼ごっこでもしようではないか』

「また鬼ごっこかよ、もう諦めろよ。というかくじらも？ あいつ書庫から出てくんのか？」

『貴様を誘ってみると言うと、それは楽しみだと言って早々に勉強を切り上げて準備を始めたぐらいだ』

「一番用意してた道具はなんだ」
『注射器』

「お前は俺が針ネズミになる所が見たいのか」

黒い笑顔を浮かべて注射器を磨いているくじらの姿がありありと想像できた。あの時は気を引く為とはいえ、もう少し健全な付き合いができる手段で、くじらを外に連れ

出せなかったものか。

「でも悪い、俺明日は遊べそうにないわ」

『なに？ 何か予定があるのか？』

「ああ、ちよつと面倒見なくちゃいけない奴がいてな」

『ほう、新たに友人でもできたか？ それなら一つ、紹介に預かりたいものだが』

「……いや、駄目だ」

明日は早速怒江の能力の練習をするつもりだ。そんな所を見せるわけにもいかない。

「まだ人前(での制御)は慣れてないからな。お前らに紹介できるのはもう少し先になりそうだ」

『……そうか、人に慣れていないのか。ならば仕方ない、その日が来るのを楽しみにしておこう』

嘘はついていない、嘘は。

しかし能力にはすぐに慣れるだろうし、きつと今週中には紹介できるに違いない。

……はて、何かを忘れている様な、聞き逃している様な気がするのは何故だろう。

「奏丞、いつまで電話してんだい。ガキはもう寝る時間だよ」

「はいよー。……というわけでそろそろ切るぞ?」

『もうこんな時間か。わかった、では………はい? どうしましたか?』

「……………」

『……はあ、別に構いませんが。』

奏丞、どうやらくじ姉が用があるらしい』

「なに、くじらが？」

正直イヤな予感しかしない。勝手に切つちや駄目だろうか。

『おい奏丞、明日来れないってどういう事だ』

「くじらか。どうもこうも、用事があるんだって」

『カワイイ幼馴染みよりそちの女をとるのかよ？』

「俺達の歳で幼馴染みって言葉は早くないか？ あと自分でカワイイとか言うな」

『女というのは否定しなかったな。めだか、こいつ明日は女とデートするらしいぞ』

しまった。

『ひどいつ、奏丞くんは私よりその女を選ぶの! 私はこのなにもあなたを(研究対象と

して) 求めているのに!』

「うん、どう求めているかがビックリする程伝わってきたよ」

『せっかく明日の準備もしてたのに! 奏丞くんのバカバカ!』

「用意した麻酔の数を言ってみろ」

『53本』

「お前は何と戦ってるんだ」

猛獣を相手に備えているとしか思えなかった。

『こんな正統派萌え萌え美少女の頼みを聞けねーとは、お前どつか頭のネジが抜けてんじゃねーのか?』

「どこの国に麻酔を53本用意する正統派がいるんだよ。マッドか、マッドの国なのか」

『チツ、なら麻酔は全部廃棄してやる。これならどうだ?』

「用意した筋弛緩剤の数を言ってみろ」

『48本』

「おやすみ、お前んちから薬品臭さが抜けた頃にまた行くよ」

『おいこら、勝手に切』

ピッ。

通話を切り、受話器を元の場所に戻した。

……よし、明日も頑張ろう。

☆☆☆

「はあ？ 今日引つ越し？」

「うん。昨日言つたじゃない、引つ越しするから奏丞くんのご両親への挨拶が遅れちゃうって」

「……言つたつけ」

「言つたわよ」

まさかあの長台詞の中で言つていたんだらうか。正直ほとんど覚えてないんだが。

「じゃあ今日でお別れなのか」

「何言つてるの、奏丞くんも来るのよ？」

「……ああ、そういやそんな事言つてたな」

「でしょ？」

確かに同棲がどうこうって言つてた気がしてきた。

……だからといって看過できる事ではないんだが。

「怒江、俺は一緒に行くとは」

ギョオツ！

否定しようとした瞬間、怒江の身体から枯れ木の様な手が飛び出て来た。

「おりやつー！」

「あうっ!？」

スタープラチナが怒江にデコピンをかます。精密動作性Aのスタープラチナにかかれば、手加減だってお手の物だ。

飛び出て来た手も無事に怒江の身体に引っ込んだ。

「使い方を間違えるなって言っただろ。今のは完全にアウトだぞ。衝動的に使うんじゃないよ」

「だって……」

「だってもへちまもない。もう一回言うぞ、俺はお前と行けない」

「……………」

怒江の目がジワリと滲む。何だか昨日から泣かせてばかりだ。

「いいか、俺達はまだ子供で、俺には俺の、お前にはお前の家族がいるんだ。家を出るとか住むとか、俺達が勝手に決めていい事じゃないんだよ」

「だって、でもそれじゃあ……」

「ああ、今はお別れだ」

「ツ、いやよ！ せっかく会えたのにもうお別れなんて！」

「怒江、冷たい事を言う様だけど、それでもやっぱり駄目なんだ」

「! 奏丞くんの「なので!」っ!?」

怒江の言葉を遮り、奏丞はある提案をする。

「手紙を書こう」

「……手紙?」

「そう、手紙。遠くにいても話ができる素敵アイテムだ」

話をするだけなら電話でもいいが、それだと五分置きに電話がかかってくるという事態になりかねない。よって、ここは手紙のやりとりが妥当ではないだろうか。

「でも私、手紙を書いた事ない。ペンも紙も……あつ」

「今のお前なら腐らないだろ?」

今の怒江なら、能力の強弱ハイロウだけでなく入切オンオフもつけられる。触ると問答無用で腐るとい

う事はなくなつたのだ。

奏丞は懐からメモ帳とペンを取り出し(エニグマで紙にして持ち歩いている)、施設の住所を書き込んで怒江に渡した。

「ここが俺んちの住所だ。手紙はここに出してくれ。怒江は引越し先の住所はわかっているか?」

「うーん……ごめん、わからないわ」

「まあ、お前が手紙をくれればその時わかるか。住所書き忘れんなよ?」

「……うん！ 私絶対に手紙書くわ！ そうね、一時間置き……はやり過ぎよね。一時間半置きぐらいいがちょうどいいかな？ 私、奏丞くんの返信楽しみにしてるからね！」

「……いや、多くても一日置きにしような？」

「え、なんで？ 一日つて二十四時間でしょ？ いくらなんでも少な過ぎよ」

「……いいか？ 郵便の配達は一日分まとめて送られるんだ。つまり一時間半置きに手紙出しても一時間半置きに手紙が届くってわけにはいかないだよ」

「そうなんだ、それは本当に困っちゃうわね。もう、気が利かない人達なんだから！」

「いや、一時間半置きで手紙を出す奴がないからじゃね？」

「うーん、それもそうね。所詮そんなものよね。私達ぐらい愛し合ってる人なんて、他にはいないしね」

「……うん、そうだな」

なんかもうなんでもいいや……

「じゃあ私行くね。寂しいけど、きつとまた会おうね！ 手紙もいっぱい書くからね！」

「おう！ 次に会った時は、一緒に遊べなかつた分もしっかり遊び倒してやろうぜ！」

「うん！ またね！ 奏丞くん！」

「またな、怒江！」

……行ってしまった。

最後までヤンデレを修正できなかったが、それでも怒江は笑って行く事ができた。しばらくは手紙のやりとりが大変だろうが……それくらいしつかりこなそうと思う。提案した以上、責任とって返信しよう。

さてと、今日はもう黄金長方形を探す気になれないし、ひとまず家に帰ろうかな。そう思い、公園を出て帰って行く途中でふと思った。

「……あれ、あいつあの歳でもう文字習ってんのか？」

……せっかくの文通は、こうして始まる前からつまずいてしまうのであった。

第七話：あの子の決意と幽波紋！

己の気持ちを実感した時、女は一人の狩人となる。

性の知識もない幼女、多感な時を生きる少女、社会の一員となった淑女、生きた歴史が髪に表れてきた老女。

老若男女ならぬ老若女々。どんな女性もその感情のままに決意するのだ。

気になる彼を勝ち取る事を。

「奏丞、今日は何の日かわかるよな？」

「……………バレンタインデー」

「正解だ。よってこれを贈呈してやる」

「……………何、コレ」

「どう見てもチョコレートだろうが。ま、考えてる事はわかるぜ。私みたいな美少女から貰えた事が信じられないんだろ？ だけど安心していい、それは本気チョコだからよ」

「……………めだか、ちよつとこの仄かに酸味が香るチョコの材料を特定してみ

てくれ」

「構わんぞ。どれ、ペロツ……これは青酸カリ！」

「お前本当に俺を何だと思ってるんだ！」

「人の妹に毒味させんなよ」

晴れの日も。

「存分に味わいなッ！」

「くそつ、太陽を背にして注射器を!? おのれ猪口才な……！」

雨の日も。

「なに、傘がない？ そりゃー大変だな、きつと誰かが間違つて持つて行つちまったんだろ。仕方ねーな、私の傘を貸してやるよ」

「ちよつとそれ開いてみろよ」

「……………」

「……………」

「……………照れんなよ」

「善吉ー、俺も傘に入れてくれー」

風の日も。

『外は風が強いな。危ないし、今日はこっちで泊まっていかなーか？』

「だから家で大人しくしてんだろうが。なんで台風来てんのにわざわざお前んちに行くんだよ。俺んちがボロいとしても言いたいのかコラ」

雪の日も。

「わーい、雪だ雪だー。ねえねえ、皆で雪合戦しようよー!」

「おっ、いいねえ。考えてみれば僕も雪合戦なんて初めてだよ」

「結構積もったなあ。ここは広くていい庭だし、はしゃぐにはちょうどいいや」

「うむ、流石はくじ姉だ。今日はここで遊ぶといいと助言されていたが、善吉の様子を見るに正解だったらしい」

「善吉イイイ!! ちよつとその場から動くなよおおお!」

「(ボンツ!) ぐあつ!」

「真黒さーん!」

そんな日々が続くうちに、やがて気になる彼も彼女の気持ちに気付く日が来る。

「奏丞に出会ったおかげで、くじ姉はすっかり変わったよ。以前は書庫に入り浸りだったが、最近では実験室や薬品庫にもよく行く様になってな。私はくじ姉の意志を尊重しているが、流石に前の様な生活は体に障るのではと心配もしていたのだ」

「待て、実験室? 薬品庫?」

「ああ、以前より内容も充実している様だ」

「!？」

そうならば後はこっちのもの。男は自分を思ってくれている相手が気にならないわけがない。

今までの甘酸っぱい日々も手伝って、彼は彼女に逢わずにはいられなくなるのだ。

「オラアアア!! (ドゴーン)」

「ようやく踏み込んだな、私の領域にッ!^{テリトリー} あの扉を吹っ飛ばすパワーまで持っていたとは、ますます解剖のしがいがあるぜエッ！」

「どういう事だ、くじらッ！」

「待ってたんだよ、私が最大限に力を発揮できるここにてめーが入って来るのをな！」

「くらえッ! 奏丞ッ! 半径10mイソフルランスプラッシュをーッッ！」

「マヌケがッ! 知るがいい、俺の真の能力は……まさに! 『運命を切り開く』能力だということを!」

彼らの逢瀬はまだまだ続く――

☆ ☆ ☆

「正座」

「オイオイ、落ち着けよ。んな顔しなくたって」

「正座」

「……ちっ」

くじらはしげしげ正座した。

ここは黒神邸の応接間。数々の道具と薬品を駆使して襲いかかるくじらを下し、ようやく落ち着いて話ができる状態になったのだ。ちなみに先の戦闘で犠牲となった真黒は、隣で尻に刺さった注射器をめだかに抜いてもらっている所だ。災難なのか役得なのかは真黒の判断に任せよう。

「で、何だあの薬品まみれの部屋は。お前は基本的に書庫から出て来ない生物だと思っ
てたんだが」

「んなわけねーだろ。理科生物学ならその妹を上回ってる私なんだぞ、自分で使う実験室の一つや二つは持つてるに決まってるんだろ」

柵に近づくとセンサーが反応して容器が破裂して中身をぶっかけてくる実験室がど

ここにあるのか。

「そりゃあの部屋はお前を捕獲する為に改造した部屋だからな。言わせんな恥ずかしい」

「だからお前は俺を何だと思ってるんだ」

「ふふ、それも奏丞の事を買っている証拠では「俺はめだかとは違うんだぞ」待て奏丞、そこで何故私を引き合いに出す」

「そうだぞ、身体能力がバケモンのめだかと違ってお前は不思議能力を使うUMAなんだからな」

「お姉さまは何故止めを刺していくのですか」

とんだとぼつちりだった。

「なあくじら。そりゃあ、お前に能力を見せたのは俺だよ。ストーカー染みた事されるのも仕方ない。でも少しは自重しろや」

「そりゃてめーの自業自得って奴だろ。ハハハ、私の為に不幸を背負い込むなんて可愛い奴だ。ハグしちゃうぞ?」

「鯖折りするぞ不幸メーカーが。だけど今回はお前のフィールドを乗り切ったんだからな、俺を捕まえる事はできないってわかっただろ」

「……………ふむ」

その言葉には何か思う所があったらしく、くじらは何かを考え始める。しかしその表情を見れば、未だに諦めていない事はわかった。

「確かにてめーの言う通り、今の私じゃ捕獲する事は難しそうだな」

「せめて捕まえるって言ってくんね？」

「ま、いいぜ。そこまで言うならてめーに仕掛けるのはしばらく止めといてやる」

「マジで!？」

くじらにはかつてなかった譲歩が引き出された。

しかしだからと言って油断できないのがくじらの怖い所だ。

「でも何か企んでんだよな？」

「ヒデー事言うなー、まったく。ひねくれた子供に育ちまっつてオネーサン嬉しいぜ。だがマジな話だ。実験は一旦凍結。てめーは束の間の平穏を味わってりゃいい」

「おいやめろよ、どう聞いてもフラグでしかねえじゃねえか。というか実験って何だよ」
「こまけー事は気にすんな。おいめだか、お客様はお帰りだぞ。もう遅いしきつさと送ってやれ」

「おいコラ、あからさまに話逸らしてんじゃねえぞ。余計不安になるだろうが」

「奏丞、積もる話もあるだろうが、それより門限は大丈夫なのか？」

「え、今何時……げ、もうこんな時間か!？」

時計を見れば既にギリギリの時間だった。門限を破る事はお小遣いの減額に繋がる。それはつまり、手紙代が足りなくなるといふ事。それが意味する所は……ズバリ、ヤンデレが病む。

「くそつ、今度詳しい話を聞かせてもらおうからな!? めだか、悪いけど」

「心得ている。今戦闘機を手配している所だ」

「車でいいから！ そこまでは求めてないから！」

慌ただしく去って行く奏丞とめだかを見ながら、部屋に残されたくじらはポツリと呟く。

「私がいなくなってもあいつらは変わらなさそーだな」

「そうかもしれないね」

それに応えたのは、隣で尻を突き出してうつ伏せに倒れている真黒だった。力尽きた尺取り虫の様なその姿は、どことなく哀れみを誘う。

「だけど、それはくじらちゃんやんが居ても居なくてもどっちでもいいから、なんて理由じゃない。きつと、くじらちゃんなら大丈夫だって信頼してるからこそなんだよ」

「そりゃー嬉しいね、だったら私もやりたい事やっちゃっていいワケだ」

「あ、でもやるならやるで一言言つてね？ くじらちゃんは目を離すとすぐに体に悪い事するし、危ない事企むし、奏丞くんに夢中になっちゃうし……」

「全然信頼してねーじゃねーか。大正解だぜオイ」

そう言つてくじらは立ち上がる。

「おっと、わりい」

「ぐえっ……」

何気に今までずっと正座していたため、足が痺れてフラついた拍子に真黒を踏んづけ
てしまった。今日の真黒はつくづく運がない。

「オーケーオーケー、わかつたよ。一言ぐらい大した手間でもねー。何となく気が向い
たらしづしが一言言つてからやつてやるよ」

「め、めちやくちやめんどくさがつてるじゃないか………ガクッ」

力尽きた真黒を意に介さず、くじらは部屋を後にする。緻密な頭脳を持つ彼女が今、
どのような計画を巡らせているのか？ それを知る者はどこにもいない。

しかし、ただ一つ確かな事がある。

くじらは11歳の誕生日に、黒神家から姿を消す。

第八話：中学デビューと幽波紋！

「これは奏丞が小学六年生になった頃の話。

「はあ、今日もくじらちゃん見つからないなあ……」

「真黒さん、メニユー全部こなしてきました。……どうしたんですか？」

「ああ、奏丞くんか。お疲れさま」

「なんか真黒さんも疲れてるみたいですけど」

奏丞がトレーニングを終わらせて来てみると、何台ものパソコンに囲まれた真黒がため息をついている所に遭遇した。

「うーん、今方々に手を伸ばしてくじらちゃんの居場所を探してるんだけど、なかなか見つからなくてねえ。最近はくじらちゃんに良くない事でもあったのかって思えてきて心配で心配で……」

「……あいつの事ですから、たぶん干渉されたくないとか考えてるんですよ。見つからないうちは自分の勝手にさせてくれって事じゃないですか？」

「頼りのないのは良い頼りって事かい？ わかっちゃいるんだけどねえ……」

「退廃的な生活はしてそうですけど、きつとあいつも変わらずやってますよ。そんなに心配しなくても大丈夫ですって」

「さっすがくじらちゃんの想い人！ くじらちゃんの事がよくわかってるんだね。できれば居場所も教えておくれよ」

「えっ」

「えっ?」

「……………」

「……………」

「…………いや、想い人じゃないですヨ?」

「めだかちやーん! 奏丞くん捕まえてえー!」

バンツッ! (扉が開く音)

ダッ! (奏丞が逃げる音)

ゴスツ!! (黒神ドロップキック!)

ギャアアアツツ! (奏丞、再起不能)

「それで、何故奏丞を捕まえるのですか?」

「お前知らねえのにドロップキックなんかすんなよ!」

「むっ、流星だ奏丞、アレを受けてまだ喋る余裕があるとは。一体どんなトレーニングを

しているのだ？」

「やかましいわっ！」

「知った手段はどうでもいい。だが奏丞くん、今すぐ治療を受けたくばくじらちゃんの居場所を話すんだ。ここにはめだかちゃんがいるから自分で治療する事はできないよ」

「？ お兄様、別に私は止めませんが」

「くっ……」

幼い頃からの教訓により、めだかの攻撃にはわりと容赦がない。奇襲かつギャグ補正があれば、奏丞も無傷ではいられないのだ。

世界は奏丞に優しくなかった。

「奏丞くん、きつと君はくじらちゃんの意志を尊重しているんだろう。僕だつてくじらちゃんが見たい事はさせてあげたいさ。でもどれだけ信じていてもやっぱり心配なんだよ。だつてくじらちゃんは、世界でたった二人しかいない大切な妹なんだから」

「真黒さん……」

「頼むよ奏丞くん。僕は居場所を知ったからと言つて会いに行つたりやつている事を調べたりしないから。詮索しないと誓おう。だから教えてくれ、お願いだ……」

「……………わかりました」

くじらには申し訳ないが、奏丞はスタンドを使って最近探し出した居場所を真黒とめ

だかに話した。決してこちらからは接触しない事を約束させて。

「……そうか、くじらちゃんはやちゃんと中学校に行つてたんだね。それを聞いてちよっぴり安心したよ」

「しかし随分遠い所にいたのだな。入学するなら私達が行く箱舟中学校に行つてくれれば良かったが、まあ、今更言つた所で詮無い事か」

「そうだね、こればかりは仕方がないなあ。でも奏丞くんはくじらちゃんと連絡はとつたのかい?」

「とりましたよ」

「え、とつたの?」

「はい、そんな時に口止めもされました。家族の誰にも言うなって……ヤベエ、結局話しちゃつたよ……」

「そう落ち込むな。そうだ、他には何か話していないのか? 学校生活がどんなものか、とか」

「んー、ボツチになつてる事ぐらいしか……」

「えっ」

「えっ?」

「……………」

「……………」

「……………」

「…………くじ姉は友達がいらないのか？」

「聞いた事は……………」

「話をする相手、ぐらいは……………」

「めっちゃ避けられてる、としか……………」

三人で気まずい表情になった。真黒にいたっては何事かをブツブツと呟いている。

「揺籃中……………確か今は共学化して……………ならねじ込めば……………」

「ま、真黒さん……………」

「……………奏丞くん、お願いがある」

「はい？」

そのお願いの内容は、奏丞が予想だにできなかった話だった。

☆☆☆

「……………」

「……………」

ズーン。

この場の空気を一言で表現するならまさにそれだった。

奏丞が訪ねて来たのはとあるマンションの一部屋。住み慣れた街を離れ、電車を乗り継いでここまで来た。

そしてこの部屋の住人が誰かと言うと……

「兄貴め、とんだサブライズだぞ……」

「ホントすまん、くじら……」

「今の俺は名瀬天歌だ。呼ぶならそっちの名前で呼べ」

名瀬天歌と名前を変えた黒神くじらだった。変わったのは名前だけではなく、素顔を隠す為に紙袋を被って見た目が完全に不審者になっている。スカートを履いていなければ性別すらわからないだろう。

「つまりこういう事か。」

俺の居場所を知ってる事がバレて兄貴達に説得されたから接触はしないって約束さ

せた上で話したけどついでに俺がボツチになつてゐる事までバレちまつてそれを聞いた兄貴が僕じゃ駄目だけど君ならきつとくじらちゃんも許してくれるよとか言つて俺と同じ学校に行かせるよう手配してこうなつたのか」

「すげえ、一息で言い切つた……その通りです、はい」

申し訳なくて、この時ばかりは出された水に毒が仕込んであつても仕方ないと思う奏丞だつた。それでも確認はするが。

本来なら明日、奏丞は箱舟中学校の入学式に臨む筈だつた。

しかし現実が違う。

「しっかしわざわざ揺籃中に入学するとは……三年早けりや共学化もまだしてなかつたつてのに。お前も断れよ、妹達と同じ学校に行く筈だつたんだろ？」

「……真黒さんにはかなりお世話になつて、頼まれると断れないんだよ。というか頼み事自体初めてだし」

「つつてもなー。そもそもお前んちはこつちに通う余裕なんかあんのかよ？」

「真黒さんが学生寮を手配してくれたよ。それどころか依頼料として学費まで……なんかどんどん追い詰められてる様な……」

「たぶん気のせいじゃねーぞ、それ。つたく、そこでNOと言わずにいつ言うんだよ。今だろー！」

「いや、今じゃ遅いでしょ……でも俺も心配してたしなあ。お前が中学デビューに失敗していじめられてないか気になってたんだよ、一応」

「……余計なお世話だよ。で、兄貴にや何を報告しろって言われてんだ」

「元気でやってるか教えてくれればそれでいいって言ってたよ。」

あ、あと手紙預かってたんだ」

「手紙い?」

天歌は奏丞が懐から取り出した手紙を受け取り、読み始める。

『やあくじらちゃん、久しぶりだね! お兄ちゃんからのプレゼントを受け取ってくれたかな? 残念だけどくじらちゃんは今僕達に会うのを躊躇ってるみたいなので、代わりに奏丞くんに行ってもらう事にしました。なんだかんと言つて気にかけていた奏丞くんならきつと喜んでもらえ——』

「ムウン! レターデイバイド!!」

ビリビリビリッ。

「何やってんのー!?!」

天歌は真黒からの手紙を引き裂き、クシヤクシヤに丸めてゴミ箱にシュート。綺麗な軌跡を描いて紙くずは見事ゴミ箱に納まった。

「ど、どうした、何か変な事書いてたのか?」

「気にすんな、下世話な話だよ。クソツ、あのヤロー……」

天歌は忌々しげに眩き、テーブルに出ていたグラスを掴んで一気にあおる。

「……今更駄々捏ねても仕方ねーか。実に不本意だが、これ以上の干渉はないって事でヨシとしねーとな。

奏丞、元はと言えばてめーが喋ったのがわりーんだからな。てめーは自業自得と思つて諦めな」

「……わかってるよ。ま、知り合いが一人もないよりは気が楽だしな。御指導御鞭撻の程よろしく頼むよ、天歌先輩」

「……いや、そりやどーだろうな」

「？」

奥歯に物が挟まった様な天歌の言葉の意味がわかるのは、翌日になっての事だった。

☆
☆
☆

「孤立した……」

「ドンマイ☆」

「何がドンマイだコラア！」

「まあ落ち着けよ。いいじゃねーか、実に俺好みの不幸だぜ？」

「お前今絶対笑ってるだろ。見えねえけど絶対ニヤニヤしてるだろ！」

入学式を終えた奏丞達は今、近場の喫茶店に来ていた。

奏丞が存在する影響なのか、この世界の天歌は原作程過酷なイジメを受けてはいない。しかし天歌に少々の変化があったからといってイジメがゼロになるわけでもなく、実害が及ぶイジメがない代わりに……

「ハハハ、見事に避けられてやがる。中学デビューは大成功だな」

「大失敗じゃねえか!?!」 というかお前も同じだろ、優雅にコーヒー飲んでる場合か!

「というかなんで紙袋被ったままで飲めんの!?!」

「俺はいーんだよ。ほら、俺ってアレじゃん? 週刊少年ジャンプで言う、孤高のライバルポジ」

「オメーはそんな美味しいキャラしてねーだろ」

とにかく避けられている。関わったら最後、肩胛骨をブチ割って上半身を腰寛骨まで

鯨の開きのように裂かれるという噂すらあるあたり、どれだけ物騒に思われているのか察しがつくだろう。それこそ、下手に関われば余程の物好きか、或いはお仲間と思われる程に。

「そもそもなんで新入生にまで『二年にファ○ストみたいなヤバイ先輩がいる！』なんて噂が早くも広まってんだ？　んでなんで俺に『ファ○ストの助手』なんて不名誉なあだ名ができてんだ!？」

「俺の溢れんばかりのカリスマに当たったんじゃねーの」

「実態は大外れだけどなっ！　ぐぬぬ、少し話してる所見られたぐらいで、こんな絶○君と同類と思われるとは……」

「誰が○望君だオラ」

わりとファ○ストより絶○君の方が近いんじゃね？　と思っっている奏丞だった。

ちなみに奏丞達は気付いていないが、時たま外を通る揺籃中の生徒達から現在の二人の逢い引き（第三者目線）も見られているので、明日からは新たな噂が広まる事も想像に難くない。

「つたく、それなら誤解をさっさと解きやいーだろ。実は何の関係もありませーん、つて事にしとけよ」

「それはそれでイヤだよ。今いるダチを否定してまで友達作りたくねえし。」

……あ、ここのケーキ結構ウマイ。今度別のも食つてみつか」

「……やれやれだぜ」

しかしそうなると、期待していた輝かしい中学生生活はもはや望めないのだろうか。

二度目とはいえ、奏丞も中学生を楽しみたかった。友人とカラオケに行ったり、買い食いたり、普通で可愛くて普通な女の子とお近づきになったりしたかった。……意外と後者が切実な願いだった。

「こうなつたら部活に入つて仲間を……でも動機が不純だし……」

「空気も最悪になりそうだしな。チームワークなんかボロボロになりそうだ」

「他人事みたいに言いやがって……」

「知れた事を言うなよ。第一部活なんかに入つてどーすんだ？」

「学生は部活の一つや二つぐらい入つとくもんだぞ。仲間との切磋琢磨！ 深まる友情

！ 青春つて奴じゃねーか……」

「お前はジャンプ脳か……。しっかし、部活、ねえ……う？」

部活の良さを語る奏丞を見ながら、夭歌はしばし考え込んだ。

「……おーい、夭歌ー？」

「しゃーねーな、ここは先輩として！ 俺様が一肌脱いでやるか。つー事で今日はお先」

「えっ、何で今唐突にフラグ建てたの？ 待つて、ちよつと待つて！」

引き止める奏丞を華麗にスルーしてさっさと喫茶店を後にする天歌。
残された奏丞はというと。

「あいつ、さりげなく支払い押しつけて行きやがった……」

さて、翌日の昼休み。

「奏丞、部活作ったぞ」

「ぶふおっ!？」

教室にやって来るや否やそう言い放った天歌に、奏丞は思わず咀嚼していた玉子焼きを噴出した。

「うわ、きたねっ。何やってんだよ」

「いや待て、それよりお前今何て言った?」

「だから部活作ったんだって。んで何なんだそれ、まさか自前の弁当か? よくこんな所で一人で食べるな」

「ほっとけっ。んな事どうでもいいから……」

そこではたと気付く。教室内には僅かに生徒が残っているという事を。そしてその生徒達がさつきまで以上に距離を取り、戦々恐々としながらこちらを窺っている事を。

「ちよ、ちよつと来い。どつか別の場所で話そうぜ」

「やんつ、強引。奏丞くん大胆なんだからっ」

ざわ……ざわ……

「お願いだからやめて!?! たとえ棒読みでもやめて!?!」

「ま、丁度いいか。なら理科室に行くぞ」

目的地は理科室となった。道すがら多数の生徒に凄い目で見られつつも、何とかそこにたどり着く。

「あ、あ、あ、絶対また妙な噂が……」

「気にすんな。それよりさつき教室で言いかけた事だけだよ」

悶々とする奏丞を放置して、さつきと本題に入る天歌。

「部活作ったからお前も放課後は来な。部室はこの理科室だ」

「……………」

「……………」

「…………え、終わり?」

「そーだけど?」

説明するかと思いきやそんな事はなかった。

「いやいやいや、何を言ってるの？ え、部活作った？ なんで？ というか俺最近疑問符多くね？」

「奏丞の疑問符頻度はさておき、誰かさんが部活は入るものって言うてたからな。かといつて既存の部活に入るのもマズいだろ」

「（こいつ、他人に配慮できたのか!?!）」

「てめー何となく後でブツ刺してやるからな。」

まあ話は簡単、既存のが駄目なら新しく作っちまえばいい。そう思ってできたのが我が『囲学部』だ」

「へー、案外普通のネーミングだな。あ、その力は化と科のどっちなんだ？」

「囲だけど」

「……んん？」

「んん？」

「……どういふ理念に基づく部活だ」

「面白化学で誘い寄って来た奴を遠目に観察しようって部活」

「はい解散」

やはりロクなもんじゃなかった。

「別に解散していいけどよー、もうお前の入部届は出してゐるからな」

「やっぱりそんな話かよ……俺達以外の部員は？」

「いるわけねーじゃん。ちなみに俺が部長でお前は雑務な」

「カースト制度も真つ青な柱形階級制度だ……顧問は」

「いねーな」

「おい」

部員二人で顧問もいない。どう考えても部活の体を成していなかった。一体どうやってこの部を作ったというのか。

「先生に『部費はいららないんで部活作らせてください』って言ったら通つたぞ」

「もはや部活じゃねえよ、これ理科室借りただけじゃん……」

しかしそうは言ってもよくこんな部活がこれほど早く通つたものだ。

まさかあれか、教師にも煙たがられているというオチなのか。だからさっさと許可を出したという事なのか。

「もつとも、ここには機材がねーから大した実験はできそうにねーな。ま、せつかくの活動初日なんだ、今日は混ぜると何故か爆発するお約束な薬品でも作ってみつか」

「部長、俺今日は掃除当番なんで少し遅れて来ますけどいいですか」

「十分以内に片付けてこいよ」

どんな部活かと思いきや、意外と面白そうな部だった。

さて、もう少し話を聞いてみたかったが、時計を見てみればもう時間がない。残っている弁当は諦めて次の授業の準備をしなければならぬだろう。

「天歌、時間もなしそろそろ戻ろうぜ。また放課後に会おう」

「そーだな、俺も次は体育だから着替えねーと」

「体操服のお前って……うーん……」

「文句あんのかコラ」

互いの教室に戻る途中、奏丞はふと思いつく。

自分とした事が、言わなければいけない事を言っていなかった。

「天歌」

「ん？」

「ありがとな、わざわざ俺の為に部活なんて作ってくれて」

その言葉に、紙袋に隠された天歌の顔がニヤリと笑った……ような気がした。

「貸し一だぜ、憶えとけよ」

「……お手柔らかに頼むぞ」

兄の真黒と同じく、天歌も追い詰めるのが得意なのかもしれない。

第九話：新入部員と幽波紋!

奏丞が中学二年生になった春。

「一年ぐらい時間が消し飛んだ様な気がするけど、我が囲学部に新しい仲間ができたぞ。三年の古賀いたみちゃんだ。ホレ、拍手」

「おつ、まるで一年間にSS一話分も使わなかった様な気がしたけど、とにかく部員が増えたのか。ようこそ囲学部へ、歓迎しますよ」

「す、すごい、こんな釈然としない気持ちで歓迎されるなんて初めて……」

パチパチパチパチ。

拍手する奏丞達に困惑顔を向ける新入部員、古賀いたみだった。

万年……ではなくまだ一年だが、部員どころか近づく生徒すらいない囲学部に三人目の部員がやって来たのだ。

「んで若い身空で人生捨てたのはどういうワケなんですか？ 怖い物みたさとかなら早く退部した方がいいと思いますけど」

「おいおいおい、奏ちゃんよー、そりゃあんまりな言い種だぜ？ こーんなに勉強熱心な

部、他にあるか？」

「問題なのは部長の人柄だろ」

「なるほど、恐れ多いって事か。それなら仕方ねーな」

「全然ちげーよ……」

「えつと、一応わかかって……いや、あんまり詳しくは知らないんだけど、とにかくわかってやってるからいいの。えーと、君は……」

「二年の宇城奏丞です、古賀先輩」

「古賀ちゃんはスゲーぞ。なんせ転校したての今日、いきなり俺に話しかけてきたんだからな。しかも内容が『私をめちゃくちゃにして!』だ。いやーエロい子に目えつけられちまって困った困った」

「ちよつ、名瀬ちゃんやめてよ! 凄く誤解を招くよその言い方!」

「……積極的ですね、古賀先輩」

「ほら誤解しちやつた! 違うからね!? そーいう意味じゃないからね!」

大慌てしているいたみを見ながら、天歌は覆面の下で笑っている様な気がした。

奏丞が覚えている原作知識では、いたみとの出会いを天歌も喜んでいた筈だ。なんだからで根は素直な天歌の事だから、友達ができたのが嬉しいのだろう。

「なら古賀先輩はなんで天歌に話しかけたんですか?」

「んー、ちよつと前から悩んでる事があってね。それがどうしようもなく困ってたんだけど、今日名瀬ちゃんを一目見て、この人ならきつとどうにでもしてくれる、って感じたの」

「どうにか、じゃなく？」

「うん。でもそれでよかった、それがよかったの。何もかもが普通の私には、ね」

代わり映えのない日常、何事にも平均をとる能力。挙げられる特徴がとにかく普通である事という程普通の人間、古賀いたみが持つ唯一の異常が『異常への憧れ』だった。

異常になりたいといういたみの願いを叶えるならば、なるほど夭歌以上の適役はいないだろう。

「まあ、何となく話はわかりました。で、夭歌。古賀先輩を……その、なんだ、めっちゃくちゃにするのか？」

「古賀ちゃんがそうしてほしいって言うからな。古賀ちゃんは願いが叶ってハッピー、俺は実験動物が手に入ってハッピー。皆幸せだ」

「なーにがハッピーだ、お前は不幸大歓迎な奴だろ」

「否定はしねーな。」

おっと、あらかじめ言っておくが何をどうするかって具体的な話は教えねーぞ？ なんせプライベートな問題だからな、お前には内緒だ」

「どうせ古賀先輩を強化人間にして俺にけしかけるとかだろ」

「さーて今日は何の実験するかな」

「おい、目え見ろよ。おい」

もはや言い訳もしないらしかった。

しかしそんな胡乱な会話を聞いても、顔をひきつらせるだけで逃げはしないあたり、いたみも覚悟はしているらしい。だったら止める必要もないのだろう。いや、止めてはいけないのだろう。

そうは言っても、妙なちよっかいをかけて来るのは勘弁してほしいが。

「そーいや一年前に囲学部を作った時には派手に花火を上げたなー。古賀ちゃんの入部を祝して今日もパーツといくか？」

「あー、いいかもな。でもやるならグラウンド……は運動部が使ってるから、屋上でやろうぜ。こんな所でやったら片付けが大変だし」

「花火……？　ね、ねえ、この囲学部？　って結局どういう部なの……？」

「どういう部って……」

奏丞と夭歌は目と目を見合わせ、

「面白化学で誘い寄って来た奴を遠目に観察しようって部活？」

「何ソレ!？」

驚愕するいたみ。

「ええっ、どういう活動方針なのソレ!? どういうつもりで作ったの!? 二人で決めたの!?!」

「あ、この部作っただのは俺じゃないですよ? 俺は天歌が作った部に後から入ったんです」

「という事は名瀬ちゃんが……?」

「責任丸投げかよ。事実だけだな」

「まあ、普段は案外普通に活動してますよ? 言うだけあって面白い実験とかしますし、テストの為になつたりしますし」

「(あつ、趣旨通りだ! 名瀬ちゃんの目論見通りだ!?)」

「工学部での経験がテストで役に立つ事は意外に多く、そういう意味でも天歌には感謝している。」

不思議な事にいたみが変な目で見てくるが、奏丞は気にしない事にした。

「……あのさ、ついでにもう一つ聞いていい?」

「ん?」

「(息ピッタリだ……) 違ってたらゴメンね? えーっと、名瀬ちゃんと宇城くんって付き合ってるの?」

「ねーな」

「ないな」

予想できていただけに、返事も早かった。

「なんで？　だつて二人ともすごい息ピッタリだよ？　阿吽の呼吸だよ。むしろそういう関係が全然ないのもおかしいって！」

「古賀ちゃんよー、残念ながら俺達はそんな関係じゃねーんだぜ。確かに俺は（研究者として）奏丞の全てを知りたいぐらいだけど、こいつは昔っから重要な所で逃げ出しちまうヘタレだからな」

「宇城くんダメだよ、女の子から逃げるなんて！　君はそれでも男なの!!」

「待ってくれ古賀先輩、こいつの心の声が聞こえなかったのか。俺逃げないと物理的な意味で全て知られちまう」

ひどい誤解だった。いたみはラブコメと思っている様だが、その実態はサイコパスである。よしんばR—18があるとしてもその後Gがつくだろう。

二度目の人生とはいえ、奏丞もまだ死にたくはない。

「ま、それに関しては古賀ちゃんも無関係じゃなくなるし、後できちんと説明してやるよ。」

奏丞、柵から何気なく甘い薬品と底知れない臭気を放つ薬品とそこはかたなく危険を

感じる薬品を持って来い。歓迎会は派手にいくぞ」

「へーへーわかりましたよつと……古賀先輩、あんまり暴力的な事には協力しないでくださいよ？ こいつ絶対俺達を戦わせるつもりですから」

「さ、流石に力じや勝負にならないんだけど……」

「安心しろよ古賀ちゃん、すぐにそこらへんの男子なんかチョメチョメできる様にしてやっからよ。そんな奴軽く一捻りしてやれ」

「もはや隠すつもりもねえなこの野郎」

「ううっ、かつてない程不安を感じるけど……宇城くん、その時はごめんね？」

「あんたはあんたで何物騒な謝罪してんだ」

やはり対決は避けられないという事か。天歌の魔改造を止めるわけにもいかないの
で、その時を覚悟しておくしかない。

サイコパスもいやだがバトルパートも勘弁してほしい所だ。

「んじや実験は屋上するか。古賀ちゃん、荷物持ちは出来ない後輩に任せて行くぞ。転校したてで道がわかんねーだろ」

「あ、待つてよ名瀬ちゃん！」

天歌の後を追いかけるいたみ。やろうとしている事はアレだが、ここだけ見ると普通の
(と言ってはいたみに悪いか?) 女子中学生という感じだ。天歌の存在がいたみの助

けになった様に、いたみの存在が天歌にプラスに働くなら奏丞にとつても喜ばしい事だ。たとえそのしわ寄せが奏丞に来たとしても。

実験に使う薬品や器具を詰めた段ボールを持ち、奏丞も屋上に向かう。願わくば、この中学生生活がいつまでも平和なものであれと祈りながら。

……当然ながら、そうは問屋が卸さないのが現実である。

☆ ☆ ☆

某日、天歌の工房^{ラボ}にて。

「名瀬ちゃん名瀬ちゃん」

「なんだい古賀ちゃん」

「名瀬ちゃん目的って宇城くんだよ。今の私って結構人間離れしてると思うけど、それでも勝てないの？ 男子どころか大人が三人集まっても私には勝てないんだよ」

「まったくもって無理だな」

手術台に横たわるいたみの言葉を、夭歌は呆気なく切り捨てた。

そんな夭歌にいたみは口を尖らせる。

「ちえっ、こーんなに強くなつたのに。今なら腕相撲なんて勝負にならないくらいだよ？」

「単なる力持ちが勝てる程甘くはない。しかも奏丞は兄貴の手解きを受けてたみたいだからな、素手の戦闘でもほぼ確実に負けるぜ」

「むーっ……」

ますます不満げな顔をするいたみ。

しかし無理もない、いたみはまだ奏丞と戦った事もなければ、戦っている所を見た事もないのだ。大好きな親友の改造を受けた自分より相手の方が強い、などと言われても、にわかには信じ難いだろう。

「よしんば素手で圧倒できたとしても、あいつの『能力』に対抗できなきゃやっぱり詰む。わかっている限り、現時点じゃ自慢のパワーですら『能力』に負けてるんだからな。どのみち勝負にならねー」

「その能力って前に聞いた『スキル』って奴でしょ？　宇城くんってどんなスキルを持っているの？」

「わからん」

「……知らないの？」

一気に話が胡散臭くなり、いたみは訝しげな視線を向ける。もしかして自分の親友は謀られているだけなんじゃなからうか、と。

「その目は心外だぜ古賀ちゃん。だけど更に悪い知らせだ、『それが本当にスキルなのかすらわからない』んだ。やれやれだぜ」

「……それってどういう事？」

天歌はそう訊ねるいたみに背を向け、隅の机にある資料の山に手を突っ込みながら話し始める。

「俺が家出したって話は聞いたよな？　俺は家出する前、アイツが妙な事ができると知ってから、事あるごとに色々と仕掛けてきた。まあ身体を調べてみたいのもあったから、捕獲できればラッキー程度に思ってたんだけど、本当の目的は『能力を使わせる事』だった。要はデータの収集だな。」

「……お、あつたあつた」

分厚い紙束を引つ張り出して天歌が戻って来る。

「苦労したぜ、なんせなかなか尻尾を出さねーからな。上手くやらねーと能力も使わずに逃げられちまう。」

んで何年もかけてようやくわかったのが『念動力』『低温にする能力』『風を吹かせる能力』その他いくつか。ああ、そういや家出した後に調べたら、『スキルが効かない能力』と『離れた所のコンピュータをブツ壊せる能力』なんてものもわかったな」

「何それ、いくつもスキルを持つてるの!？」

「うんにゃ、こんなもん下手すりゃ『強力な念動力』ってだけで説明がつく。『スキルが効かない能力』ってのは微妙な所だけど、とりあえずそれは置いておくれ。」

だが俺が発見した中で最も問題なのは、最初に上げた『念動力』なんだ」

「『念動力のスキル』じゃないの?」

「そんな疑問を持つ古賀ちゃんに質問だ。『念動力は形があるものなのか?』」

「え、形? うーん……」

顎に手を添えて考える。

念動力、もう少しわかりやすく言うとな念力、テレキネシス、サイコキネシス。いたみの頭の中ではローブを目深に被った悪い奴が念力で主人公を吹き飛ばしている姿が思いつく。

「形は、ないんじゃないかなあ……?」

その答えに我が意を得たり、という顔をする天歌。

「いいぜ、なら更に質問だ。」

古賀ちゃんが念動力を使えるでしょう。そんな古賀ちゃんに俺が注射器を投げるとする。

「さあ、どう防ぐ?」

「どうって、そりや念動力を」

「どう使う?」

「うーん、壁みたいにはバーツてやって弾くとか?」

それを聞いて頷く天歌。

「そうだ、誰だってそうする。俺だつてそうする。飛んで来た矢を剣で切るのは漫画の中だけで、実際は盾で防ぐ方がよっぽど簡単だぜ。」

そしてある時こんな事があつた。俺のゲージ溜め必殺、『静脈注射乱れ打ち』! 上手く不意をついたおかげでこいつが当たりかけた事があつた。当然、念動力を使う奏丞としては

「念動力で防いだ……?」

「そう、奏丞に当たる事なく空中で弾かれたよ。ここまでは良かった。そんな芸当ができると知れただけでも収穫だった。」

だが問題はここからだ。その時おかしな事を見つけたんだ。『弾かれ方がおかしいとな』

そう言つて天歌は懐から注射器を取り出し、壁に投げつける。壁に当たつた注射器は針がへし折れて、ほぼ真下に落ちた。

次に天歌はいたみに向き直り、

「いくぞで」

「へっ!? ちよっ」

注射器を投げる。いたみは慌てながらも、ビンタをする様にそれを弾いた。注射器は明後日の方向へ飛んでいく。

「もう、名瀬ちゃん!」

「悪い悪い。とまあ、ここまで来たら何があつたかわかるな」

「うん、今みたいに……」

「そう、横合いから殴られたみてーに弾かれたんだ。ついでに言うとその時は六本だったが、全部バラバラの方向に飛んでつたよ」

常人ならば見逃してしまふ様な些細な疑問だった。仮にそれに気付いたとしても、だからどうしたと言われる事だろう。

だが、天歌にとってはそうではなかった。

「念動力には形がないって話だったな。だが奏丞はわざわざ壁ではなく、野球選手がボール目掛けてバットを振り抜くみてーに注射器を防いだ。

そこで俺はこう仮説したんだ。『奏丞の念動力には形があるのでは?』とな。そこらのスキルじゃ考えられない様な仮説だぜ。同時にその仮説が奏丞の能力の最大の秘密じゃないかと思つたのさ」

夭歌は持つている資料をペラペラとめくつていく。

「俺は形を取りたいと考えた。『念動力の形』って奴を知りたかった。

そこで俺は自分の実験室を改造して、とにかく形を取れる環境を作つていった。警戒してる奏丞はなかなかそこに来なかつたけど、なんとか誘き出す事に成功して……」

いたみに資料を差し出してくる。夭歌は見てみると促した。

そこにあつたのは巨大な手形だった。

「これつて、まさか……」

「実験室の扉をぶつ飛ばした時にベッコリできた拳形、葉まみれの壁や床についた跡……解答一つを出せるだけのデータは十分に集まつたぜ」

資料から顔を上げたいたみと、夭歌の視線が合う。

「次の実験で、俺はアイツの秘密を暴いてやる。だから古賀ちゃん」

「言われなくても協力するよ」

いたみはにつ、と笑って、

「だって私は名瀬ちゃんの実験動物だもんね」

「……愛してるぜー古賀ちゃん」

「私も愛してるよ名瀬ちゃん！」

……さて、天歌といたみの二人がイチャついている頃、奏丞はというと。

「ハーックシヨイチクシヨイ！ ……むう、なんか寒気がする。なんなんだこのイヤな予感……というか原因はあいっらしかいねえ。今ローリング・ストーン出したら俺の方に転がってきそうだ……」

イヤな予感こそよく当たるもので、今回も例に洩れず的中する事となる。

天歌といたみ、中学三年生の二人が卒業する、ある春の日に――

第十話：改造人間と幽波紋！

「レッツパーリー！（訳：俺達も卒業したことだし、後輩として送別会でもしてくれよ）」
「焦るな、c o o r にいこうぜ（訳：送るのが一人で送られるのが二人の送別会ってのも変な感じがするけど、わかったよ。元からそのつもりだったしな）」

「奏丞え、全力で来い！（訳：盛大に頼むぜ！）」

「ねえ、なんで二人して伊達○宗テイストなの？ しかもなんで会話できてるの？ ただでさえ私って孤立しがちなのに、これ以上置いてきぼりにしないでよ！」

卒業式を終えてすぐの奏丞達の会話である。意味がわからなかった。

さて今の通り、奏丞は在校生として天歌といたみを見送る為に送別会を開く事となった。

奏丞が暮らす寮や両親がいたみの家では騒ぎたくとも騒がないので、会場は天歌のマンションになる。防音設備も整っているので、多少騒いでも隣室に迷惑はかけないだろうという判断だ。

「にしてもでっかいケーキ送ってくれたなあ、兄貴達。こりや食い出があるわ」

とある洋菓子店で働いている兄達に事前に頼んでおいた、手作りのチョコレートケーキを持って夭歌のマンションへ急ぐ。

食べるのは三人だと確かに断っておいたのだが、二人の姉が随分と張り切ったらしく、一日で食べきるには結構苦勞するだろう。一般女性なら確実に脳裏を体重計がよぎる程の量だ。

もつとも、実際にこれから食べる女性二人に限って言えば、脳や身体にエネルギーを使っているので体重計にも縁がないかもしれないが。

「おーい夭歌ー、来たぞー」

ピンポーン。

インターホンを鳴らしてしばし待つが……返事がない。

「………夭歌?」

再度インターホンを鳴らしてみるも、やはり反応はない。

留守にしているのかとドアノブに手をかけてみると、鍵がかかっていない事がわかった。

勝手知ったる何とやら、訝しく思いつつも中に入ってみる。だがそこにあるのは見慣れた夭歌の部屋で、特に異常も見つけられない。

クローゼットの存在が忘れられているかの様に無造作にソファに放られた夭歌の私

服、無駄に大きいテーブルに積み重なった少年ジャンプ、ショーケースに飾られた紙袋コレクシヨン……変な物もあるが、これがいつもの天歌の部屋だった。

「鍵開けっ放しで出て行ったのか？ んな物騒な……」

しかし、何はともあれケーキを早く片付けるべきだろうと考え、奏丞が冷蔵庫に向かった、その時。

——とうおるるるるん。

懐の携帯電話が鳴った。決して玩具や食べ物ではない事に注意。

「うわ、タイミング良すぎ……」

相手は今ここにいない天歌達だろうという事は想像に難くない。しかし部屋に入つてすぐに電話が鳴ったあたり、何とも嫌な予感がする。

奏丞は一先ずケーキをキッチンに置いて、携帯電話を取り出す。

相手はもちろん……

『よお奏丞、俺だよ』

「わかつてるよ……」

案の定天歌だった。

「お前今何やってんだ？ 玄関の鍵が閉まってなかったぞ。ちよつと物騒すぎるぜ」

『えーマジ？ そりゃー大変だ、だったら早く閉めないとなー』

天歌がそう言った次の瞬間。

ガシャン！ ガシャン！！

「……………どういうつもりだ？」

『こういうつもりだ』

突如降りて来たシャッターによって、窓も扉も封鎖されてしまった。

「……………まさかとは思ってたけどよ、この送別会つてのはあれか？ 思い出作りに俺と古

賀先輩を戦わせるっつー……………」

『ズバリだな、話が早くて助かるぜ。』

その通り、俺の大親友と出来のいい後輩クンには今から殺し合いをしてもらいま

す』

「親友と後輩持つてる奴の発言じゃねーぞソレ」

奏丞は電話片手にガンガンとシャッターを蹴ってみる。どうやらそこらの鎧戸とは桁違いの強度らしい。

出入口を塞がれたという事はつまり、この部屋からは脱出出来なくなったという事か。

『おっと、安心してくれていいぜ。塞いでるのは外に繋がる所だけだ。部屋同士の間の壁や床なら頑張りやブツ壊せるからよ』

「隣近所に押し入れってか。後でどんだけ賠償金払う事になると思ってたんだ」
『んな心配しなくても請求しねーよ』

「いや、少なくとも大家は確実に請求するだろ。壁ブツ壊されたりしたら」
『その大家本人がしねーって言ってるだろ』

……………?

「……………夭歌」

『どーした?』

「なーんかお前の言う事聞いてるとよ、お前がこのマンションの持ち主みたいに聞こえるんだけど」

『そーだけど』

「……………」

『……………』

「……………えっ、何それ怖い」

『……………言ってなかったか? そのマンションは土地ごと俺の所有物で、住んでる奴なんか他にいねーからな?』

「……………マジか」

道理でこの二年間、一度もここで他人に会わなかったわけだ。

人に会わないなー、とは思っていたが、まさかマンション自体が天歌の物だったとは。『つまり、どれだけ暴れようと問題ねーって事だ。プロレスしようがガラスを割ろうが……天井をブチ破ろうが、な』

——奏丞の足下が爆発した。

「ぐうっ!」

突然の衝撃に吹き飛ばされて一瞬前後不覚に陥るも、辛うじてハーヴェストを展開し、受け止めさせる事に成功した。

下手をすれば機の角や食器棚に頭から突っ込む危険があったのだ。

今の衝撃で手放してしまった携帯電話から天歌の声が響く。

『せっかくのバトルパートだからな、改めて紹介するぜ。』

俺の可愛い実験動物だ』

先の爆発の正体は、

「ジャジャジャジャー☆ 可愛い名瀬ちゃんの改造人間古賀いたみ、華麗に見参！

一人で戦う君に私達は倒せないよ！」

床をブチ抜いて来たいたみだった。天歌の改造を受け入れて手に入れたそのパワーは、とうに人間を超えていた。

「さあさあいざいざ☆ ふふふ、宇城くん！ 今日という日が来るのを待っていたのは

名瀬ちゃんだけじゃない……んだけど……ちよつと聞いているの？ どつか打ち所が悪かったの……？」

その言葉にも奏丞は応えず、目もくれず、あらぬ方向に顔を向けている。どういふ事かといたみはそちらを見てみて……

「『……あ』」

隠しカメラで様子を見ていた夭歌と声を揃えた。

奏丞が見つめていた先は——キッチンだった。

「……………ケーキが」

運が悪いのか、それとも必然か。飛散した瓦礫の直撃を受けた柔らかなケーキが、無事に形を保っていらられる筈がなく。

「……………兄貴達に作ってもらったケーキが」

そこにあるのはただただ無惨な屍を晒す、潰れたチヨコレートケーキだけだった。

そこに目を向けたまま、こぼれる様に口を開く。

「……………あのケーキはさ、一ヶ月前から兄貴達に頼んでおいたケーキなんだ。二人いる先輩達の為に送別会をやりたいから、美味しいケーキを作ってほしいってよ。

最高のケーキを作ってやるって、兄貴達はわざわざ友達も呼んで、皆で構想を練って、結局あんなにでっかいケーキになっちまって……あれで三人分だけ？ はは、生物だか

ら長持ちしないつてのによオ……」

「……………」

『……………』

いたみも夭歌も、何も言わない。ともすれば独り言の様にも思える言葉を聞いて今、二人は間違いないく……気圧されていた。

「そのケーキによ、ええ？ トッピングにコンクリートはいかがですか？ ハハハ、大したジョークだぜ」

ト ト ト ト ト ト ト ト ト ト

『……………ヤバイぜ古賀ちゃん』

やつとの事で夭歌は声を出す。

事態は夭歌達の想定外の方向へ転がってしまった。

『奏丞は不意打ちされた事よりも家族に作ってもらったケーキを台無しにされた事を怒るタイプ！』

「そんなイカれたジョークをよオー、『知らなかった』とか『そんなつもりじゃなかった』とか、そんな虫がいい弁解で許すなんてのは無理つてもんだ……」

夭歌は長年の付き合いで奏丞がキレるかキレないかのギリギリの線を把握し、今回も辛うじてキレない程度の不意打ちにしたつもりだった。

その結果……地雷を踏み抜いてしまった。

「こんな事見せられて……頭に来ねえヤツはいねえッ！」

『古賀ちゃん来るぜ！』

「うりやああああー！」

いたみが雄叫びを上げて、尋常ならざる膂力で傍のダンスを投擲し、その影に隠れて一気に接近する。

「……………」

勢いよく迫るダンスを、奏丞はスタープラチナで粉碎する。

バラバラに砕け散る破片の向こう側で、いたみが拳を振りかぶっていた。

「えいッ！」

パンツ、と乾いた音を立てて、いたみの拳がスタープラチナに受け止められる。

「せいッ！」

蹴りを放つ。

スタープラチナが受け止める。

「ウララララララララララララララララララララア!!」

拳と蹴りの嵐が吹き荒れる。

まるでサンドバッグを殴るかの様な遠慮のなきで、いたみがひたすら攻め続け……そ

の全てをスタープラチナが受け止める。

「むむ、全然当たらない……いっとオ！」

いたみのハイキックを防いで、奏丞がようやく口を開く。

「古賀先輩、耐久力には自信ありますか……？」

「! ……へ、へへへ、名瀬ちゃんの改造はダメじゃないよっ!」

「そーですか、では……腹ア行くぞッ!」

その言葉を聞き、いたみは即座に両手で腹をガードして腹筋に力を入れ――

「オラアッ!!」

「ゴあっ!」

凄まじい衝撃を受けて、いたみの身体が吹き飛ぶ。痛みを感じる間もなく背中が天井にブチ当たり、そのままコンクリートを破壊して突き抜ける。

奏丞は天井にできた穴を見、次に部屋の隅を見つめて、

「天歌! 貴様見ているなッ!」

「!」

隠しカメラの向こうで戦闘を見守っていた天歌は息を呑んだ。

「古賀先輩の次はお前の番だから……」

『(怖エー!?)』

奏丞はそう言い残し、上階に消えたいたみを追って天井に開いた穴に飛び込んだ。

入った部屋もさつきまでいた部屋、天歌の部屋と同じ作りになっており、違いと言えばせいぜい置いてある小物が違う程度だ。

その部屋の中を見回してみたが……いたみがない。

手加減をしていた（本気でやれば拳が貫通する）とはいえ、天歌に話しかけている短時間で、あのダメージで即行動できる余力が残っている辺りは流石改造人間と言った所か。確かに人間離れた耐久力、そして回復力だ。

しかしこの部屋には隠れる場所はそう多くない。

キッチンの方に行ったか、洗面所の方に行ったか、あるいは……すぐ傍のクローゼットのなか。

「一番怪しいのがここなんだよな……」

そう呟いて、奏丞が勢いよくクローゼットの扉を開け放すと。

「いっつは……」

そこにはポツカリと開いた穴があった。

覗いてみれば、隣の部屋に通じているらしい。

ならばいたみはこの先に？

「……チッ」

奏丞は舌打ちを一つして、クローゼットの中に入り――

「スキありイー!」

「ねえよ」

「えっ……」

背後からの奇襲をあつさりとは防がれ、いたみが目を剥いた。

「そのこのテープルの裏に張り付いてたな? そしてこの穴に意識を奪われて背中を向けている所を奇襲……悪くはないんじゃないやねーの」

それを聞いているいたみはこれから起こるであろう事を考えて、だんだんと表情を引きつらせていく。

「い、痛くしないでね……?」

「安心しろ……次も腹だからよッ!」

「ぐふっ!」

スタープラチナの拳を受けて吹き飛んだいたみは、反対側の壁を突き破って隣の部屋へ。

しかし拳に伝わった感触は……

「腹に雑誌を仕込んでたな……!」

この分だと今のダメージもすぐに回復するだろう。

追撃の為に、奏丞は間髪容れずにいたみを追う。

思った通り、早くも立ち上がろうとしていたいたみを見て、奏丞は使うスタンドを変えた。

「これでも喰らいなッ!」

そのスタンドはかつて天歌の前でも使った事があるスタンド。

「ホワイト・アルバムツ!!」

ついテンションが上がってスタンド名を喋ってしまった。奏丞だった。

ホワイト・アルバムは冷気のスタンドだ。その気になれば人体を一瞬で凍らせて砕いてしまう事さえできる。

しかし加減して使えば問題はない。腕でガードしようが雑誌を腹に挟もうが、冷気からは逃れられないのだ。

そして冷気は運動能力を著しく減退させる。

いくら改造人間のいたみでも、その驚異的な身体能力を失えば素手での鎮圧すら奏丞には可能になる。

瞬く間に部屋は凍っていき、既にマイナス何十度という環境の中……

「はああああああ!!」

「はあっ!? まずっ」

「お返しだああああ!!」

「ホワイト・アルバムツ……!!」

極寒においてあり得ない程のスピードでいたみが接近する。

奏丞がスタンドを変える暇はなく、しかし辛うじてホワイト・アルバムの『スーツ』を腹の部分に纏い、初撃を防ぐ事はできた。

「この熱ツ、まさかシバリング……!!? アンタ美食屋にでもなるつもりかよ!!」

「ガンガンいくぞおおおおおお!!」

身体から凄まじい熱を発しながら、いたみが拳を繰り出す。

既に全身に纏い終わったスーツの防御力は、スタンドのラッシュすら防げる程のもの

だが……

「(ヤバイ、『冷氣』が効かないツ！　だがこれ以上パワーを上げたら殺しかねない……反

撃できねえ……!!)」

身に纏うタイプのホワイト・アルバムは身体能力を上げるスタンドではない。そして奏丞自身の力ではいたみの力に対抗できない以上、押し負けるのは必然だった。

「ダブルいたみキーツク!!」

「ただのドロップキックだろうがあああ!!」

今度は奏丞が吹き飛ばされる番だった。

入って来た穴を更に大きく破壊し、壁を何枚も突き破って部屋を繋げていく。スーツのおかげで身体に傷はないが、その衝撃は振動となって脳を揺らした。

ホワイト・アルバムを解除して立ち上がるとしたが視界が揺れて上手くいかず、奏丞は思わず手をついた。

「ぐっ、予想外のダメージだぞ……」

『こっちは予想外の収穫だぜ』

「夭歌!」

どこからか聞こえてきた夭歌の声に奏丞は周囲を見回すが、姿はどこにもない。

代わりに見つけたのが、呼び出し音も鳴らさずに作動していた電話だった。

『面白いもん見せてくれたな。さっきのスーツ……』
『ホワイト・アルバム』
『つつてたか?』
『なーんか見えて来たぜ、お前の能力が』

「……へえ、俺の能力がわかったのか?」

『もちろん全てがってわけじゃねー。だがわかった事もある。』

『その一つが……お前が複数の能力を同時に使う事はできねーって事だ』

「……………」

『凶星か?』
『そもそも最初は古賀ちゃんの攻撃を完全に防げてたつてのに、冷気的能力を使い始めた途端に氷のスーツで防衛……おかしな話だぜ。そんなにフラフラになっ』

でも使わないって事は、使えないって事だろ。

そして違う能力を使う際には、おそらく幾ばくかのブランクが生まれる。

まるで状況に合わせてメモリを変えて戦う仮面ライダーみたいだぜ』

「……で、そこまで結論出せたなら……どうする？ 今終わらせて誠心誠意反省するなら拳骨で済ませてやらねえ事もねーぞ」

『実に魅力的な提案だが、謝罪は後にするぜ。実験は続行だ』

「……古賀先輩はもう長くは戦えないだろ」

『へー、もう気付いたのか？ 古賀ちゃんの弱点を』

「あの小さな身体であるのパフォーマンスを発揮するなら、相当なエネルギーを使うんだろ？ しかもさっきの……」

『シバリングか。確かにジャンプを読む人間なら、そこから連想できてもおかしくはないな。』

その通り、古賀ちゃんは代謝が良すぎるせいで、全力で稼働できるのはせいぜい五分程度。エネルギー切れはまさに死活問題だ。

だが……』

壁の向こうに姿を見せるいたみ。

その手が握り潰して放った缶を見て、奏丞は顔が引きつった。

『ツーカヤベエゼツ！ 弾が多スギルツ』

更にセックス・ピストルズは一体一体が意思を持っている珍しいスタンドだ。それ故に賑やかで騒がしく、しかも定期的に食事をさせてやらないと拗ねてしまうという、少々厄介なスタンドでもある。

そんなセックス・ピストルズの能力は……

「ゴチャゴチャ言つてねーでさっさと跳ね返せ！ 今日にはトスカーナのサラミを奮発するぜー！」

『イヤツホオーウ！ マジカヨ、ダツタラ張り切ルゼエー！』

『うえええくん無茶ダヨオー！ 無敵のキング・クリムゾンデモ使ツテヨオー！』

『馬鹿ツ、コレハ麻酔弾ダゾ!? コーユー時こそ俺タチナンダヨー！』

弾道操作である。

『オラオラオラアーツ』

『アリアリアアーツ』

『無駄無駄無駄アーツ』

セックス・ピストルズ達が飛び回り、弾を弾き返していく。

その弾丸の行き先は。

「きゃあああ!?!」

外でもない、発射したいたみの元だ。

「撃つていいのは撃たれる覚悟がある奴だけだぜ、古賀先輩」

『ナーニカツコツケテンダヨ』

『ギャハハハ、針ネズミダゼツ！』

『痛ソーダナア……』

大量の麻酔弾を受けてよろめいているいたみをセックス・ピストルズ達と一緒に見守っていると。

『奏丞、やっぱりお前の傍にはなんかがいるな』

「天歌……」

『映像を解析してみたら、どれもこれもおかしな弾道になってたぜ。古賀ちゃんを殴った能力、冷気の能力、それとはまた違った能力だ。』

しかもお前の視線は何もない空中を行ったり来たり……

まあ、何よりもさっきの発言がこの上ない答えだがな』

——ゴチャゴチャ言っただけでさっさと跳ね返せ！ 今日にはトスカーナのサラミを奮発するぜ！

『たった今出た結論を言うぜ。』

“お前の能力にはそれぞれの形がある”

物をブン殴る能力の形、弾道を変える能力の形……もしかしたら冷気能力の形はさっきのスーツだったり？

しかもその全て、あるいは一部には意思すらある。

「お前の傍でスプーンを曲げている誰かがいる」って言えばしつくりくるな』
正解だ。

奏丞は内心驚愕し、そして同時に称賛した。

流石は天歌だ、と。

見えない、しかも全く未知の能力であるスタンドを、結果という形では何度も見たとは言え、奏丞から何のヒントも与えられる事なくそこまで解き明かしたのだ。

その洞察力、そして何よりここまで来る執念は大した物だ。

「お前相手に色々見せちまったのは大きなミスだな。まさかノーヒントでそこまでバレちまうとは」

『むしろ解いてくれと言わんばかりだったぜ。あんだだけ俺に見せておいて、隠し通せるわけねーだろ』

「だったらそろそろ出て来い。今回のお前の目的はほとんど達成されてるだろ？」

それにあんだだけ麻酔受けりや古賀先輩も「まだまだイケるよー☆」は？」

さっきまで麻酔弾を受けてよろめいていた筈のいたみは……その両足でしかと立ち

直り、ニヤリと笑っていた。

「……まさか、天歌」

『お前が当たれば一発で昏倒もんだけど、俺が改造した古賀ちゃんにはその程度の麻醉効かねーぞ。逆に撃たれた時を想定しとけば当然する処置だ』

「そーいう事！ アクシヨンゲームにもよくあるでしょ？ 攻撃が敵には効くけど味方には効かない事。あれよあれ。」

でも改めて考えてみたらあれって凄く有利なシステムだよねー☆
つまり、まだいたみは奏丞と戦えるという事であり。

まだ、奏丞はいたみと戦わなければならないという事だ。

「……天歌、もう止めねーか？」

『……………』

「さつきはトサカに来てつい攻撃しちまったけど、ぶっちゃけ古賀先輩をボコるのも気分が良いもんじゃないんだよ。」

これ以上は……」

「それって殴ったら可哀想って意味？ だとしたら凄く生意気！ 名瀬ちゃんの改造人間をナメないでよね！」

『……………というわけだ。実験は続行する』

「……仕方ねー、だったらわかりやすく言ってやる」

もつと活躍させろと喚くセックス・ピストルズを戻し、別のスタンドを出す。

それは、凄まじいパワーを持ちながら他の近距離型スタンドよりも射程距離が長く、しかもレッド・ホット・チリペツパーと違っていたみには姿が見えないスタンド。

「ザ・ワールド
世界」

「『ッ!?!』」

そのスタンドを展開した瞬間、向き合ういたみが、そしてモニター越しに見ている天歌が、言い様のない怖気を感じた。

「性懲りもなく腹にいくぜ……ガードしな」

「くっ……」

いたみは慌てて両手の銃を交差させて腹を守り——吹き飛んだ。

「がはあっ!?!」

飛んでいくいたみに反して奏丞はさっきの位置から全く動いていない。7メートルは離れていたにも関わらず、あれほどの威力でいたみを攻撃できたのだ。

天歌は改めて理解した。

『攻撃が見えない』という圧倒的不利を。

「まあ、凄かったよ、お前は。」

古賀先輩のポテンシャルには驚きっぱなしだし、お前はドンドン秘密を解いていつて。てこずった事も素直に認めよう。

「だけど、それでも俺には勝てねー。いくら回復力があるうと、立ち上がる度に攻撃されてりやどうしようもない」

『……………』

「いくら丈夫だからって、何度ボコられても構わないって言う程お前にとって軽い存在じゃないだろ、古賀先輩は。」

「そろそろ引き際じゃねーのか」

『……………』

「夭歌は無言だった。」

「その沈黙は奏丞の言葉を肯定しているとも取れる。」

「間を置いて、ようやく夭歌が喋ろうとした、その時。」

「お前が言うなああああ!!」

「!」

「食器棚が突進して来た。いや、いたみがそれを盾にして突っ込んで来たのだ。」

「それを見て奏丞は横に避ける。」

「奏丞とすれ違った直後、いたみは急停止し、食器棚を奏丞目掛けて豪快に振り抜く。」

世界の手が食器棚を受け止める。

いたみは躊躇なくそれを手放し、奏丞の懐に飛び込む。

「名瀬ちゃんの気も知らないでえーッ!」

「オラアッ!」

「ぐふっ!」

両手が使えなくとも足が使える。

世界に蹴り飛ばされて、いたみが床を転がっていく。

「名瀬ちゃんも、名瀬だつて知りたかつたんだ!」

『こ、古賀ちゃん……?』

すぐさま立ち上がったいたみの叫びを聞き、天歌が戸惑う様な声を出した。

「名瀬ちゃんから聞いたよ! 宇城くんは全然秘密を話してくれないつて! ちよつと

ぐらい宇城くんの事を教えてくれたつていいのにつて!」

「……は? いや、だつてそんなもんバラしたら」

「何されるかわかんないつて!」

馬鹿ツ、鈍感、唐変木!

何が心の声が聞こえるよ、ぜえ~~~~~……んぜんわかつてないじゃん!」

『古賀ちゃんマジで何言つてるのおー!! 俺にはサツパリなんだけど!』

「もう、揃いも揃ってニブいんだから！」

「だったら名瀬ちゃん、お兄さんが奏丞の秘密を知ってるってわかってどう思った!?」
「ちよつと待て、何でそれを」

「名瀬ちゃんが集めた資料を見たけど、お兄さんはマネージメントの天才とか魔法使いとか言われてる人なんでしょ!?! しかもトレーナーとしても抜群の能力！」

「そんな人が、個人の能力も把握せずに人を鍛えるわけがないって名瀬ちゃんが言ってたよ! そんな鍛え方したってロクな成果は出ないって!」

その通りである。

奏丞は自身を鍛えてもらう為に、スタンドの事を真黒に話している。

それはそうだ、そもそも奏丞の戦闘はスタンドを使った物になるのに、例えば善吉の様には格闘技を極めても仕方がない。

奏丞には奏丞に合った適切なトレーニングがあり、その為にはどうしてもスタンドについて真黒に話す必要があったのだ。

「それでどうなの名瀬ちゃん!?! なんか宇城くんに言いたい事があるんじゃないの!?!」
『ど、どうって言われてもよ!……』

初めていたみが見せる剣幕に、夭歌は戸惑いながらもそれを話す。

『まあ、なんだかんだで生き方考え直す機会をくれた奏丞には感謝してるぜ?』

やるだけやったら後は放置ってのはいたただけなかつたけどよ」

「……………」

『でも仕方ないとは思うぜ？ やつぱそーいう “未知” って自分の力で見つけるもんだろうし。』

まあ、先に知った上にこんだけ手間かけてる俺には全然話さねーのに、兄貴にはアツサリ話したつてのも気に入らないけどよー』

「……………」

『大体鍛えたいなら俺に頼れば今以上に凶化してやれてたのによー。』

いや、俺は家出してたから近場の兄貴を頼るのもそりゃわからなくはないぜ?』

「……………」

しばしの沈黙の後。

『…………あれ、なんか結構ムカつくな』

天歌は言った。

「えー…………そう言われても…………」

「でしょでしょ!?! 名瀬ちゃんはこんなに頑張ってるのになんにも教えてくれないのって扱い酷すぎだよね!」

男ならいいのかこのホモ野郎って感じだよね!」

『……なるほど、俺が柄にもなくムキになってた理由がよくわかったぜ。

サンキュー古賀ちゃん、なんだか視界が開けた様な気分だ』

どこか清々しきさを感じさせる夭歌の言葉に、いたみがウンウンと頷く。

「これで今何をすべきなのかハッキリしたよね、名瀬ちゃん」

『ああ……そこのマヌケ面をいたぶる事だ』

「おい……」

「そうと決まれば戦闘再開！ 乙女の敵を二人でボコボコにしよう！」

『そうしよう。まったく、持つべき者は親友だな』

「趣旨が変わってるんじゃない?!」

能力解明の為の戦闘だった筈が、いつの間にか単なる鬱憤晴らしとなっていた。

この分だと戦闘もまだ終わりそうにない。

いたみは改めて構え直す。

「というわけで宇城くん覚悟！ この場にはいない名瀬ちゃんに代わってお仕置きだー
！」

「結局こうなのか……！」

「おりゃああああ!!」

雄叫びを上げて、いたみが床を殴りつけた。

そこを中心に、見る見るうちに亀裂が床を走り抜ける。

「ライダーキーツク!!」

「ツ！ 床が崩れ……!」

跳び上がり、天井を蹴つてのそれに、亀裂だらけの床は耐えられなかった。

瓦礫と共に階下の部屋に落下しつつ、奏丞は一足先に着地した筈のいたみを探す。

その後ろ姿がキツチンへ逃げ込むのを見つけた。

「逃げてても無駄だぞー!」

リビングとキツチンを隔てる壁を世界が破壊する。

そこにいたいたみは、冷蔵庫から見覚えがある缶を取り出していた。

天歌特製のエナジードリンクだ。

「補給はさせね「くらええええー」げえっ」

ボールを投げる様に缶を振り下ろすのと同時に、その握力で缶を握り潰す。

得体の知れないゲル状の液体が奏丞に降り注いだ。

「くっ!?!」

世界がテーブルを盾にして防ぐ。

ベチャベチャと音を立てて、液体だか固体だかわからない、おぞましい色をした物体が飛び散る。

「ライダージャンプ☆」

「あつ、待ちやがれ！」

いたみは高く跳躍して、上の部屋の天井を突き抜けて姿を消した。

奏丞はすぐさま後を追うつもりだったが、またしても部屋の電話から天歌の声が聞こえてきて出端を折られる。

『奏丞。思えばこの二年間、色々とあつたよな』

「……なんだいきなり」

『部活作って、活動して、友達作って、遊んで……まさかこの俺がこんなに中学生らしい学生生活を送る事になるとは思わなかったぜ』

「……………」

『ハハッ、それももう終わりかと思うと、案外……』

天歌は少し間を置いて、

『奏丞、囲学部部长としての最後のレッスンだ。よく聞けよ』

「……………」

『C3H8……プロパンは本来無色無臭の気体だ。ついでに空気よりも重いから底へ底へと溜まっていく』

「何を……………」

天歌が唐突に話し始めた説明を訝しく思いながらも、同時に嫌な予感が沸々と湧いてくる。

『だがガス漏れ時には気付きやすい様について事で、家庭用のプロパンにはメチルメルカブタンつー着臭剤が加えてある。

さて、それがどんな臭いかというと』

腐臭が奏丞の鼻をついた。

ハツとしてフルオープンになつたキッチンを、コンロを見る。

スイッチが、入っていた。しかし火はついていなかった。

まさか、いたみがキッチンに向かつた本当の理由は。

天歌が突然始めた話の狙いは。

『タマネギが腐つた様な臭いらしいぜ』

「うおおおおおおおおおおおお！」

『それでは奏丞——BニITEブTHEチD死USTね』

『ザ・ワールド
世界ッ!!』

☆☆☆

マンションから少し離れた所にある専用駐車場。

そこに停めてある10トントラックの中で、現在天歌は多数のコンピュータに囲まれていた。

これらのコンピュータはマンション内に隠されているあらゆるカメラ、センサーなどと繋がっていて、更にシャッターを降ろしたりコンロを再点火したりと、マンション内の仕掛けの操作も可能だ。

天歌はここからいたみに指示を出しながら様々な角度から奏丞の能力を観察、解析していた。

「……………」

ガス爆発をやり過ぎだとは思わなかった。

天歌は漏れたプロパンの量は正確に把握しており、そこから起こる爆発は奏丞が防げなかったとしても治療できる規模であると計算していたのだ。

しかし、天歌の注目は既に爆発した部屋から離れていた。

「古賀ちゃん、言っちゃダメだぜ……」

天歌がコンソールを叩きながら、モニターの中のいたみに呟く。

せめて自分がタネに気付くまではあの言葉を言っただけいい。

言った瞬間にゲームオーバーと言っても過言ではないあの言葉を――

『やったの!?!』

「(言っちゃった!)」

『違うな、やられるのさ』

『!?!』

「(ほらゲームオーバーじゃんもー!)」

いたみが背後を振り返って、奏丞と目が合った瞬間。

いたみは力が抜けたかのように崩れ落ちた。

「古賀ちゃん!?!」

『何をしたのか、あらかじめ言っておく。』

“古賀先輩のエネルギを吸い取った”。

怪我一つないから安心しろ』

「くっ……」

ここにきて新しい能力。

つくづく、ブラックボックスを相手にしている様な気分だ。

「(だが、本当の問題はこれだ……!)」

爆発前後の映像を見る。

それまでは下にいた筈の奏丞が爆発の直前に姿を消し、かと思えば既に上階のいたみの背後を取っているという異常。

否、姿を消してはいない。一ミリ秒たりとも、奏丞の姿は消えていないのだ。

ただ、過程だけが抜け落ちていた。

途中のセル画をなくしたアニメーションの様に、脈絡もなく移動していた。

「(こ、これは! ワープだとか超スピードだとか、そんなチャチなもんじゃあ断じてねエー!)」

奏丞の足下にできていた、存在しない筈の穴が決定打だった。

どこぞのサイヤ人よろしく瞬間移動ワープでもしたなら穴が開く理由はない。

どこぞの聖闘士よろしく超スピードで動いたなら、それによる影響が小さい穴一つで済むわけがない。

ならば移動する過程は、一体いつ行ったのか。

答えは一つしかなかった。

「奏丞―」

『……………』

天歌はマイクを掴んで叫んだ。

「お前、時間を止めたなツ!？」

それが答えだった。

『……………最初は瞬き程の一瞬しか止められない能力だった。

しかし練習を重ねるにつれ、1秒……………2秒と長く止められるようになった。今では4秒は止めていられる。

時が止まっているのに4秒と考えるのはおかしいが、とにかく4秒ほどだ……………ハハ。いずれは一分……………十分……………一時間と思いのまま止められるようになってやろう。

楽しみだ。だんだん長く時間を止めるのはな……………』

そう語る奏丞に、天歌は得体の知れないスゴ味を感じた。

まるで悪の帝王か何かを相手にしている様な感覚。

この道に入ってからは異常アブノーマルや過負荷マイナスについても見聞を広めてきたが、こうも清々しい程の『能力』然とした能力に出会ったのは天歌も初めてだった。

時を止める。

一体どんな屁理屈を使えばそんな事ができるのか。

『さて天歌、そんな所でふんぞり返ってないでそろそろ出て来い』

「む……男の方から来るのが甲斐性ってもんだろ？」

『人閉じ込めという何言ってやがる。』

「さっさと来ないと……」

「来ないと？」

『古賀先輩の髪は武藤遊戯になる』

「や、やめろオ！ 古賀ちゃんのお団子ヘアへの並々ならぬこだわりを知らねーのか！」

とんでもない外道だった。

髪型が遊戯なんて女からしたら拷問以外の何物でもない。

よくそんな恐ろしい事を考えつくものだ。

『な、名瀬ちゃん、私の事はいいから……来ちゃ、ダメ……！』

『あれれ、先輩、こんな所にポマードがあるよ？』

『い、いやあああああ！』

「古賀ちゃん!!? 古賀ちゃん!」

『それじゃあ天歌、早く来いよー』

「待っ……なに!？」

部屋中のカメラとセンサーが次々に動かなくなっていく。おそらく、何らかの方法で

破壊されているのだ。

部屋の様子がまったくわからなくなってしまうた。

「ぐっ、クソツタレ！」

天歌はマンション内のロックを全て外してトラックから飛び出す。

電話は破壊されていないのか、階段を駆け上がりながら携帯をかけてみると目的の部屋に通じた。

「奏丞！ 古賀ちゃんは無事なんだろうな!？」

『古賀先輩には今、三つ目の団子を味わってもらってる』

「てめーサザエさんみたいな髪型にしゃがったな!？」

天歌は息遣いを荒くして部屋に突入する。

そして奏丞を警戒しつっぴりピングに行ってみると、

「うっ……うっ……」

「こ、古賀ちゃんが……古賀ちゃんが……!？」

ソファにぐったりと座り込んで泣いていたいたみは、

「アトムみてーな髪型に!？」

「うえーん!？」

既に手遅れだった。

「くそつ、なんてひどい奴だ、うら若き乙女をアトムヘアにするなんて！
だかとにかく今はエネルギー補給だ。古賀ちゃん、早くこれを飲め！」

「うう、ありがとう……ああつ!？」

腕も上がらない程疲弊していたみが、目線で天歌の背後を示し、

「後ろに、いる……！」

「……………(ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ)」

「なんか、スゴくスタイリッシュなポーズしてる……！」

天歌の背後に奏丞がいた。

腕を組んで爪先立ちで立っていた。

「……………一つだ。奏丞、一つだけでも教えてもらおうぜ」

振り返らないまま、天歌は奏丞に話しかける。

「お前はその『能力』を、何て言ってるんだ？」

奏丞が応える。

「Stand by me Stand up to 傍に立つ、立ち向かう……俺はこの能力を『スタンド』と呼んでいる」

「スタンド、か……」

記憶に刻み込む様に、天歌はその言葉を呟いた。

「はは、やっぱスキルとは違うのか。」

そのスタンドとやら、もう少し観察してみたい所だな」

「いいや、もう終わりだぜ。天歌、お前が出て来た以上はな。

お前はチェスや将棋でいう『詰み』にはまったんだ」

「……………くくくく」

「……………何がおかしい」

おもむろに紙袋の中から笑い声が漏れ出してきた。

「奏丞よー、確かに俺は古賀ちゃんと違って非力だぜ。てめーの『スタンド』と殴り合いなんてできるわけねー。

だからこそ！ そんなか弱い俺が何の対策もなしに、ノコノコ姿を現すと思うか？」

「ほおー……………」

「『詰めろ逃れの詰めろ』……………将棋にはこんな言葉があるな。

相手が防いでくれなきゃこつちが詰む状況、『詰めろ』。そんな時はどうするのか？

……………相手に『詰めろ』をかけるのさ」

「今が『詰み』ではないと？」

「そう、つまりここは……………果敢に攻める時ッ」

突如、天歌の紙袋の内側がグネグネと蠢き始めた。

まるでそこに、天歌の頭以外の何かがあるかの様に。

次の瞬間、金属の触手達が紙袋を突き破って奏丞に殺到した。

「ぬウフフフ、たまげたかアああ！ これこそが、俺の脳波でコントロールできる触手型注射器！ その名も『蛇怪人』——」

「完全にアウトだボケエエエエエエエ!! ハーミット・パープルッ！」

「うおおおお!! なっ、何をするドウービー!? さ、刺され……………ぐう」

ハーミット・パープルによって触手が操作され、麻酔を打ち込まれた夭歌は意識を失って奏丞に倒れかかってきた。

奏丞は夭歌を抱き止めた所で事の成り行きを見守っていた。みと目が合い、しばしの沈黙の後同時に口を開いた。

「なんだこのオチ……」

この上なく釈然としないオチだった。

☆
☆
☆

「つて事があつてからもう一年たったのか。

……あれ、キング・クリムゾン独り歩きしてね？ まさか俺の中に別の人格がいるなんて事は……」

頭を抱えて唸る。

卒業式を目前にして、今日奏丞は理科室に足を運んでいた。

「……………」も今日で見納めだな」

揺籃中学校を卒業すれば囲学部に来る事はなくなる。

なんだかんだで今まで在籍していた部だ、感じる所もあつた。

「……思えば天歌達は色々と残していつてくれたんだな」

この部だつたり、揺籃中に残る伝説だつたり。

内二人が卒業した今でも『囲学部の三人』は語り種になっており、『三者を避くべし』と教訓の様に言い伝えられている。奏丞はその評判に負けない様にと奮闘していたのだ。

天歌といたみが卒業した今でも、彼女達の影響は色濃く残っていた。

「……………」よし、そろそろ行くか」

中学生活の思い出の整理を終え、奏丞は席を立つ。

扉まで来て振り返り、最後にもう一度中を見回して……奏丞は理科室を後にした。「結局中学生生活がボツチで終わってしまった……」

誤解から始まった悪しき風評は、ついに払拭できなかつたのだった。

第十一話：濃すぎる奴らと幽波紋！

奏丞は今、高校生活を満喫していた。歌でもひとつ歌いたい様な、実にスガスガしい気分だった。

しかし、実の所奏丞が箱庭学園に入学してからまだ三日しか経っていない。

ならば何故、こんなに奏丞の機嫌が良いのかというと。

「ああ、誰も俺を避けない……」

その小さな呟きが聞こえてしまった登校中の周りの生徒達が距離を置いた事には気付かなかつた。

揺籃中学校では根も葉もない噂のせいできにかく人に避けられていた。避けられ過ぎて『列に並ぶ』事に縁がなかつた程だ。

まるでモーセの様だ！ などとおどけてみたら余計に哀しくなった事を憶えている。

しかし、揺籃中から遠く離れたこの箱庭学園ならば奏丞の事など誰も知らない。今度こそ普通の学園生活（と言っても原作に入ればそうも言ってもらえないが）を送られる筈なのだ。

そして今日に至る。

奏丞は今、普通の日常を満喫していた。

「登校中悪いがツラ貸してくれ、揺籃中の宇城そ……つて早え!? 逃げた! 逃げやがった!」

オイちよつ、待てコラア!

満喫、していた。

☆☆☆

「あががが……」

「うおーいどうした奏丞、朝っぱらからなんて声出してんだよ」

「善吉イ……もしもの事があつたら俺の死は三年程は伏せておいてくれ」

「伏せなきやいけないお前はナニモンなんだよ……」。

せつかくまた同じ学校に通えるってのに、今度は死に別れなんて縁起でもないぜ」

「（やだ、さりげなくデレられた……）」

「そーいや今朝は校門の所でいきなり走りだしてたもんねー。」

なになにどしたの？ もしかして『思春期の書』を片付け忘れたとか？」

『悟りの書』みたいだなおい。

残念ながら外れです。全然違いまーす」

机でうつ伏せになっていた奏丞に話しかけてきたのは、人吉善吉と不知火半袖の二人だ。

真黒からの依頼で奏丞は善吉とは違う中学校に通っていたので会う頻度は減っていたが、交流は変わらず続いていた。なので高校では同じ学校に行けるとわかった時にはお互い喜んだものだ。

半袖とは昨日善吉に紹介されて知り合ったばかりで、付き合いはまだ浅いどころか無いに等しい。

にもかかわらず、原作知識などなくとも腹に一物隠していそうな所が既に伺える辺り、なかなか濃いキャラをしている。

そんな半袖と入学直後に知り合える善吉は、運が良いのか悪いのか。

「あ、もしかしてヤバイ奴に目をつけられたとか？ うわありそー！ 考えてみたら

メツチャ逃げてる感じだったしー♪」

「おいおい穏やかじゃないな。流石に入学早々お縄にかかる様な事は……してねーよな？」

「なに微妙に疑ってんだよケシオトを極めし男」

「あつ、やめろそれを言うな！ うわー、なんか今頃になって恥ずかしくなってきたんだけどー」

「あひやひや☆ ねえねえ人吉、ちゃんとマイ消しゴムは用意したー？」

「うおおおお、不知火お前まで……用意はしたけど」

「(したんだ……)」

人吉善吉。ウソかマコトか、中学時代『ケシオトを極めし男』と呼ばれた男である。

「まあ、あんま大した事じゃないから気にすんな」

「そうは言われても心配になるのが友達というもの。私と貴様の仲ではないか、困った事があるならなんでも相談するがいい」

「おい、後ろで真似られてるぞ……」

「……お前どつから湧いて出た」

手をヒラヒラと振る奏丞の真似をして背後に立っていたのはめだかだった。

「もうすぐ朝のホームルームだぞ。お前の教室遠いんだから早く戻った方がいいぞ」

「やれやれ、相変わらずつれない男だな。昨今の趨勢では例えメインヒロインでもツンデレは後塵を拝すものだというのが」

「善吉、黒神めだかの真骨頂その2を教えてくれ」

「めだかちゃん、ブーメランがマジやばいからそろそろ教室戻ろうか」

「わーお、なんか面白い奴だね♪」

人吉、ちよつとあたしの事も紹介してよー」

場が程良くカオスになってきた所でふと奏丞は教室の扉に目をやり、そして次の瞬間顔をひきつらせる事になる。

「オジャマーっと」

大男が教室に入って来た。

ガンツッ!

「うおっ!? なんだどうしたいいきなり机に頭ぶつけて!」

「むむ、明らかに様子がおかしいな。やはり何かとてつもない懸念があるのでは?」

「どしたの急に。なんか見えちゃいけない物でも見たの?」

……ん? 見えちゃいけない……ああ、なるほど」

「いいかお前ら、今から俺の名前を一切言うな。俺はこのまま寝る。チャイムが鳴るまで顔を上げないからな」

「いや、意味わかんねーぞ……」

その男は今朝奏丞に話しかけてきた男だった。

その身長は天井に頭が届く程大きかったが、しかし奇妙な事にそれだけ目立つ男がやって来たにもかかわらず、周りは一切ざわめかない。

善吉達も含めて、姿どころか扉が開いた事にすら誰も気付いていないみたいだった。

目的が奏丞なのは考えるまでもない。かと言って関わりたくないのも確かなので、奏丞はこうして顔を隠して事無きを得ようとしたが……

「おっ、いたいた。まったく、声かけた途端に逃げるなんてあんまりじゃねーの?」

すぐ傍でそう言われて、奏丞がとった行動とは……

「……………(人違いだからどっか行ってください、お願いだから)」

狸寝入りだった。

「おい、無視すんなよ。寝てるフリすんなって。」

……あれ、聞こえてるよな? おっかしいな、さつきは反応してたし……仕方ねえ」

次の瞬間。

「おい、これで聞こえるだろ」

「!!!?」

教室内に激震が走った。

奏丞以外の生徒達には、その大男が突然現れた様にしか見えなかったのだ。

「うおおおお!! アンタどつから出て来たんだ!! デビルデケエのにまったく気付かなかったッ!」

「おう、驚かせて悪いな。ちと用事があつたもんでな、大目に見てくれ」

「しかも気さくだ!」

「あー、やっぱり日之影先輩だったかー」

「知つてんのか不知火!」

「ああ、あれは伝説の『知られざる英雄』……つていうかウチの生徒会長なだけどね♪」

「なにいい!」

「わははは、照れるぜ」

「待て、問題はその生徒会長の日之影先輩が何故ここに来たかだ。一体何用得一年生の教室まで……」

めだかがそこまで言った所で、善吉達の視線がそこに集まる。それにつられて、騒然としていた他の生徒達の視線もまた、そこに集まる。

すなわち……狸寝入りしていた奏丞に。

「奏丞、お前まさかさつきから様子がおかしかったのは……」

「日之影先輩に目えつけられてたからって事だね。なんでかは知らないけど♪」

「……日之影先輩、差し出がましい事を言う様ですが、一体奏丞にどんな用が？　どうやら彼は拒絶しているらしいのですが」

「いや、俺としては少し話してみたかっただけなんだが……」

「話すとは、何を？」

「ちよつと揺か「わつかりました腹を割つて話し合いましたよう赤裸々に話し合いましたよう！　でももうすぐチャイムが鳴るんで続きは昼休みつて事でどうでしょうかねえ！」お、おう、それでいいよ……」

跳ね起きて言葉を遮つた奏丞に、空洞は若干引き気味である。

初めて見る幼馴染みの様子に善吉とめだかも目を丸くしていた。

「あー、じゃあ俺は行くよ。昼休みになったら「先輩の教室に行かせてもらいます！」。そうか、待つてるよ。ま、一緒にメシでも食いながら話しようや。」

ああ、ちなみに教室は三年十三組だからな」

そう言つて空洞は去つて行つた。

それを見送つて再度机に突つ伏した奏丞に善吉が声をかける。

「……つまりどういう事なんだ、奏丞？」

「……これは『試練』だ。過去に打ち勝てという『試練』と、俺は受け取つた」

「何故ここでいい台詞を言うのだ……おつといかん、私も戻らねばホームルームに遅れてしまうな。」

奏丞、詳しい話は後で聞かせてもらおうぞ」

そう言つてめだかも教室を出て行く。今後の事を考えて、少し憂鬱になった奏丞は、こつそりため息をついた。

ホームルームはめだかと入れ替わりにやって来た担任の下で進められたが、最後に一言、

「理事長がお呼びだから、宇城は放課後に理事長室に行きなさい」

「あばばば……」

「あひやひやひやひや♪」

全てわかつていても言う様な半袖の笑い声が、イヤに耳に残った。

☆
☆
☆

「来たか」

「……どーも」

昼休み。

奏丞は空洞との約束通り、三年十三組に来ていた。

「弁当か」

「ええ、まあ……先輩も？」

「ああ、買いに行つてもなかなか店員が気付いてくれないからな。自然と自炊する事が多くなったよ。」

席はどーすつか……誰もいないし、いいか」

空洞は正面の席を、まるでペンでも取る様にヒョイと片手で持ち上げ、自身の机と向かい合わせに置く。

奏丞はそこに座り、お互いに弁当を広げはじめた。

「……で、先輩。今回は俺にどんな用件が？」

「んー、いや、とりあえず一度お前と話しておきたかつたんだよな。どっちつかずの名瀬に唯一近づく男、『魔王の懐刀』。ガタイの良さから『名瀬天歌の怪物』とも呼ばれていたとか」

ベキッ。

「!」

「……ああ、失礼」

「い、いや、いいけどよ、お前の箸が……折れてない……?」

思わずへし折ってしまった箸をクレイジー・ダイヤモンドで直す。

その二つ名は中学校でできた物だ。天歌と関わっているうちにいつの間にかできたそれは、天歌達が卒業した後でも生徒達の間で真しやかに囁かれていたのだ。

結局奏丞が卒業するまで、修正できなかつた過去の一つである。

「まさかとは思いますが、その話はこの学校にまで轟いてるんですか?」

「いや、一般生徒はまず知らないだろうな。知る人ぞ知るって程度だ。」

「……もしかして、つーかもしかしなくても、あんま知られたくない事だったか?」

「そりゃそーですよ! 誰が好き好んで『俺って腰巾着なんスよ』なんて広めたりするんですか!」

俺は! 懐刀でも怪物でもなアーいッ! (プチュツ)

「おい、プチトマトが潰れ……てない。どうなつてんだこりや……まあ落ち着け落ち着け」

興奮した奏丞を宥める空洞。噂に聞いていた人物とはキャラが違っている事がわかり、これは話が一人歩きしたパターンだな、と徐々に察していた。

「単刀直入に聞くが、揺籃中で何か問題を起こした事は」

「イメージアップの為に花に水をやってみたら停学になりましたが何か」

「(どんな過程があつたんだ……) 誰かを傷つけた事は」

「高い所にある本を取ってやったら気絶されましたが何か」

「(ああ、やつぱマジモンだわ) ……ならこの学園を選んだ理由は？」

「家から近くて俺の噂を知ってる奴がいなさそうだから」

「……そうか」

そう言つて空洞は黙り込み、再び弁当をつつき始める。それを見て、奏丞も同じく食事を再開した。

「(本当は何故俺が見えてるのかも聞きたかつたんだがな……)」

日之影空洞の『知られざる英雄』。その強大さから誰もが目を逸らし、存在を忘れたく
なるという異常。^{アンノーマル}

実はこの異常は、奏丞が教室に入つて来る前から発動していたのだ。

本来ならば空洞と約束した事すら忘れてしまう筈だが、しかし奏丞は約束通りにここ
に来て、しかも難なく空洞を見つけた事ができた。

空洞にとって初めての出来事である。

そしてそんな芸当をするには、

「スキルが効かないカラクリがあるのか、あるいは忘れる必要がない程の実力があるのか……だが見た感じだと前者っぽいな（よなあ？）」

一般生徒より体格が良いのは確かだが、ならば空洞に匹敵する程の身体能力がありそうかと言われると、それは否だ。何らかの異常を持っている可能性の方が高いだろう。

お互いの弁当を空にした頃に、ようやく空洞が喋り始めた。

「まあ、こつちとしちやあ問題を起こすつもりがないなら何も言う事はない。お前が普通の生活を送りたいって言うなら、俺は応援するよ。なんか中学では苦労してたみたいだしな」

「わかってくれますか……ううっ」

「な、泣くなよ……とにかく頑張ってくれ、な？」

「ありがとうございます……校門で会った時に問答無用で叩き出されるかもしれないなんて思った俺に説教してやりたい気分です」

「（やっべ、その可能性も考えてた事は黙っとくか）」

初めて赤の他人に自分の苦労を理解してもらえ、労われて感動する奏丞だった。

互いの警戒の壁が薄くなったおかげで、食後は雑談を楽しんだ。

空洞が生徒会長になるまでの紆余曲折を聞いているうちに昼休みの終わりが近くなると、奏丞は席を立った。

「じゃあ俺は自分の所に戻りますね」

「ああ、続きはまた今度話してやるよ。」

……：そーいやお前、理事長に呼ばれてるんだよな」

別れ際に、空洞はそんな事を言い出した。

「そーですけど、それがどうしたんですか？」

「大丈夫だとは思いますが……：気をつけろよ。たぶんヤンチャな奴らが待ってるだろうから」
「よ」

☆☆☆

「ほいつ、到着！　ここが理事長室。中でおじいちゃんが待ってるよ♪」

「サンキュー不知火」

その後何事もなく放課後になり、奏丞は半袖に案内されて理事長室の前まで来てい

た。

「全然道覚えてなかったから、マジで助かったわ」

「気にしない気にしない。代わりに何話したか後であたしにも教えてよ！ 結構気になるしー♪」

「んー、まあ話していい事ならな。

「じゃあこれ、俺のバイト先の『チャーシュー増し増し券』。今度善吉と一緒に来てくれや」

「まいどー♪ 今度と言わず、明日にでも行ったげるよー。あたし一日にラーメン五リットル飲むって決めてんだよねー♪」

「水ですら一日五リットルも飲む奴いないと思うんだけど……まあいいや。じゃ、行つてくる」

「頑張つてねー♪」

そう言つて半袖は来た道に戻つて行つた。

それを見送つた後、奏丞は理事長室の扉を四回ノックする。礼儀が必要な時の回数だ（ちなみに二回だとトイレ、三回だと親しい人を相手にする場合となる）。

「どうぞ、入ってください」

すぐに部屋から返事が返つて来る。

失礼します、と言つて奏丞は中に入った。

そこで待つていたのは……アホ毛が一本伸びた老人だった。

「おお……血は争えねえな）一年一組の宇城奏丞です。お初にお目にかかります」

「おやおや、これはご丁寧に。初めまして、私はこの学園の理事長をさせてもらつてゐる不知火袴です。」

そう畏まらなくてもいいですよ。どうか楽にしてください」

そう言つて、袴は湯飲みを奏丞に差し出す。淹れたての熱いお茶だ。

「さて、本日はわざわざお呼び立てして申し訳ありませんね。私としては、一度君に会つておきたかつたもので。」

袖ちゃんからも話を聞いていますよ」

「……ちなみに、どんな話を？」

「彼女曰く、『ツツコミにもボケにもなれる人』だとか」

「なかなかユニークな話ですね……」

どういうつもりでそんな評価を下したのか、一度聞いてみたいものだった。

「さて、今日君を呼んだ理由は他でもありません。一つ、この老人の実験に付き合つてほしいのですよ」

「……実験、ですか」

「ははは、実験とは言っても手間はとらせませんよ。腕を一振りしてもらえればそれで済みます」

そう言つて袴は一客のグラスを差し出してきた。

見れば中には液体ではなく、数個のサイコロが入っている。

「このサイコロを振つてみてください」

「……はあ、わかりました」

奏丞には半ば予想できていた実験であり、そして結果も既にわかっている。

少なくとも、袴が望む結果になりはしない。

「……………」

奏丞は無言でサイコロを転がした。

テーブルに投げられたそれらが出した目は……何の法則性もないバラバラの目だった。

「お、おや? おかしいですね……」

それを見て驚く袴。

「何か気に入らない事があつたなら、もう一度振つてみましょうか?」

「いえ、もういいですよ。最初の一回でなければ意味がないのですから」

「そうですか。では他に何か要件は?」

「……いえ、特にありませんね。唐突に呼び出してしまい申し訳ない。もう帰っていただいて構いませんよ。ご協力ありがとうございます。」

ああ、あと袖ちゃんとは仲良くしてあげてくださいね。なんだかんだ言っても、あの子は良い子ですから」

「言われるまでもありませんよ。それでは失礼します」

そう言つて奏丞は席を立ち、退室前に礼を一つして出て行つた。

それを見送つた袴は、まだ温かいお茶を一啜りしてため息をついた。

「さて、どうしましょうかね。まさか彼の異常度がここまで低いとは思ひも寄りませんでしたよ。」

こうなると十三年前の研究データの消失も果たしてどういうわけだったのか……あるいは彼が普通の皮ノーマルを被っているのか」

そう言つた袴は、虚空に声を投げかけた。

「……皆さん、彼はどうでしたか？」

「妙な人だ。強いのか弱いのか全然わからない」

「そうか？ 確かに一般人よりはスキがねーけど、殺ヤろうと思えばいくらでも殺れたぜ。」

俺達にも全然気付いてないみたいだったし、マジでアツサリ死にそうだから止めたいだけだよ」

「あはははは……」

「……………」

「研究所を一つ潰したと言うからどんなモノかと思えば、アレはどう見ても凡人^{ノーマル}ではないか。

行橋、お前読めたか？」

「おいおい王土、無茶を言うなよ。お前みたいに存在感がある奴が傍にいちやあ読めるものも読めないぜ。

でも実力的に怪しいのは確かだ。周りが過大評価してる可能性が高いんじゃないかなー」

端正な顔立ちの男、色黒な男、天井からぶら下がる女、それぞれ包帯と仮面で顔を隠している者、なんかボロい恰好をしている男。

六人の人間が、袴の背後に現れた。

『十三組の十三人』と呼ばれる集団の内の六人だ。

「宗像くんの言葉は気になりますね。

十三人の内、最も殺す技術に長けた『枯れた樹海^{ラストカーベット}』。その君がわからないと言うとは

「……スキがある、という点では高千穂と同意見です。殺すビジョンも見える。しかしどういいうわけか殺したビジョンが見えてこない。

『殺しても死にそうにない人間』といった所ですか」

「でも彼は『スキルの干渉を防ぐ異常』^{アブノーマル}かもしれないんですよ？ それに妨害されてるって事じゃないの？」

「僕の殺人衝動は『殺害に特化した観察力』を備えてる。ゲームで言えば自分に支援魔法をかけている様なもので、相手のステータスに干渉する異常じゃない。

それでも駄目なら、例えば高千穂の反射神経^{オートハイロッド}なんかも彼に反応できないという事になるね」

「それはないと思うぜ。少なくともアイツの動作を見てて、違和感はまったく感じなかった。

なんでもかんでも無効にするってのとは違うんじゃないか？」

「そうなるボクの異常はどうなるんだろうねー。体外に漏れ出た電磁波を受信して解析してるんだから、もしかしたらセーフ判定だったりするかも☆」

「しかし俺の異常はほぼ確実に通用しないという事か。やれやれ、まるで頑丈な金庫に閉じ籠っている様だ。あの男の異常は偉大なる俺にこそ相応しいと思うんだが」

袴は、そんな彼らの話し合いに参加していかない二人に気付く。

彼女達は、確か宇城奏丞と同じ出身校だった筈だ。

「名瀬さん、古賀さん。」

彼の先輩として、是非とも君達のお考えを聞かせていただきたいのですが」

「うーん……まあ、ぶっちゃけ肉弾戦なら私や仕種さんは圧勝できるし、形さんも暗器ありなら確実に勝てるし、あんまり気にしないでもいいと思うよ。

というか宇城くんに関してには気にするだけ無駄無駄」

「おやおや、これは随分な評価ですね。

では名瀬さんはどうでしょう。君も古賀さんと同じ考えですか？」

「……右に同じく。あの男にわざわざ手を出す必要はない。放置しておけばいい」

「ふむ、君もそう思うのですか……」

サイコロの実験で結果を出さなかつた以上、奏丞の異常度が低いのは確かだろう。

仮に持っている異常が本物だとしても、それがフラスコ計画の趣旨に沿うモノかと聞かれると、現時点では否と答えざるを得ない。

天才を量産する計画において、天才の能力を無効化してしまう能力は役に立たないだろう。

「かつて研究所を潰した異常についても知りたい所なんですけどね……」

「ふん、ならば偉大なる俺が折を見て試してこよう。王の言葉もはね除けるなど不遜の上ないが、異常自体はなかなか興味深い。

行橋、お前も来るといい。お前の異常がああ凡人に通じるかどうか、試してみるのも

また一興だ」

「えへ！ 言われずともついて行くさ！ 王きみのいる所に道化ボクありつてね！」

「つー事は俺は出番なしだな。ま、俺としちやああんま興味ねーし、ここは二人に任せとくぜ」

「僕もわざわざちよつかいをかける理由はないな。精々道で会った時に殺す程度にしておくよ」

「ふふふ、お手柔らかにしてあげてくださいいね（頼もしい限りですよ、『十三組の十三人』！ 彼の異常が紛い物か否か、確と見極めてやりましょう）」

「あはは（止めといた方がいいんだけどなく、ホントに……）」

「……（都城先輩はどーせ口で言っても聞かねーだろうしな。いざバトったらボコボコにされそうなんだけど……せめて五体満足で帰って来られる事を祈っとくか）」

当事者がいない所で話が進む。

迫り来る『十三組の十三人』を相手に、果たして奏丞は生き残る事ができるのだろうか。

奏丞の命運や如何に。

——ブブブブ。

その時、天歌の携帯電話が振動する。メールが届いた様だ。

「……私の携帯だ。少々失礼する」

周りに断って見てみる。

その相手は……今話題の奏丞だった。

『そこで試すとか殺すとか物騒な事言ってる先輩方をなんとかしてくれ』

ゲンナリした奏丞の顔が目には浮かんだ。

しかしやはり夭歌達の存在に気付いていたらしい。しかも現在進行形で事態を把握している様だ。

「どうするの、名瀬ちゃん……?」

横から覗き込んで内容を見ていたためにそう訊ねられ、夭歌は力強い頷きで返して。

「『無☆理』と」

「うわぁ……」

奏丞の明日はどっちだ。

第十二話：依頼第一号と幽波紋！

「世界は平凡か？ 未来は退屈か？ 現実 is 適当か？」

全校生徒の前で今、めだかが演説をしている。

「安心しろ、それでも生ききる事は劇的だ！」

実に98%という驚異の支持率で新生徒会長となっためだかの言葉に、誰もがそのカリスマ性を感じ取り。

「そんなわけで、本日より、この私が貴様達の生徒会長だ」

そして奏丞もまた、それをつくづく再認識した。

「学業、恋愛、家庭、労働、私生活に至るまで、悩み事があれば迷わず目安箱に投書するがよい」

黒神めだか。

今も昔も変わらずブツ飛んだ奴だな、と。

「24時間365日、私は誰からの相談でも受け付ける!!」

「(いはい、笑うとはい?)」

「ぶはっー」

「んっふ……」

「（キオンかお前はあ！）」

「（ちよっ、宇城くん笑わせないでよ！）」

「（あつ、悪い悪い）」

壇上のめだかにジト目で睨まれた奏丞だった。

☆ ☆ ☆

「しっかしあのお嬢様、全校生徒を前によくあんな啖呵が切れるもんだよ。人前に立つのに慣れてるっつかさー♪」

「カツ、ありやあ人の前に立つのに慣れてんじゃねーよ。人の上に立つのに慣れてんだ
！」

「お前何ウマい事言ってるんだ」

「自分でもいい事言つたと思う」

「あひやひや！ まーそりやそーだね。そーでなきや一年生で生徒会長になんかなれっ
こないか♪」

昔から謎のカリスマとスペックを持つめだかだった。

不知火曰く、全国模試では常に上位をキープ、偏差値は常識知らずの90を記録、手にした賞状やトロフィーは数知れず、スポーツにおいてもあらゆる記録を総なめ状態、実家は世界経済を担う冗談みたいなお金持ち。

「全長263・0メートル。高度6万フィートをマツハ2で飛行！ インテル入ってる
！」

「いや、途中から人類じゃなくなってる……」

「インテル以外はわりとできそうだぞ、あいつ。将来的に」

「ねーよ！ いくらあいつでも流石にそこまで人間やめねーよ！」
「と信じた人吉なのであった……」

「不知火までやめろお！ なんか不安になってきただろ!？」

善吉で遊ぶ奏丞と半袖。

わりといつもの光景である。

「で？ 二人はどーすんの？ お嬢様が当選したって事はとーぜん二人も生徒会に入るわけ？」

「カツ！ なわけねーだろ！ これ以上あいつに振り回されてたまるかつての」

「右に同じく。ま、そもそもバイトや部活で忙しい俺にはそんな時間もないしな。

つーわけで」

奏丞と善吉は声を揃えて、

「俺達は絶対！ 生徒会には入らない!!」

「……………」

それを聞きながら、無言で奏丞の背後を見ている半袖。

次の瞬間。

「そうつれない事を言うものではないぞ、二人とも」

「おわっ!？」

「めっ、めだかちゃん!」

奏丞の首元に、まるで蛇の様に腕が絡みついてきた。

背後をとったその人物の正体は、今まさに話題になっていた黒神めだかだ。

「まったく、二人ともひどいではないか。一人頑張っている幼馴染みの誘いを口を揃えて断るとは」

「あの一、めだかさん？（頸動脈に）当たってるんですけど……」

「ふふふ、（頸動脈に）当たっているのだよ」

「お前まさかさっきの集会での事を」

キュツ（絞めた音）。

クタツ（力が抜けた音）。

「奏丞エーツ!？」

「うわあ、キレーに落ちた……」

恐々としている善吉と半袖の視線を受けながら、めだかは奏丞の身体を肩に担ぎ上げ。

「善吉。貴様も来い」

「……………ハイ」

合掌する半袖を残し、善吉を伴って悠々と立ち去ったのだった。

☆ ☆ ☆

「……で、俺は気絶してる間にここに連れ込まれたと」

「そうなる。ああ、ちなみにここは生徒会執行部室な」

「気分はどうだ。後遺症が残る様な締め方はしていないが」

「んー……大丈夫そうだ」

奏丞は首を動かしながら応える。痺れなどもないし、どうやら問題はなさそうだ。

……いや、一つ問題があった。

「……ところでめだか、お前はなんで下着姿なんだ」

「奏丞もおかしいと思うよな!？」

ほら見ろ、やっぱりお前おかしいんだって!」

「くどいぞ善吉。先も言ったが、私と貴様達の間には恥じらいなど何の意味がある。練り上げられたこの肉体、写メで撮られようと額縁に飾られようと、憚る事など何もない!」

凜っ!

「凜っ、じゃねーよ痴女かお前は。見ろ、そのせいで善吉はさつきから血圧が上がればなしじゃねーか」

「あつてめっ」

「?」

自身の裸体が健全な男子高校生にどんな影響を及ぼすのか、めだかにはわかっていない様だった。

この脱ぎ癖はめだかの数少ない悪癖の一つである。

「さて奏丞。目を醒ました所で、例の件について、貴様のこれからの扱いを話しておこう」

「例の……ああ、生徒会入りの話か?」

奏丞が生徒会に入るか否かである。

奏丞は前々からめだかに勧誘されていたのだが、しかし奏丞は部活に入っていればアルバイトもしている身。残念ながら生徒会役員として働いている暇はない。

それについてはめだかも一応納得していたのだが。

「善吉には正式に生徒会に入ってもらおうとして」

「いや、入らないけどな」

「奏丞に関しては外部協力者、客員の様な扱いにするつもりだ。時間がある時に手伝ってもらえればいい。」

速筆速読が得意な奏丞には書記職を任せようと思っていたのだが……まあ、これでも私は全校生徒に選ばれて生徒会長に任命された身。無闇矢鱈に親しい者ばかりで周囲

を埋めても生徒の不信感を煽るだけだろうし、正式な加入については潔く諦めるつもりだ」

「んー、まあ、それくらいなら別にいいぜ。仕事自体も正員程忙しくはならないだろう？」
「できれば俺の事も潔く諦めてくれませんかねエ……」

「善吉は部活もバイトもしてないんだろ。付き合ってやれよ、幼馴染みなんだし」
「だったらお前部活辞めて生徒会に入れよ」

「無理だ、そんな理由で抜けたら陀尾先輩達に魂とか内臓とか引っこ抜かれちゃう……」
「お前どんな部に入っちゃったの!？」

合言葉が『魂を賭けよう』な部だ。

「善吉……ダメ？」

「ぐっ……」

善吉が一瞬見せたためだかのデレで更に赤くなる。

善吉が言葉を呑んでいる隙に、奏丞は話を進めた。

「で、わざわざ善吉も連れて来たからには、他にも話があるんじゃないの？」

「うむ、これを見てくれ」

そう言ってためだかが持つて来たのは、土蔵の様な形の箱だった。

奏丞はそれに見覚えがある。選挙戦におけるためだかの公約の一つに関わる物だ。

「これについては貴様達も既に知っているな」

「たしか『目安箱』だろ。生徒の悩みを解消する為に設置したっていう」

「……ああ、そういやあつたな、そんなかつたるいの」

「その通り。」

さてその目安箱に、本日早速第一号の投書があつたわけだが」

めだかが紙を取り出し、その内容を読み上げる。

「『三年の不良達が剣道場を溜まり場にしていて困っています。どうか彼らを追い出してください』……だそうだ」

「剣道場ねエ……って、よく考えてみたら巻き込まれる流れだコレ」

「うむ、というわけで二人ともついて来るがいい！」

「あ、俺ムリ」

「お、」

コンマ一秒で断つた奏丞にツツコミが入った。

「むう、やはり部活か？ この栄えある依頼第一号に関われないというのか？」

「ついでにその後はバイトもあるしな。悪いけど今回はパスだ」

「という事は俺一人で付き添いかよ……」

「頑張れ、俺も明日なら時間あるからさ……」

落ち込む善吉の肩をポンポンと叩く。

多数の不良が絡むとなると、めだかはその更生にも乗り出す事だろう。おそらくは、超スパルタな手段によつて。

そしてそれに巻き込まれる事がわかつていれば、善吉の落ち込み具合にも領けよう。「では行くぞ、善吉。人を助けにな！」

「……………ハイ」

めだかに連れて行かれる善吉に向けて、奏丞は合掌する。

奇しくもそれは、先程教室で半袖がとつたポーズと同じ物であつた。

☆ ☆ ☆

その翌日である。

部活が休みで時間ができた奏丞が、早速件の剣道場へ向かっていたところ。

「……善吉ー、生きてるかー？」

「……………お陰様でな」

頭から血を流して倒れている善吉を見つけた。

返事はあまり期待していなかったが、しかしどうやら意識はある様だ。

「経緯がサツパリサツパリなんだが、とりあえず誰にやられたんだ？」

「わかんねエけど、剣道場に行きやわかると思う。……おつ、悪い」

「いいってことよ」

奏丞の手を借りて善吉は起き上がり、壁に寄りかかる。

「俺も一緒に行くけど、いいな？」

「いいけどよ、その前に俺の鞆から包帯取って……あれ？」

「どうしたのかなー（棒）」

「いや、なんか……痛みが消えた？ まさか痛みを感じなくなる程重傷なのか？」

「あー、そりやアレだ、脳内麻薬がドパドパ出たんだよ、たぶん。見た所、大した傷じゃあないぜ」

といつてもクレイジー・ダイヤモンドでこつそり治してしまったので、傷自体が既がないのだが。結構な出血もあり、傷をそのままにしておく程、奏丞も薄情ではない。

「ほら、包帯だ。巻きながら行きやあいだろ」

「……そうだな。 んじゃ行くか」

不思議そうにしていた善吉を促して、奏丞も剣道場へ向かう。

友達を傷つけた犯人がいたなら、一発ぐらいはブン殴ってやろうと考えながら。

☆ ☆ ☆

「へっ……やっぱお前は妨害すんのな♪」

「……別に。 その連中が立ち上がらなかつたらほっとくつもりだったんだけどな」

「保健室に連絡してきたぞー。 不良の八人や九人ぐらい、問題なく受け入れてくれるぞうだ」

「お前、宇城!? なんでここにいんだよ、お前に至っては完全に部外者だろ！」

「あくん？ 人のダチ襲つといて、何ナメた事言つてやがる」

剣道場に行くと、そこにいたのは倒れ臥した不良達と、それを踏みつけるクラスメー

トの日向だった。返り血を浴びた制服を着て木刀を持ってゐる姿は、どう見てもこの惨状を作り上げた犯人としか思えない。

そして正しく、善吉や不良達を襲ったのは日向だった。

「で、なんか弁明する事はあるか？」

「弁明？　ハッ、学園施設を不当に占拠してる雑草どもをむしってやってんだ！　僕は

正しいだろうが、あアン!？」

「テメー頭脳がまぬけか？　未成年じゃなきや一発でしょつぴかれる様な暴力事件起こ

しといて……正しいもクソもねーぜ」

「おいこら、ちよつと待て奏丞。ここは俺がめだかちやんの正しさを語る所じゃ」

「日向！　俺の気持ちを聞かせてやる……紳士として恥ずべき事だが、正直なところ今

の宇城奏丞はダチを襲われた恨みを晴らすために、日向！　テメーを殴るんだッ！」

「いや、そう言ってくれんのは嬉しいけども！　俺！　俺の出番！」

「顔面はお前に譲るぜ、善吉。俺は腹を蹴っ飛ばす」

「聞けよ、話を！　ああくそ、わかったよ！　ったく、タイミングしつかり合わせろよ!？」

「ケツ、どいつもこいつも面倒くせえ！」

お前ら！　剣道三倍段って知ってつかつ!？」

木刀を振りかぶった日向に、奏丞の蹴りと善吉の拳が同時に突き刺さった。

鼻血を撒き散らしながら、日向が吹き飛ぶ。

「知るかつ！」

☆☆☆

「で、結局日向は剣道部（仮）で不良達の指導を務める事になった、と」

「そーいう事。聞いた話だと、あの後あいつにきついお灸を据えられたみたいだ」
「めでたく純朴な剣道少年が一人誕生したってわけだ」

「まあ、要するに日向もあいつの事を好きになっちまったって事だろうな……」

「ライバルは増える一方だなあ、善吉？」

「うっせ！」

からかわれてそっぽを向く善吉。

二人が今話しているのは、善吉がめだかから聞いて来た事の顛末についてだった。

どうやら今回の相談は、どれもジグソーパズルの様に納まるべき場所へ綺麗に納まつたらしい。最初の依頼がどうなる事かと思っていたが、終わってみれば満点の結末になったのではないだろうか。

「それに、もう一つ言う事があるよな？」

「……カツ、見ての通りだよ」

奏丞は善吉の腕を見る。昨日まではなかった物が、そこに巻かれていたのだ。

「庶務、か。まあ、いきなり副会長になれるわけもないか」

「『手柄を立てて這い上がれ！』だどよ。カツ！ 上等だぜ、副会長ぐらいあつという間になつてやんよ！」

「おー、その意気だ。応援してるぜ」

目の前で気合いを入れている善吉を見ながら、奏丞は考える。

この世界にやって来て、実に十五年が過ぎたのだ。

イレギュラーな存在である奏丞はこれまで各所で影響を与えて来たが、基本的にハツピーエンドだった原作がこれから先一体どうなるのか。

一抹の不安は確かに感じる。しかし奏丞は、それでもより良い未来がやって来る事を願わずにはいられないのであつた。

——『めだかボックス』

ついに原作開始の時期が訪れた。

第十三話：生徒会のプリンスと幽波紋！

「そういえば人吉くん、めだかさんから聞いた所によると、どうやらこの生徒会には客員がいるそうだね」

大量の書類を相手に苦戦していた阿久根高貴は、ふとその事について思い出し、善吉にそう訊ねた。

「あー、そういやそれについて話しておくべきでしたね」

同じく書類の整理に苦戦していた善吉も、その事を思い出して一瞬手を止めた後、作業を再開する。

生徒会に入って僅か二日目、高貴が知らない事はまだ多い。

共に生徒会で働いている以上、それについては早めに話しておく必要があるだろう。

「えーと、協力者って意味では二人いますね。奏丞と不知火……宇城奏丞と不知火半袖です。まあ、不知火の方は生徒会じゃなくて俺を個人的に手伝ってくれてる感じなので、めだかちゃんが言う客員なら奏丞の事でしょう。」

どっちも俺の友達です」

「宇城奏丞、ね……少しだけ話を聞いた事がある。どうやらキミ達の幼馴染みらしいけど……」

「ええ、まあ、物心ついた頃から一緒にいますね。後で聞いた話によると、俺達は三人で同じ日に出会ったとか」

何分二歳児の時の話だ。善吉は当時の出会いなどまったく覚えていないが、しかし逆に言えばそれだけ古くから関係が続いてきている、と言える。

「親しい仲なのかい？」

「そりゃもちろんですよ。昔つから三人でよく遊んでましたしね。めだかちゃんを俺を引つ張って、そんなめだかちゃんを奏丞が諫めてって感じで……まっ、平たく言えば親友って奴ですかね」

「（なぜ得意気に……）それにしても中学校では一緒じゃなかったみたいだけど？」

「俺も詳しくは知らないんですけど、なんか真黒さんから奏丞に頼み事があったみたいですよ。そのせいで奏丞は別の中学校に行く事になったとかなんとか」

「ふーん……」

話をしつつも、お互いに目を合わす事なく作業を続けていく。

高貴の反応は善吉に対するそれに比べて、意外にも大人しい物だった。善吉を嫌っていた高貴も、流石に見ず知らずの相手を蛇蝎視する程極端ではないらしい。

そんな事を考えていた善吉が、ここで奏丞にとって喜ばしくない事を迂闊にも高貴に話してしまう。

「そうそう、最初はめだかちゃん、奏丞を書記に置くつもりだったらしいですよ」

「あ、あ、？」

「えっ……」

ボキン。

高貴が手にしていたペンをへし折った。

「俺の書記職に、元はそいつが就く筈だった……？」

「え、ええ……そうですね。当初めだかちゃんはそうするつもりだったって……そう聞いてます、ハイ」

「……………」

事ここに至って、ようやく善吉は、自分がマズい情報を漏らしてしまった事に気がついた。そしてそのシワ寄せが、いったい誰に向かうのかも。

善吉は慌ててフオローに走る。

「め、めだかちゃんは奏丞が駄目だから代わりに阿久根先輩を置こうとか、そんな事は考えてませんよ絶対！ 奏丞は奏丞、阿久根先輩は阿久根先輩です！ 次善策とかじゃ

……………！

「当たり前だ！ 人を人の代用にするなんて、めだかさんはそんな事を考える人じゃない！ 俺自身の能力を買って、めだかさんはポストに置いてくれたんだろう！ しかしッ」

そう叫んで、高貴は勢いよく立ち上がる。

話しているうちに、どうやら興奮してきたみたいだ。

思わず善吉も顔がひきつる。

「それとこれとは話が別だッ！ めだかさんと早くから知り合えた運が良いだけの無能が、畏れ多くもこの書記職に就こうとしていたなど！

憤慨！ せずにはいられないッ！」

「おっ、落ち着いてくださいよオ！ つーか奏丞は無能じゃありません！ あいつ、なんでも普通の字で速記ができる程ですよ!? この程度の書類だつて、あつという間に目を通してでしようし」

「フン、書くのも読むのも得意というわけか？ どんなものかは知らないが、しかしそれだけでめだかさんに信を置かれるなど……」

興奮する先輩をなんとか落ち着かせようと善吉が奮闘している、その時。

実に悪いタイミングである男が現れた。

「うーす、仕事手伝いに来てやったぞー」

「……………」

「(Holy shit! デビルバッドタイミングだぜおい!?)」

間の抜けた雰囲気が入室してきた奏丞、無言でそれを見る高貴、頭を抱える善吉。

タイミングは悪かったが、しかし室内の二人の様子を見て何かに気付かない程、奏丞もバカではない。

マズい事が起きていると察した奏丞は……脳内で躊躇なく『逃げる』のコマンドを選択した。

「すいませェん。わたくし、さつき手伝いに来たと言いましたが訂正させて下さい。用事を思い出し「よく来たね!」とりあえずそこに座りたまえ!」Oh……」

残念、阿久根高貴からは逃げられなかった。

「(おい善吉、めだかはどうした?)」

「(別件で出てるぜ。そろそろ帰って来てもいい頃だけど)」

「(……なら今二人で一体何話してたんだよ。あの人、昨日言ってた阿久根先輩だろ? 何故か俺を見る目が凄かったぞ……)」

「(あー、んー……)」

「(……なんか知らんが、お前後でテキサスクローバーホールの刑な)」

「(や、やめてくれよ……)」

コソコソとそんな事を話している奏丞を、椅子に座り直した高貴が頭の天辺から爪先までじろじろと見回す。

「話は聞いている！ キミが噂の宇城奏丞クンだな？」

「……どーいう噂かは知りませんが、確かに俺が宇城奏丞です、阿久根先輩」

「俺の事は既に聞いているのかな？」

「腐つても客員ですからね。新しく役員が入った事はちゃんと教えてもらってます。

まあ、そうじゃなくても有名ですけどね。柔道界のプリンスって異名は」

「ふん」

いかにも『機嫌が悪いです』という態度をとる高貴。しかしそれが何故なのかは奏丞にはわからない。

そもそも相手は今まで話どころか顔も合わせた事がない相手なのだ。

なのに初対面にもかかわらず不機嫌オーラをここまで前面に押し出してくる理由は、一体何なのか？

「当初は、キミが書記候補だったらしいね」

「おっふ……」

原因発覚。

めだかと幼馴染みで仲が良い善吉が気に入らない高貴の事だ、自分がもう一人の幼馴染

染みの後釜に座つたとなれば、何も感じないわけがないだろう。

そして、奏丞がやって来た時には既に漂つていた剣呑な空気、高貴が見る目、申し訳なさそうな善吉の表情。

「(お前、阿久根先輩に余計な事喋つたな……?)」

「……………」

ふいつ、と無言で目を逸らす善吉。

スコロピオン・デスロックも追加してやろうと心に決めた瞬間だった。

「速記術を修めているらしいな。速筆と速読が多少自慢の様だが……フン！ その程度の能力では書記職の、ひいてはめだかさんの友人など到底務まらん！」

「(ウゼエ……)」

ゲンナリしている奏丞を余所に、高貴は柵から一枚の紙を取り出してバインダーに挟む。

「手伝いに来たと言つたな。どれ程役に立つかは知らんが、生徒会の活動を手伝うなら、まずは今日の日付の所に名前を書いておいてもらおうか！」

奏丞に向かってバインダーが放り投げられた。

山なりに飛んで来るそれを見て、奏丞は机の上のペンをとり。

——ドシュ！ ビシュツッ！

「!?!」

その光景を見た高貴は驚愕する。

なんと奏丞は宙に浮いているバインダーにペンを走らせたのだ。

僅か一秒の間の出来事だった。

「ほいつ、これでいいですね」

「なっ……」

そして受け取った物を即座に投げ返してくる。

それはつまり、バインダーが滞空している間に用事を済ませてしまったという事だ。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……

こちらに背を向けた状態でキャッチしたバインダー。

何でもない筈の文具が、何か異様な物体に成り果ててしまったかの様な錯覚を覚えた。

高貴は恐る恐る、ひっくり返して紙を確認し――

『字城 奏丞』

書き込むべき正しい欄に、綺麗な書体でそう書かれていた。

「バカなっ、あの一瞬で名前を書き込んでいる!?!」

宙にある間に紙の内容を確認し、そして必要な場所へ名前を書き込む。高貴にできた

としても、それは前者までだ。後者となると、とてもとても……

「ふふふ……慣れですよ、慣れ。俺にはちよつとだけ、人よりも字を読む機会が多かった。筆記の機会が多かった……それだけですよ」

「あれ、お前小学六年生の時そんな事できたっけ？」

「中学の三年間で更に経験を積んだからな。結構スゴクね？」

「テレビに出れるレベルだぜ」

「ぐっ……！」

かつて一度だけ、高貴が敗北を認めた相手がいる。黒神めだかだ。

『破壊臣』がいくら破壊しても破壊できないめだか。己の信念の為なら幼馴染みを足蹴にする事も辞さないめだか。自身を遥かに超越している者だと悟ったからこそ、その敗北は屈辱とは無縁の物だった。

だが、今日の相手はそうではない。

所詮はコネで入りかけた者、所詮は後輩、所詮は格下……の筈だった。

しかし。たった今、高貴は敗北した。一分野とはいえ、自身が格下に劣っていると明確に理解した。

「……（ドヤアアアア）」

高貴にとってこんなドヤ顔はッ！　こんな屈辱はッ！　初めてのシヨックッ！

「……宇城クン！ キミに決闘を申し込む！」

「断る」

「即答かよ」

高貴の代わりにツツコむ善吉。

「当たり前だ。今の阿久根先輩が言う決闘なんて、絶対にロクなもんじゃない。決闘者デュエリストじゃないんだから、不満があるなら話し合いで解決しましょうよ」

「ええい、キミには覇気がないな！ つい先日堂々と俺に立ち向かった善吉クンを少しは見習いたまえよ!？」

「余計なお世話です。俺はNOと言える日本人を目指してるんで」

「……まあ、阿久根先輩。奏丞は基本的にバトルには消極的ですよ。自称平和主義者ですし」

「ならばその筋肉は飾りか!? その体付きで鍛えてないとは言わせないぞ!」

「ああ、これは健康と長生きの為にですね。そんな事よりさっさと仕事を終わらせましょうよ」

「ぐぬぬ、往生際の悪い……!」

憤慨に堪えない高貴。

善吉を害虫と嘲るものの、めだかの隣に立つ為に努力している姿は認めなくもない。

しかしこの男はどうだ。

挑まれた勝負に応えないどころか、澄まし顔で自身を偽る腑抜けた男。

めだかを崇める者として、こんな男を認めるわけにはいかない。

「認めん……認めんぞ、キミの様な軟弱者を！ キミはめだかさんの傍に在るべき人間ではない！」

「流石は柔道界のプリンス、一人で相撲を取るのも得意ですね。こっちは知った事じゃありませんけど」

「なんだと……」

「お、おい奏丞、そんなに喧嘩腰にならなくても……いいじゃねエか、一度くらい勝負したって」

「俺は好き好んで殴り合いなんざしたかねーの。それに俺の戦闘スタイルは知ってるだろうが。阿久根先輩相手にしたらどれだけ苦労する事か……」

「だがその苦労と引き換えに阿久根書記の信を得る事ができる。」

「そもそも奏丞よ、いつ何時も誰からの挑戦でも受けて立つのが生徒会執行部のルール！ 例え挑戦者が生徒会正員で防御者が生徒会客員であったとしても例外ではない

！」

「「!!?」」

突然聞こえてきた声の方向へ、三人で一斉に振り向く。

そこにいたのはもちろん……

「めだかちゃん、いつの間に……」

「たつた今帰って来た所だ。全てを聞いていたわけではないが、事態は大方把握した。

しかしなんだ……私がない間に随分と面白い話になっているじゃないか」

「面白くねーよ、当事者からしたらイイ迷惑だぜ……」

「めだかさん、先程の言によると、つまり……」

「うむ、阿久根書記vs奏丞のスペシャルマッチだ！」

めだかの言い放った言葉に高貴は喜色を浮かべ、それとは逆に奏丞は頭を抱える。

このままでは本当に高貴とやり合う羽目になるのだ。

簡単には引き下がれない奏丞が、なんとかめだかを言いくるめようと口を開く。

「めだか、そういう事は両者の合意を得てからだな……」

「ダメか、奏丞……?」

「……………」

不安そうな表情をするめだか。

「私は我慢ならんぞ。貴様が悪し様に言われるのも、友人達が仲違いするのを見るのも。

貴様が争い事を嫌っているのはわかるが、しかしこの戦いは貴様らの仲を修復する良

い切つ掛けになる。必ずや実りある結末を残してくれるに違いない」

「……………」

「だから奏丞、頼む……戦つて？（きやるーんっ）」

「……………」

上目遣いで見るめだか。苦虫をまとめて噛み潰した様な顔になる奏丞。

そのままお互い無言で、幾ばくかの時間が過ぎて。

「……………フォローぐらいはしてくれよ」

「任せるがよい！」

「（今日はツンデレ様の勝ち、と）」

善吉にクリツプラー・クロスフェイスの刑を追加してやろうと、奏丞は黙考するのだった。

☆
☆
☆

「度々すまないな、鍋島三年生。今回はこちらの諍いに巻き込む形になってしまった」
「ええよええよ、阿久根クンの技見るんも皆のええ練習になるし。それに……なんや随分才モロそーな奴連れて来たやん♪」

人懐っこい笑みを浮かべて、鍋島猫美は柔道場の中央を見遣る。

そこに柔道着を纏った二人の男がいた。

一人は元柔道部員の阿久根高貴。柔道界のプリンスと称えられた男。

そしてもう一人は……

「あのコが噂の生徒会客員、宇城奏丞か。なかなかエエ感じやん。せやけどそのわりに知名度は低いっちゅー……そこんとこどうなん、部活荒らしクン？」

「……あいつは名誉欲とか自己顕示欲とか、そういうのに対してはあんまり興味がないんですよ。隠れて生きようなんて考えちゃあいないでしょうが、少なくとも目立ちたがりじゃないです」

「ほうほう……」

善吉の話を聞いて、猫美は改めて奏丞の姿を観察する。

背が高い男だ。190センチはあるだろうか。あの年の男の平均身長を優に超えている。

そして太い。デブという意味ではない。高貴や善吉が持つ、引き締められた細身の筋肉に比べると、奏丞の筋肉は明らかに太いのだ。鍛え方が違うのだろうか。

その表情をいかにも「不本意でござい」とばかりに歪めて、高貴とメンチ切り合っていた。

「ふん、いよいよもってキミの貧弱さが明るみに出るというわけだ。俺が勝利した暁には害虫にも劣る汚点はめだかさんに近づかないでもらおうか」

「ケツ、随分とおカタいこつて。力で解決する前に、まずは脳味噌で解決する柔軟さが欲しかったですね」

「……お互いやる気は十分やな。んじゃま、ボチボチ始めよか。審判はウチが務めさせてもらうで」

剣呑な二人の間に猫美が進み出る。

「ルールは柔道部恒例、無制限十本勝負対無制限一本勝負の阿久根方式……と言いたいところやけど。今回は柔道部になんの関わりもないしなあ。」

黒神ちゃん、どないするー?」

「戦闘不能、またはギブアップにより決着とする。禁じ手は金的、目潰し、噛みつき、更に破壊を狙った関節技。」

後遺症を残さないようお互い気をつけよ」

「……という事だそう。運がよかったな、幸いにも鼻血を垂れ流す程度の醜態で済みそう。めだかさんの御慈悲に感謝するんだな」

「心配してくれなくても大丈夫ですよ、受け身ぐらいはしっかり取れますからね」

「……ド素人が」

そう吐き捨て、高貴は構え。

「おつとその前に。善吉ー、これ預かってくれー」

「えつ。うわー、さつすがだわ、お前……」

善吉が呆れた様子でそう言う。

奏丞が投げ渡した物は……柔道着（上）と帯だった。

「……やれやれ、やはりキミは随分と小細工が好きみたいだな」

「何言ってるんすか、これは柔道の試合じゃないんですよ？ 上半身裸で何か悪いんですか？」

下まで脱いでしまうとパンツ一丁になってしまうので、それは流石に自重した奏丞。

しかしこれによって取られる襟や袖がなくなつた。柔道を使う高貴にはやりにくくなつた事だろう。

「フン、その程度の小細工で柔道が封じられると思つたら大間違いだぞ。」

……猫美さん、興奮が顔に滲み出してきてますよ。いいからさっさと始めてくださ

い」

「ちよ、阿久根クン！ そないな言い方やとウチが変態みたいやん！ ……まあ、ガラにもなくワクワクしとんのは自覚しとるけどなあ」

反則王、鍋島猫美。

綺麗な天才に汚く勝つ事を信条としている彼女にとっては、奏丞の行動は大いに琴線に触れた。

この試合に、善吉の試合ではなかった『期待』を覚えてしまう。

「むふふー。宇城クン宇城クン、これ済んだら柔道部に入らへん？ ウチが直々に指導したる。なんやキラリと光るモンがウチには見えたで！」

「遠慮しときます。もう部活には入ってますしね」

「何部なん？」

「賭博部」

「ほほう！ オモロイ、ますますオモロイでえジブン！」

覚めるどころかますます興奮する猫美。

元柔道部員として彼女の性格を知っていた高貴は、無理からぬ事かと溜め息をついた。

「よっしや、決めたで！ ジブン、阿久根クンに負けたら我が柔道部に来い！」

「あのですね、鍋島先輩……」

「不満そうやな。せやったらジブンが勝つた時はウチが阿久根クンの説得に回つたる。どうや? ジブンはどんな勝ち方しようとうちが味方になつたるで!」

そう言われると、奏丞も断りにくくなる。

奏丞が狙っている勝ち方は、ぶつちやけ誉められた勝ち方ではない。そうになると、例え勝つたとしても高貴が認めてくれる保証もないわけで……

「ほんなら、エエ加減始めよか」

自分が出した条件が奏丞にとって悪い物ではなかつた事を察した猫美は、早々に会話を切り上げた。

奏丞の追及はなかつた。

それは、暗黙の内に条件を飲んだという事だつた。

「お互い構え」

両者がにらみ合いながら、構える。

そして数瞬おき――

「始めッ!」

「行くぜッ!」

開始の合図とともに奏丞が前へ踏み出した。

「迂闊な……この俺に先手を仕掛けるとはなッ！」

次の瞬間、高貴は一気に奏丞の腕を絡め取り――

「ハアッ！」

見事な一本背負い。

奏丞は勢い良く畳に叩きつけられる。

「フン、キミがギブアップするまで何度でも……」

身体を起こした高貴は、その光景を見て口をつぐんだ。

「何度でも……なんだって？」

無様に投げられた筈の奏丞が――既に立ち上がっている。

「めだかちゃん」

「うむ……受け身が成功しているな」

だからこそ奏丞は素早く立ち上がれたのだ。

しかし猫美の、そして周りの柔道部員達の驚愕は、今まさに試合をしている高貴以上の物だった。

「あ、あの一年、阿久根の投げに耐えた!？」

「すげえ、なんなんだアイツ!？」

「クククッ！ そうこななあ！」

高貴の投げは全てが一瞬の内に終わる。体勢がどうこうだから、など悠長に考えている暇などありはしない。咄嗟の判断がつかなければそのまま畳の上に叩きつけられる事になる。

猫美ですら、高貴の投げに受け身をとるのは至難の技だ。

「……ルールに助けられたな。これが柔道の試合なら、キミは何の成果もなく敗北していたよ」

「ケツ、恨めしいルールだぜ。これが試合なら、俺は怪我一つなくピンピンしたまま歩いて帰れたつてのによ」

その返答に、高貴が顔を歪ませる。

お前の投げは痛くも痒くもない——

奏丞は暗にそう言っているのだ。

「さて、もういつ」

奏丞が言い終わる前に、その腕を掴んで懐に潜り込んだ高貴が……再び一本背負い。

今度は高貴も同時に身を投げ出す事で、奏丞は自身と高貴、二人分の体重を乗せて地面に叩きつけられる。

すぐさま体勢を立て直した高貴が、奏丞を見て……

「……（コキツコキツ）」

「……………」

既に立ち上がり、首を鳴らしている奏丞がいる。

高貴の額から、一筋の汗が流れ落ちた。

「なあなあ、黒神ちゃん。なーんで宇城クン、あない受け身が巧いん？」

「……………そう鍛えられたからですよ。私を知る限りで最も有能なトレーナーに。この事については、恐らく善吉の方が詳しいかと」

「……………いや、俺だつて大した事は知らねーよ」

高貴の大外刈りが決まる。

奏丞が畳に叩きつけられる。

即座に立ち上がる。

「何故かは知らないけど、奏丞はその人に徹底的に耐久力を鍛えられてたよ。打たれ強さだったり、スタミナだったり。一応攻撃に關しても人並み以上にはやってたけど。」

あ、あと反射神経だか判断力だかも鍛えてもらつてたな」

「要は防御能力を重視してたつちゆう事やな？」

高貴のハネ腰が決まる。

奏丞が畳に叩きつけられる。

即座に立ち上がる。

「あいつとはたまに組手もするんですが、基本的には相手のスタミナ切れを待つスタイルですね。打つても打つてもイイのが入らないんで、だんだん岩かなんかを相手にして様な気がしてきます」

「うーん、なるほど。通りであの体つきつてワケや。ウチらとちごて受けてナンボの鍛え方するんやったら、そらあんなプロレスラーみたいなムキムキになるわな」

高貴の体落としが決まった。

奏丞は——やはり、立ち上がった。

「(ありえないッ！)」

高貴は心中で叫んだ。

それは、受け身をとっているとはいえ何度投げられても易々と立ち上がる奏丞の耐久力に向けた叫びではない。

「『相手のスタミナ切れを待つ』？ そんな非効率的な戦い方を、真黒さんが教えるワケがないッ！)」

中学時代、同じ生徒会に所属していた先輩、黒神真黒を知るからこそ出せた結論だった。

そもそも、効率的な戦い方とは何か。

それはもう、『瞬く間に敵を打ち倒す』、これしかない。それこそが最良であり最善な

のだ。

呑気に敵の攻撃を待ち、長々と敵のスタミナ切れを待つ事にどんな効率性が望めるのか。

チエックメイトマジシャン
理詰め魔法使いにあるまじき選択だった。

「(更に言うならこの違和感……彼の戦い方には何か足りない！ まるで剣を持たない剣士の様に！ 銃を持たないスナイパーの様に！ 拳を握らない理由がある筈なんだ！)」

耐久性を重視する理由が、何かある筈なのだ。

少なくとも肉体的な問題ではない。これだけ肉付きが良いなら、腕力も十分だろう。

精神的な問題か？ それも否。臆病者と罵りはするが、しかしこの男の戦闘に対する強かな一面は既に見受けられた。過去に何らかのトラウマがあるわけでもないだろう。

「キミは……一体何を隠している!？」

「……………」

汗だくになりながら、高貴が問いかける。

「なるほど大した耐久性だが……キミには『攻めの意思』が足りない！ あの真黒さんがその鍛え方を選んだなら、それに相応しい『攻めの何か』があるんだろう？ これは試合とはいえ、公式なものでもなんでもない！ 遠慮せずに矢でも鉄砲でも持って来るが

「いー！」

「……矢でも鉄砲でも、と言ったが……では阿久根先輩。アンタは銃を持っている、としよう。日々射撃訓練を重ね、もはや自分の片腕と言える程扱いに慣れた銃……『ここで撃てるか？』」

「むっ……」

「仮に。その材料を集め、図面を引き、組み上げたのもアンタ自身という、まさにアンタの実力の結晶とも言える銃だとして。アンタは素手で立ち向かって来る相手に躊躇なく引き金を引けるか？」

「……」

「材料云々というのは大袈裟だし、銃というのもあくまで比喩表現ですがね。」

「……アンタに認めてもらう事が重要だとは全く思わねえ。しかし、そんなズルで決着をつけるのも、俺の心に後味の良くないものを残すぜ。……アンタはあと何回投げられる？ 息が切れたと同時に俺の拳をためーに叩き込む。」

「……かかってきな」

「圧倒的『スゴ味』。威風堂々たる立ち姿。」

「——なんだアイツかつけえ。」

「外野の男共の心が一つになった。」

「スウー……………フウー……………」

高貴は深呼吸する。

なるほど、奏丞の言う事には一理ある。高貴自身、例え『銃』を持つていたとしても、この試合で使う事はないだろう。

そう、あくまで試合。殺し合いでも何でもない。

手段は選ぶべきであり、今は互いの精神と肉体を競い合う時なのだ。

「なるほど、君は君なりにこの試合に臨んでいたわけだ……………」

具体的な話は何一つ話さなかったが、何故真黒がこんな鍛え方をしたのかは臆気ながら理解した。恐らくは『引き金を引く為』、『引き金を引く前に倒れない為』だ。

勝つ為ならば何度でも投げられる覚悟があり、しかし小細工を弄する強かさも兼ね備えている。引き出しもまだまだ温存している……………。

奏丞が本気になった時、一体何が起きるのか？

高貴は少しだけ、それが気になった。

「(だが……………おかげで俺の勝利は確定した!)」

構え直した高貴の雰囲気は僅かに変わる。

その理由を、外野でただ一人、猫美だけは正確に理解していた。

「(阿久根クン、いよいよ当てる気やな)」

柔道とは投げ技、固め技だけではない。そこにもう一つ、当て身技が加えられた、計三部門からなる。

しかし柔道における当て身技の存在は意外と一般人には知られておらず、その上使えば反則となる。

……だが、もちろんそれは柔道の試合での話。

「阿久根クンを鍛えた人は、何を隠そうこのウチや。当然当て身技もバツチリ使えるんやで、宇城クン」

高貴が、仕掛けた。

「(当て身使うん知らんみたいやし、最初の一発はエエのもらいそうやなあ。果たして宇城クン、どこまでやれるか……)」

その構えは一見これまで通り投げを狙っている様にも見えるが、あのまま拳を握ってしまえば引き絞られた弓矢の如く突きが放たれるだろう。

「(……あれ、本当に知らんの?)」

唐突にその事に気付けたのもまた、『反則王』たる猫美ただ一人だった。

考えてみれば、奏丞は一貫して投げ技にのみ警戒している風だった。

柔道には固め技もあるが、関節技はルールで禁止されたし、抑え込み技では戦闘不能もギブアップも狙えない。あれだけ挑発されれば、締め技で一気に締め落とす、という

手段も選ばれないだろう。更に、相手が都合良く投げ技にのみ警戒しているとしたら。当然残った……

「(ま、まさか!?)」

奏丞の顔面を目掛けて拳が放たれ――

「カツ……!?!」

見事に顎先チンを打ち抜いた。

「「「「なっ、なにーッ?!?!」」」」

柔道場に驚愕の声が響き渡った。

高貴が崩れ落ちた。

「クッ、『クロスカウンター』!! あのコホンマにやりよった!!」

「うおおお、マジかよ! なるほど、そうきたかア!」

驚愕が時を移さず感心に変わったのは、予め想定できていた猫美と、奏丞の本当の戦闘スタイルを知っていた善吉だった。

めだかを含め、周りは未だ驚愕の最中だ。

「なるほどなあ。攻撃の瞬間こそが最も無防備になる瞬間。阿久根クンに『後の先』を捨てさせる事を狙ったんか」

「てか鍋島先輩、あいつの狙いに気付けたんですか!?!」

「うん、ギリツギリで気付けたわ。観客やったからこそ間に合ったカンジやな。でもジブンもなんや驚き方が周りとちがくない?」

「俺はあいつがあーいう戦い方するの知ってましたからね。俺風に言うなら宇城奏丞の真骨頂『案外頭脳派』!」

「ぷつ、案外つてひどくない?」

「むう、貴様達だけ仲良く納得しよって……」

「なに拗ねてんだよ……実際俺だつてしつかり驚いてるんだぜ」

「黒神ちゃんは宇城クンのあーいう所、知つとつたんちやうん?」

「性格は確かに知っていたが、戦い方までは知らないし(ぶいっ)」

「だから拗ねんなつて」

高貴の視界は今、ドロドロだった。蕩けたチーズの様な光景を見ながら、膝をつく事すら必死だった。

そんな高貴を、奏丞は見下ろしている。

「鍋島先輩、これは戦闘不能じゃないんですか? 勝負決まったんじゃあ?」

「うーん……脳震盪起こしとるんやったら、流石の阿久根クンもまともに戦われへんやろうしな。よっしや、これにて勝「待て!」はい?」

猫美が勝利宣言をする直前に、高貴は声を張り上げる。

「俺はッ……まだ、戦えます……!」

「そうは言うてもなあ……」

「俺は、現生徒会書記で、先輩だッ……後輩のパンチの一発や眼が見えぬぐらいでへこたれるか!」

「……グレートだぜ、阿久根先輩。そういう『まるで劇画』っていうような根性にグツとくる!」

焦点が定まらない瞳でも、未だ戦意は衰えていなかった。上級生として、めだかに救われた者として……これで終わるわけにはいかない。プライドが高貴を奮い立たせていた。

「鍋島先輩、続行しても!」

「あー……もうええよええよ、二人で好きなだけやったらエエ」

投げやりにも許可されて、奏丞は改めて高貴の方へ向き直る。

「つーわけで阿久根先輩、今度こそ決着つけてやるぜ」

「フツ、視界が回復すればキミなんて「回復しきる前にブツ叩くツ!」え、っ……ちよつ、もう少し……」

「待つバカはいねーよ!」

「う、ううツ!」

——ウワアアアアア!?

「……奏丞は昔はもつと純真無垢な少年だった……答なのだ」

「あまりの行動に上から目線性善説が発動してる!？」

「うん、まあ……ウチもやりそうな事やけど。端から見たらホンマ外道やなあ……」

「鍋島三年生が言う程か……」

「こりやあれだな、宇城奏丞の真骨頂その②だ」

「……その心は？」

「『テンションが上がった奏丞は容赦がない』」

「あー」

卑怯だ外道だと外野に囁かれているのに気付かない奏丞。

阿久根高貴を破った『生徒会の反則王』と呼ばれる日がいつか来る……かもしれない。

——オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラアッ!!

第十四話：水中運動会と幽波紋！

現生徒会にいる役員は『会長』『書記』『庶務』、そしてオマケの客員が一人である。しかし本来役職は五つあり、現生徒会には未だ『副会長』と『会計』がない状態だった。単純計算で生徒会という組織の四割が欠けている事になるだろうか。

つまり何が言いたいかというと、その分のツケが現生徒会役員に回ってくるわけで。

「……人吉クン、俺生徒会やめちやダメかなー？」

「あつはっは！ 逃がしませんよー阿久根先輩☆」

片しても片しても片付かない書類の山に囲まれ、善吉と高貴は既にグロッキーだった。そこらの人間より遥かに体力があるこの二人ですら沈むのだから、相当の仕事量だ。

そんな善吉達の弱音を聞いて、同じく作業していたためだが一つ鼻を鳴らした。

「まったく、誇るべき箱庭学園生徒会執行部の男子役員が揃って弱音を吐いている場合か」

「……そうは言ってもよ、この量は異常だぜ。おかしいだろ、この山みてーな紙束は

よー。人類が相手しちやいけない量だつて」

「くつ、認めたくはないですが……正直、彼と同意見ですね。投げ出すつもりはありませんが、流石にこれは予想以上ですよ」

「確かに楽ではないだろう。私とてここ最近の業務ラッシュには少々参つておる。

しかし見る。奏丞など、既に貴様らと同じ量を片付け終えて悠々としているぞ」

「……………」

「むつ……………」

確かに奏丞はめだかに次ぐ速度で事に当たり、先程ついにノルマを果たした。そしてそれからは腕を組んで無言でこちらを見ているのだが、今の善吉達には苦しむ自分達を見ながら憎たらしくふんぞり返っている様にしか見えない。

「あーあー薄情な奴だぜまったく。仕事が終わったんならよー、少しぐらいは手伝つてくれても……………」

「…………いや、待つんだ人吉クン。なんだか様子が……………」

「はい?」

そう言われて、善吉は改めて奏丞を見てみる。そう言えば仕事を終えて以降、奏丞はあの姿のまま不自然に沈黙を保っていた。その表情はどこか哀しげで、しかし、満ち足りているかの様に穏やかで。

さて、そんな奏丞をよくよく注視してみれば。

「こ……こいつ……死んでいる……！」

「おいしいいい!! 決定的な何かが切れちゃってるじゃねエか！」

二〇×〇年 6月△日

宇城奏丞 死亡

「戻ってこいオラアアアアア!!」

「ごふっ……ハッ!?」

「あ、危なかった……生徒会で死人が出る所だった……！」

「いやいや大袈裟過ぎるぞ貴様ら……」

善吉のコークスクリュー・ブローによる心臓マッサージが効を奏し、奏丞は無事に現世に戻って来たようだ。

「善吉、俺……変な『夢』を見たぜ……。俺……夢の中で暗闇を歩いてるとよォー、光が見えて俺の死んだ兄貴に会ったんだ」

「生きてんならさっさと目エ醒ませコラア!! つーかお前の兄貴は生きとるわ！」

「……しかしめだかさん、どうにも部費に関する陳情が多いみたいですね」

「うむ。勧誘期間が終わり、部活動が本格化したのが理由だろうな。何をするにも先立つモノは必要という事か」

「元柔道部員として言うなら、部費は一円でも多いに越した事はないですからね。その気持ちにはわかるんですが……」

かといって増額できる予算枠は限られているし、数多く存在する箱庭学園の部活でそれを分け合っても、行き渡るのは雀の涙程度しかない。

平等に部費を増額しても、陳情が止む事はないだろう。

「だったらよ、いっそのこと部活同士で勝負でもさせて、勝った所を優先的に増額してやりゃいいんじゃないの？」

「ほう、妙案だな。しかし奏丞、その場合ネックになるのは勝負の内容だぞ」

「そういえば俺が担当している業務の中に部活動対抗のリレー大会がありました……うーむ、それではやはり陸上部が圧倒的に有利になってしまふな」

いい案が出ず考え込んでいる所、善吉がふと何かを思い出して、目安箱から一枚の紙を取り出す。

「それならこれが丁度いいんじゃないか？」

「ん？ それは……新たな投書か？」

「後で話そうと思ってたんだけど……『新設された50メートルプールがあまり活用されていないのがもったいないと思います。何かあれを使った学校行事を開くことができませんか』だと」

☆☆☆

「さあ貴様達、戦争の時間だ」

ざわ……ざわ……

「働かざる者食うべからずと言うが、これは真理に反している。私達はむしろ言うべきなのだ。」

『働いた者は食つてよい!』

貴様達、欲しい部費モネは勝つて得よ!!」

本日は日曜日。

世間では勉強や仕事の疲れを癒し、明日から再び始まる闘いの為に英気を養う休日であるが、今この場は「そんなの関係ねエ」と言わんばかりに闘いに挑んで来た猛者達で溢れ返っていた。

ここはつい先日新設されたばかりの屋内プール。

生徒会が企画した『箱庭学園部活動対抗水中運動会』開催の地である。

『ついに始まりました、部活動対抗水中運動会！増額予算を賭けたこの恐ろしい大会を勝ち抜けるのは、一体どこなのでしょう？！』

おっと申し遅れました、本大会実況は、わたし放送部部長代行阿蘇短冊が！

解説は——』

『俺が解説で何が悪い。生徒会の囑託役員、本部流の宇城だ』

『更に今回お呼びした特別ゲスト！』

『この世に知らぬことなし！一文字流不知火ちゃんですっす♪』

『が！お送りします!!』

何故か放送席に座る事になった奏丞だった。

『宇城くんがこうしたイベントに出て来るのは本大会が初！普段は裏方に回って手伝っているらしいのですが、その分他のお三方と比べると学生間の知名度は低いとか。かく言うわたしもこれが初見でして、ゴツイ彼をくん付けで呼ぶ事に違和感しか感じません！しかしいい機会なので色々聞いちゃいましょう！』

宇城くんは一体どんな仕事をしているんでしょう？』

『仕事自体は庶務に近いな。会長を手伝う事もあれば書記の手伝いもする。目安箱にもいくつかが関わっているけど、まあ強いて言うなら『雑用』って奴だな』

『なるほどー。』

更に聞いた所によれば、黒神めだか生徒会長と庶務の人吉くんとは幼馴染みだとか』

『そうだなあ、かれこれ十年以上の付き合いになるかな』

『はー！　そしてゲストの不知火さんはそんな宇城くんと人吉くんの大親友だとか！』

『おーつと、聞いちやう？　それ聞いちやう？　ふふふ、まあ二人とは長ーく深ーいお付

き合いだからねー。二人の事ならなんでも聞いちやいな！』

『ではではそのなれそめなど……』

『エツトネー、中学までは別でー、この四月に初めて会ったんだけどー、人吉があたしが落とした消しゴム拾ってくれたの！　んでその人吉が後で宇城を紹介してくれたってワケ』

『短っ！　そして浅っ！』

普段は生徒会メンバーの内の誰かが放送席に座ったり、あるいは進行を任されたりしているのだが、今回はその三人共が大会に出場してしまったので、放送席には奏丞が座る事になったのだ。

しかしこの席、思いの外高い所にあり、広いプールの隅々までを見渡す事ができる。

眼下に見下ろす生徒達がまるでゴミの様だ。

『どこかで黒い事を考えている人がいる気がしますが、とりあえず置いておきましょう』

か。

さてお二方、本大会では数多くの部が参加しているわけですが……ズバリ！ 優勝するのはどのチームとお考えでしょうか!？」

『普通に考えれば、水中が土俵の競泳部辺りが有利だろうな。水の中で身体を動かす事に慣れてるのはかなりの強みだろう。』

……まあ、それにも付いて行けそうなのが一人、生徒会チームにもいるんだけど』

『ほほー、宇城くんの予想では競泳部、次いで生徒会執行部が優勝候補というわけですね。』

それでは不知火さんはどう見ますか?』

『あたしもそこが二強って事には賛成だねー。競泳部は言うまでもなく、生徒会長さんはチームにいるだけでアドバンテージみたいなもんだよ。ただーし！ 解説ならちやんと“ダークホース”の紹介もしてやらないと……ねー宇城♪』

『……………』

『ダツ、ダークホースですか……?』

『そつそ。いるんだよねー、そういうのが。』

“水中”が競泳部の土俵なら——あいつらの土俵は“勝負そのもの”!!』

果たして、半袖の視線の先にいるのは……

第一種目を目前に控えて、高貴はそれに気が付いた。一瞬呆気にとられ、視線を持ち主の顔に移した瞬間、顔つきが険しくなる。

そんな高貴に気付き、同じくそれを見つけた善吉も思わず眉をひそめる。

「ちよつと、いいですか?」

高貴が話しかけた男子生徒。このチームは……この男は。

「陀尾先輩」

我らが主人公、宇城奏丞が所属する『賭博部』の部長だ。

「これはこれは、生徒会書記の阿久根くんじゃあないですか。何の用ですかね……」

「何の用かって? 決まっています! あなた達二人が着ている水着ツ! 一体それは何なのですか!」

高貴が指摘したのは、履いて来た水着だった。

しかしただの水着ではない。

デカかった。サイズなどまるで合っていない。膝下十センチはあるだろうか。厚手の布地はぶかぶかで、ウエストをヒモで括っていないければ容易く脱げ落ちてしまうだろ

う。

三人チームにいる男子の二人共がそんな水着を着ているのだ。

「何と言われてもねエ……水着だとしか答えようがない。はて、何か問題でも？」

「俺が先輩方の事を知らないと思つたら大間違いです！ 賭博部の陀尾兄弟！ そして

三羅さん！」

ここ『箱庭学園』には『賭博部』という屈強男タフガイの血も凍る地獄の部活動があつた。

その内容とは部員達が何でもありの様々なギャンブルで互いに闘い、あるいは学園外での勝負に出向くわけだが。

ギャンブルである以上、そこには賭け金ベットが関わるのだが、凄まじいのはその内容！

真剣勝負の上に互いに金や価値のある物を賭けており、勝つた場合それを戦利品として持ち帰るといふもの。

お遊びのギャンブルならば大したことはないのだが、真剣度ガチが上がるとそのイカサマ合戦で凄まじい騙し合いの地獄図！ 一戦一戦を相手を出し抜きながら戦わなければならぬ！ ほとんどの新入部員はその過酷さのため、財布ごと絞り取られて逃げ帰る……

この『賭博部』に在籍しているのは現在五人しかいない！

一年生の『彗星』宇城、『箱庭のアレキサンダー大王』大柳、二年生の『取り立て人』

三羅、そして二年と三年生の『陀尾兄弟』がそうだ！

そんな賭博部員が、いかにも何かを隠し持てそうな水着を着ている以上、イカサマを疑わずにはいられないというわけだッ！

「申し訳ありませんが、その水着の中身！ 確認させていただきましょうッ！」

周囲の騒めきが大きくなる。一部の女子生徒は鼻血を流し始める。

だがしかし、それに対する返答は……

「断る」

「……やはり、あんた達は！」

「当然でしょう。ごらんなさい、少なくともわたし達は『ルール違反をしていない』」

「なんだって……」

「ルール上では水着の指定はなかった筈だが」

確かにその通りだった。全校生徒へ事前に出した通達では水着を持参せよとは書いておいたが、どんな水着にしろ、とは書いていない。

つまり、陀尾兄弟はルール違反はしていない。

「ならば何故そんな水着を着て来たんだ！」

「これは陀尾家に伝わる由緒正しい勝負パンツ……いや、勝負水着なのだよ。それを君は『怪しいから』という理由だけで、人の水着を剥いで下半身を調べようというのだ。こ

の場の生徒達全員を調べるルールがあるというならまだしも、感情を優先して不平等にもわたし達だけを調べるとは……生徒会権限と言うにはあまりにも身勝手ではないかね？」

「ぐっ……！」

痛い所を突かれたと、高貴は唸る。

場所が場所なだけに、調査するにはそれ相応の理由が必要だ。勝負水着など明らかに嘘っぱちだろうが、本当に嘘なのかを調べる術はないし、確かに「怪しいから」で理由になるならば、他の生徒にもそれが言えてしまう。何もない様に見せかけて何かを仕込んでいるかもしれないのだ。『怪しい』ではないか。さつきから鼻血を垂らして挙動不審な女子生徒達など、かなり怪しい。

しかし生徒全員の水着を確認するには時間的余裕がないし、イカサマの証拠がない以上、目の前の男達を裸にひん剥くだけの正当な理由がないのだ。

だからと言ってこのまま見過ごす事もできない。賭博部が何らかのイカサマを仕掛ける事は事実！ そう、コーラを飲んだらゲップが出るっていうくらい確実だ！

そしてこの阿久根高貴の目が黒いうちは、この生徒会執行部主催の大会をイカサマで汚す事は許さないッ！

「いやいや陀尾先輩、頼みますよ。こちらとしても、そこらへんをハッキリさせとかない

と安心してイベントを進められないんですよ」

善吉も高貴の援護に回る。イカサマを許したくないのは善吉も同じだった。

善吉はチラリとめだかを見たが、彼女は疑わしきは罰せずという性格。どうやらこの件には静観を決め込んだらしい。腕を組んでこちらを見ているだけだ。

「フウ、これでは平行線だな。なら仕方がない……阿久根くん。第一種目の最高得点はいくらかな？」

「……二十ポイントですね」

「ならば、一人五ポイントだッ！ わたしと弟を調べるならば、賭博部にプラス十ポイントをしてもらおうッ！」

「なっ、なんだってエー!?!」

プールサイドに激震が走った。

あろう事か、賭博部は競技以外で点数を稼ごうというのだ！

「バ、バカな事を!?! 言うに事欠いて点数をよこせだつて!」

「ダダを捏ねているのはあなた方だ。わたし達が正々堂々と勝負しようとしている所に水を差して来るんだからなあ」

「どの口でッ……」

「調べるか！ 調べないか！ フフフ、どうです？ つまんないけどスリルあるでしょ

う

「あ、阿久根先輩……」

相手がイカサマをしていると賭けたなら、調べればいい。ここまで場を引つ掻き回したのだ、不正を見つけてしまえば、二人を退場させる事もできる。

イカサマをしていないと賭けたなら、調べなければいい。もしそうなら、彼らは正々堂々と大会に挑む事になる。一番丸く納まる形だろう。

ポイントを賭ける事に生徒達から苦情が出る可能性もあるが、周囲を見れば高貴達に向けるのは総じて同情的な視線。彼らは生徒会の味方だ。

めだかは変わらず静観を保っている。助けは期待できないだろう。そして賭けに負けても、恐らく高貴達を責めはしない。

高貴は自分の判断でこのギャンブルに乗らなければならないのだ。

葛藤の末、高貴が出した答えは。

「……いいでしょう。十ポイントを賭けて、あんた達を調べさせてもらおうッ!」

「グッド!」

「阿久根先輩、勝算はあるんですか!?!」

「……いや、悔しいが、ハッキリ言つて『ない』! しかしもつとも避けなくてはいけないのは彼らのイカサマを放置する事だ。その内容によつては、彼らの独走を許す事にも

なりかねない！ それではこの大会の、延いては生徒会執行部の正統性も失われるだろう……」

「それは確かに……」

「イカサマがあつたなら即決着。なかつたとしても、正々堂々と闘うならば十ポイント差程度は埋めようもある。確認こそがもつともリスクが少ない選択なんだッ」

それを聞く陀尾部長は不敵に笑っているだけだった。他の二人にも動揺は見られない。

この余裕が不気味にも思えるが、しかしこれでイカサマの有無がわかれば高貴も安心できるのだ。

降りるといふ選択肢など、ない。

「俺は陀尾先輩の方を調べる。人吉クン、キミは弟の方の陀尾くんを調べるんだ。決して不正を見逃すんじゃないぞ」

「わかってます。阿久根先輩も気をつけてくださいいね……」

「GO AHEAD! Mr. Akune! 早くしたまえッ！ 日が暮れてしまうまで待つ気かね？」

「……まったく、挑発も程々にしてくださいよ。兄さん」

不正の確認の為に、四人はロッカールームへ向かった。

後には未だ騒めく生徒達が残された。

『ぜつ、前代未聞!! 賭博部、まさかの十ポイントをフライングゲット! これが賭博部流の闘い方というのでしょうか! 流石のわたしも驚きを禁じえませんが!』

『あひゃひゃひゃひゃ!!』

『ぐああ……』

半袖は爆笑しているが、当然奏丞は笑えるわけもなく、頭を抱えるしかない。何かしでかすのではと警戒はしていたが、流石は天才ギャンブラー、つくづく予想斜め上を行く奴らだ。

『確かに不知火さんがダークホースと評するだけではありませんね……宇城くんはどうしてあんな部に入ったんですか? いやほんとマジで』

『……良い悪いは置いといて、ああいう突飛な発想ができる所を学びたかっただけだなあ。ホント、いろんな意味でスゲー先輩達だよ……』

奏丞にとつては格闘技系の部活動よりも参考になる事が多いのだが、金が絡むと途端に尊敬できなくなる部活仲間達だった。

『できれば宇城くんにはああなってほしくありませんね……おつと! ここで四人が

戻つて来たみたいですね!』

高貴、善吉、そして陀尾兄弟がロツカールームから歸つて来た。

果たして不正は見つかったのか? 生徒達は四人に注目するが……答えは言うまでもなかった。

生徒会が変わらず険しい顔をしているのに対して、賭博部の余裕の表情は崩れていなかったのだ。

陀尾部長が高貴に話しかける。

「さあ阿久根くん。君の口から言ってもらおうか! 『彼らは不正をしていませんでした。疑つたお詫びに十ポイントを差し上げます』とね!」

「ぐっ……!」

悔しい。悔しいが、しかし二人の水着の中には何も仕込んでいなかった。それは事実であり、認めるしかない。加点は避けられないのだ。

「……不正はなかった。賭博部に、十ポイントを加点するっ……!」

「ククク……感謝するよ」

悔しがる高貴とすれ違い様に、陀尾部長が囁いた。

「イカサマをする。イカサマをしない。どちらも選べて初めてギャンブラーなのだよ……」

「……クソツ！」

我慢できずに、ついに高貴は悪態を吐いた。

……さて、本当に陀尾兄弟はイカサマをしていなかったのだろうか？

はつきりさせておこう！

彼らは、間違いなく『イカサマをしていたツ』！

「(フフフ……そうそう気付く物ではあるまい。水着に仕込んであるこの糸には！)」

実はこの水着、布地の中に釣糸を仕込んでいるのだ。

それが一体何の役に立つのか？

例えば、この糸をキツく締めればぶかぶかの水着も身体にフィットさせる事ができる。水から受ける抵抗はこれで軽減、他の水着とのハンデはなくなる。

例えば、裾の部分だけ糸を締めれば、この水着は巨大な『ポケット』と化す。プールで定番の塩素拾いの様な種目では物を集めるのが容易になるだろう。

もちろん、戻す事はできないが、最終手段として糸を抜き取る事も可能だ。他チームの妨害もできるのだ。

そして、この厚手の生地では上からなぞつても細い糸に気付く事は到底できないだろう。

「(リスクの少ない選択だと？ この百戦錬磨の陀尾を相手になまっちよろい事を！
今貴様らは最悪の道を選んだのだ！

すなわち！ 『点数はとられ』『イカサマも見つけられない』という選択をな！)」

しかも彼らのイカサマはこれだけではない。

高貴達がカケラも疑問に思っていない物にも不正が隠れている。

なんと——それはヘルパー！

「(貴様程度にはこれも見破れまい……このヘルパーに入っているのは空気ではないツ、
満杯の『水』なのだツ！)」

つまり、もはやそこには浮具としての機能は存在しないのだ！ ハンデは無いも同然

！ 学園の物を配布したから不正などないという、正に心理的盲点を突いたイカサマと
言えるだろう！

「(しかしこれだけでは終わらんぞ！ ダメ押しの一発だ！)」

「待てっ！」

「(……かかったか！)」

待ったをかけたのは善吉だった。

突如叫んだ後輩に、高貴も目を丸くする。

「人吉クン? どうしたんだ一体……」

「すみませんが、試合開始はもう少し待ってもらいます。その前に話し合っておかないやならない事があるんですよ……三羅先輩」

「……なに?」

「アンタは……不正をしていますか?」

「!?!」

善吉が指したのは、なんと三羅。『一見何の変哲もない水着を着ている』三羅だった。さしもの高貴もこれには驚いた。

「人吉クン、それは……」

「阿久根先輩もよく考えてください。相手はあの賭博部……勝つ為ならサギもイカサマも何でもやる、あの賭博部だ! 部員全員が鍋島先輩にも匹敵するであろう奴らが、たった十点ぼっちリードしたくらいで後は正々堂々なんて、俺には信じられない! 奴らは勝てるだけの手を打って来ているハズですよ!」

「それはそうだが……!」

「それにミスリードは詐欺師の常套手段です。何も無い様に見せかけて何かある……十分考えられる事です」

「ううっ……!?!」

善吉の心には、そして今正に高貴の心には、疑心暗鬼が生じていた。何かあるのではないか？ 何かあるはずではないか？ 疑う気持ちか二人の中に大きく渦巻いていた。

それこそが、彼らの狙いと知らずに！

「ちよつと待つてほしい……今、あたしが何かしてるとでも？ 部長達のイカサマを

疑ったようだけど、あたしもそうだと？ そもそもこの水着は学園指定の物よ」

「だからこそですよ。怪しい水着で注目を集めておいて、しかし本命は一見普通の水着の方だった……かもしれないでしょう」

「……つまり、まさかとは思うけど、『あたしの水着も確認したい』と。そういう事なのかしら？ 女の子に『水着を脱げ』と、そういうワケなのかしら？」

「……………」

そこが善吉にとつてもネックだった。

何せ相手は女子だ。一步間違えれば……否、間違えなくてもセクハラ問題になってしまう。名誉ある生徒会執行部が手錠ワッパをかけられるわけにはいかない。

三羅を呼び止めたものの、打つ手が無く焦っていた善吉に……救いの手が差し伸べられた。

「男子である善吉達では不適切だろう。三羅二年生の確認は私がしよう」

「めだかちゃん!」

「……………」

こればかりは分が悪いと思つたのか、満を持して、めだかが出て来た。

「世間一般では女子は男子に肌を晒す事に抵抗があるからな。ならばここは女同士で仲良く取り調べを行うべきだろう? 私なら気にしないが」

「めだかさん、自分が世間一般とは違う事は自覚してたんですね……」

「勝手に話を進めないでほしい。私とその取り調べとやりに応じるかどうかを」

「ほう。嫌か? 三羅二年生」

「嫌ね。私は例え女同士だろうと、人前で裸になるなんてゴメン」

「(そうだ、まずはゴネろ! 猜疑心を煽れ、三羅!)」

三羅に疑いがかかる。これすらも陀尾にとつては計算通りだった。

善吉の様に、人は疑心暗鬼に捕らわれている時、何も無い物にも何かあるのではと疑わずにはいられない。散々場を引つ掻き回してエサを振り撒いたのだ。食い付かないわけがない。

そして三羅がゴネればゴネるほど、その猜疑心はますます深まっていくのだ……もはや見て見ぬフリができなくなるほどに。

だがその考え、実際はまったくの空回りなのだ。

実の所、三羅に不正は何もない。

「まさか男子に調べさせるわけもない。ならば女子である生徒会長が出て来る事は必至！　そしてあの化け物ならばどんなイカサマを仕込んでも看破するだろう……奴をナメてはいけない」

だからこそ、三羅には何も仕込まなかったのだ。調べた所でイカサマなど出て来ない。

しかし、この調子ならば必ず食い付く。『ポイント』が、幻想でできた空っぽのエサに……！

「高すぎず、しかし少なすぎず。女子である事を利用して男子の三倍の得点、十五ポイントをここで狙う！」

「まあ、確認はしたので脱ぐ必要はないが」

「……どういう事？」

「脱ぐ必要はないと言った。どうやら三羅二年生に不正はないようだ」
「！」

「なっ！　何イ……」

何でもない事のように断言したために善吉が詰り寄る。

「オイオイめだかちゃん、何でんな事見ただけでわかるんだ？　いくら薄い水着だか

らって、相手は賭博部だぜ！　こう、胸の所に隠してるとかさあ……」

「貴様はキャッツ・アイでも相手にしているのか？　疑いたくなる気持ちはわからんでもないが。だが安心しろ、三羅二年生の体格は見ればわかる。何かを隠せる様なスパーはあの水着にはない」

「見ればわかるって……」

「身長、肩幅、背筋、歩幅、重心……足音や跳ねる水の量も見ればおのずとわかる」

「そういやお前はそんな奴だったな……」

「流石めだかさん！　俺達にできない事を平然と言つてのけるツ。そこにシビれる！

あこがれるウー！」

それに対し、賭博部にとつては冷や汗もんである。これが常人の言葉ならハツタリ以外の何物でもないだろうが、しかし相手は今を時めく化け物生徒会長、めだかはできると言つたらできる奴なのだ。

しかし幸運なのはめだかの化け物具合を試合前に再確認できた事だ。予想以上に危険な奴だったが、その分賭博部から慢心を取り除いてくれるだろう。全身全霊をそそいでゲームに挑めるといふものだ。

……もつとも、彼らに次はなかつたが。

「ふん、疑いが晴れたならもう用はないな。我々はこれで失礼する」

「待て。今度は私が貴様達を調べる」

「えッ!? し、調べるだどッ! 何を調べようと……!?」

「無論、貴様達の不正についてだ」

めだか、まさかの二度目の捜査の宣言である。

「さつきは善吉達と賭けをしていたな。私も賭けていいぞ。十ポイントと言わず百ポイントでも優勝でも何でも賭けてやろう。調べる事に変わりはないからな」

「めだかさん! お言葉ですが、彼らは既に一度、俺達で調べていますよ!」

「阿久根書記、貴様達を責めはしない。ただ相手が一枚上手だったという事だ」

めだかはそう答えるやいなや、一瞬の内に陀尾兄弟に駆け寄り、風の様に二人の間を通り抜けた。

「ふむ、まあこんなものか」

「!?!」

めだかが両手の人差し指を見せつける様に揺らしている。そこには何かの布切れと、釣糸が垂れ下がっていた。

「なにイーツ!!」

それらは紛れもなく陀尾兄弟の水着の一部だった。めだかがすれ違う一瞬で千切り取ったのだ。

「生地が分厚い理由はこの糸を隠す為だな。布の上から触っただけではなかなかわからん。水着の一部だと言われると不正とはとれんが……」

「そつ、そうだ！ それは水着を締める為の糸・イカサマではない！」

「そうか。では次はヘルパーを出してもらおう」

「ゲーッ!!」

陀尾の頭はショート寸前である。

「めだかちゃん、ヘルパーってどういう事だ?」

「自分や阿久根書記の物とよく見比べてみる」

「?」

何かあるのかと善吉と高貴はその言葉に従い、陀尾兄弟が着けているヘルパーと自分達のヘルパーを交互に見る。

最初に気がついたのは高貴だ。

「はっ! そういえば透けて見える腕が、俺達のに比べて微妙に大きく見える!」

「……あつ、確かに!」

「見え方が違うという事は屈折率が違うという事。つまりあのヘルパーの中に詰まっているのは空気ではない。空気の屈折率を約1と考えれば、あの中身の屈折率は目算で約1.33といった所か。ちょうど水の屈折率に当たる」

「なんとという事だ……これは確かな不正だぞ！」

「おのれ……」

高貴は憤慨するが、同時に戦慄せずにはいられなかった。自分だけでは賭博部の策に完全にハマっていたのだ。イカサマを見逃した上にポイントまで持っていかれる所だった。

人より優れているという自負はあったが、この箱庭学園において、自身は何と頼りない事か。

「わかってたんなら言ってくれりゃ良かったのに……」

「今回の様な事が起きるのは今日だけではないぞ。貴様達は事あるごとに私を頼る気か？ 生徒会執行部を名乗るならば、己の判断で最善策を見極められなければならん。今回は二人にとつていい教訓となっただろう」

「……反省します」

「うむ、精進せよ。」

「……それでは先輩方、覚悟はよろしいですね？」

「「ひっ……」」

ひイエーっ——

『い、いやー無事に(?)事が済んで良かったですねー。何故か生徒会長は嬉しそうにしていますけど……』

『肉体的、精神的に関わらず、めだかはああやって人と戦う事が好きだからな。賭博部らしい陀尾先輩達の戦い方に感じるもんがあつたんだろ』

『いやあ、前座に面白い物見れたねー。無敵の生徒会長様がいなけりやダントツで優勝候補だったのに♪』

『一時はどこよりもリードしてましたけど、終わってみれば賭博部は試合前に負けてしまいましたねえ』

『さて、それはどうかな!』

『え? どうかなって……賭博部はもう退場なのでは?』

『いや! 正確には不正をしていた陀尾兄弟、二人が退場したんだよ。つまり三羅先輩はまだ残ってるってコト。そして賭博部には失格していない部員が二人いる!』

『……ええっ!? という事はつまり……』

『ふっふっふ……宇城い。部長さんがかけた保険が働く時だよ♪』

こいつは本当に頭が切れるな、と考えつつ、奏丞は先日の事を思い出す。

この運動会の開催が発表された後、部室で作戦会議をしていた時の話だ。

——万が一わたし達が失格になった場合は、お前達一年生が三羅と共に試合に出ろ。三羅が失格にならないければ、出場部員は三人ピツタリ揃う。

もちろん、部ごと失格になってしまふ可能性はあったのだが、賭博部にとってはそれすら賭けの対象だ。しかもめだかの性格を分析すれば十分勝ち目のある賭け。

その証拠に、放送席に座る奏丞に向かって——

「いい機会だ奏丞！ 貴様も降りて来て戦え！」

ニヤリと笑うめだかがある。

確かに今回勝利したのはめだかだろう。しかしここまでの展開を予測し、備えておいた賭博部も決して敗北はしていない。

『……こんな時こそあの言葉だな。 “やれやれ” という奴だぜ』

『あひやひや♪ イマドキのやれやれ系主人公気取つてないで早く行ってやりなよ！』

『ええつ、宇城くんには解説の仕事があったのに……頑張ってくださいね』

『どーも』

波乱に富んだ部活動対抗水中運動会は、ようやく開幕の時を迎えるのだった。

「アイツら、ウチより卑怯やない？」

「……賭博部の面々、だいぶ濃かったですね」

「なあ、俺達キャラとかインパクトとか……喰われてる？」

「待ちに待ってた競泳部の出番は!?!」

そんなものは残っていない。

第十五話：新入り会計と幽波紋！

つい先日行われた部活動対抗水中運動会の後、箱庭学園生徒会執行部には新しく『会計』が加入した。めだかから直々にスカウトされた、喜界島もがなである（ちなみに日当320円）。既に奏丞とも顔見せはしてあるのだが……実はまだそれほど打ち解けているわけではない。せいぜい生徒会での役割の話を済ませたくらいだ。

「なのに今日は二人で留守番とかよ……不安しかねえ」

めだか、善吉、高貴の三人は別の仕事で出勤している。奏丞ともがなはその間の留守を任されたのだが……さて、どう対応したものか。

「まあ、なんとかなるか。邪魔するぞー」

そう言つて奏丞が生徒会室の扉を開け——着替えの途中だったもがなの裸体を見ることになった。

「……ッ?!」

「なっ、何イーツ!!」

奏丞は直感した。あと数秒もしないうちに、もがなは間違はなく悲鳴をあげる！ そ

うなれば人が駆けつけてこの状況を見るだろう。弁解できる可能性は皆無、奏丞はめ得太く前科持ちだ。

だがしかし、ここで事態に対処できないようなヤワな鍛え方もしていなかった。

「(アクア・ネックレスをツ! 口中に発現!)」

水と同化したスタンド、『水の首かざり』。このスタンドはスタンド使いでなくとも視認できるタイプであり、ミルクやブランデーのような液体に化けることができる。奏丞は口の中のアクア・ネックレスを真つ赤な血液に化けさせ、それを吐き出して見せた!

「ゴハアツ!」

「——ええええええ、なんで吐血?!」

覗きされた衝撃を別の衝撃で上書きし、うやむやにしようという作戦である。まあ、一応悲鳴は阻止できたようだ。

「(俺の作戦としてはちよいと残酷趣味だが、修行の成果があげた判断力つとこだけ、喜界島!! 真黒さん、あんたのしごきに対して礼を言うぜ……ありがとう!)」

女性のあられもない姿を見ておいて全力で誤魔化そうとするこの男、これでもこの物語の主人公である。

「だ、大丈夫なの?! なんで血を吐いたの?!」

「いや、大丈夫だ……悪いな、ちよつとストレスで」

「この人超失礼だ！」

自慢ではないが、もがなとしてはそこまで自分が悪い身体つきをしているとは思って
いなかったのだが。しかし奏丞の方は、そのまま何事もなかったかのように机に書類を
広げ始めた。

「……そつ、そんなにあたしの体、見苦しかった？」

「イヤ、普通に眼福だったが……」

「えっ」

「あつ」

ドグシヤアツ。

「ぐええ……」

「人のハダカしつかり見てるんじゃない！ お金払って！ 目の保養料で450円！」

「450円？ カツカツカツカ、バカにしちやあいかんよ君イー！」

「……ぐすつ」

「千円あげます……」

「ほ、ほんと？ わーい、ありがとっ！」

流石に泣かれてしまつては値段交渉どころではなかった。それでも驚きの安さだが、
もがなはめだかのお眼鏡にかなうくらいの会計適正があったが、それとは別に少々変

わった金銭感覚があるようだ。ちなみにそれを知って不埒な考えを持った奴には、屋久島と種子島というもがなの先輩達が会いに来る、という噂である。

「さっ! じゃー仕事しよーかな。パソコンどこ?」

「そんなもの、ウチにはないよ」

「はいっ?」

「ソロバンか、俺が個人的に持って来てる関数電卓しかないぞ」

「じゃあ今までの会計どうしてたの?!」

「めだかに任せれば全部暗算で済ませてたよ」

「どれだけ高性能なのあのヒト! わ、わかった。じゃあ関数電卓貸してもらえる?」

「ほら。そっちの仕事は頼んだぞ。俺はこっちの仕事を片付ける」

「うん、任せて」

奏丞ともがなは各々の仕事を始める。外の雨音と作業の音だけが部屋に響いていた。

……少々気まずい沈黙の時間だった。

「(静かになっちゃった、どうしよう! 仕事してマジメなトコ見せようとしたのは失敗

だったかも?!)」

もう少し和気あいあいとした時間にしたかったのだが、そうもいかなかった。目の前の奏丞をチラリと見ると、向こうもマジメに仕事モードのようだ。正直意外である。

「もう！ 宇城はもつと軽薄キャラでも良かったのに！ 仕事中だけど別に話しかけられても大丈夫だからさ?!」

こうなったら自分から話題を振るしかない、もがなは決意した。生徒会に入る前、先輩達から友達を作れと言われたことを思い出す。

「(そうだ、あたしは生徒会で、友達を作ってみせるんだ!)」

そういうえば、昔本で読んだことがある。たしか、天気の話題だけは誰が相手でも外すことがない。ならば話題は決まった!

「う、宇城！ きよーは！ いーてんき！ だね！」

「天気？」

奏丞は外を見た。あいにく本日は雨模様だ。……こんな日は、まだ天歌が『黒神くじら』だった頃を思い出す。

——気付かなかつただろ、奏丞！ 玄関で降り注いでいたのは雨水じゃねエ、俺様特製の『環境には優しい液体』だったのさ☆

「おちおち外も出歩けねえ！（パンツ）」

「なになに！ 突然机叩いて?!」

「いや、大丈夫だ……悪いな、ちよつとトラウマで」

「体も心もポロポロだよこの人?!」

さつきから血を吐いたりトラウマを見せたりと、傍から見ているかなり不安なヤツだった。生徒会室ではなく保健室に行くべきではないか、ともがなは思った。

「んん、いやホント大丈夫大丈夫。めだか達とつるんる時はもつとひどいことになつてるし」

「それはそれで怖い話なんだけど……会長さんって、昔からあんな感じなの?」

「あんな感じってーと?」

「ほら、その……他人のために働くとか……キキ、キスとか」

「あー」

例の水中運動会で、もがなは感極まったためにズキュウウンとされている。善吉曰く、黒神めだかの真骨頂その③『行き過ぎ愛情表現』というやつだ。

「まあ今も昔もあんなまり変わってないな、あいつのハチャメチャさは。キスの方は……小学校に入る前はよくやってたんだ。流星に俺と善吉で早い段階で止めさせたから、今じゃ滅多に見ないけど。善吉のファーストキスもめだかじゃなかったかな」

「もしかして宇城くんも?」

「俺のどこに来たら(スタンドで)蹴つ飛ばしてやったからな、まだ清い体だよ」

「それってあたしが汚されてるって言いたいのかな? うん?」

「………来世があるさ!」

「よ、汚れてないもん！ あたしだってまだ清い体だもん！」

「うんうん、そうだといいな」

「ウガー！」

「(コイツ面白れエ)」

水中運動会ではかなり素っ気ない様子だったのだが、話してみると結構ノリがいい感じだ。からかいがある。

「お節焼きなのも昔からだな。子供の頃に善吉に会って感化されてああなった。……まあそれ以前も色々あったみたいだけど」

「……なんかすごーくはしよったよね？ あたしからしたら、見返りもなくああして人を好きになれるなんてしんじられないよ……」

「お前だって屋久島先輩や種子島先輩のこと、見返りなくたって好きだろ？」

「え……あつ」

「あいつにとつては全人類がその対象なんだよ、たぶんな。だからお前のことも大好きだろうさ」

「……………」

そう言われて、もがなは生徒会に誘われた時のことを思い出していた。めだかに正面から、見返りではなく助けを求められたことを。ギブアンドテイクの世の中だと思つて

いたもがなにとって初めての経験なので、随分戸惑った覚えがある。

「しっかしアイツはもう少し落ち着きつてものを……」

「(つて……あれ? あたしいつの間にか宇城くんと結構話せてない? これつて……友達作るチャンスじゃない?!)」

だが、ここで意識してしまうと変な失敗をしかねない……。そう考えたもがなは、ここで妙案を思いついた。他の人を参考にするのである。

「うっ、宇城っ!」

「あ? どーした」

「お……お前に惚れてしまった、からっ! ちゅーするぞ!!」

だからといって黒神めだかを参考にするのはどうなのだろうか……

「……………おま」

—— 奏丞え?

—— 宇城くん?

「ぐっ?!」

その瞬間! 奏丞は圧倒的な殺気を感じ取った! 薬品臭の怪物と腐臭の化け物の存在感! しかし勿論周りにそんなモノはいないし、頭が茹だつてそんなもがなが何かに気づいた様子もない。だが、それでも気のせいで済ませられるほど、奏丞は楽観的で

はなかった。

「今の感覚はどう考えても……!」

「しっつれいしまーす☆」

「ゲエツ、古賀先輩!」

「へっ、誰? お客さん?」

突然生徒会室に入って来たのは、改造人間古賀いたみだった。中学校でも奏丞の先輩だった人であり、そして、天歌のマブダチでもある。

このタイミングで彼女がやって来たのはほかでもない。

「宇城くん、名瀬ちゃんが用事で来たから来てほしいってさ☆」

「アイツ色々隠さなくなってきたなあ!」

「えっえっ、宇城くん知り合い? 誰誰?」

「俺の先輩だ……悪い、めだか達にはよろしく言っといてくれ!」

「ちよっ……」

グワシャアッ! ガラスの割れる音が響いた。奏丞は躊躇なく窓をブチ破り、逃げ出したのだ。呆気にとられたもがのだが、慌てて窓際に駆け寄った。雨が降っている中、既に遠くにいる奏丞は、特に怪我をした様子もなく全速力で走っている。

「なっ、何やってんのよー?!」

「おおっと逃がさないよ！ 名瀬ちゃんの前で弁解してもらわないといけないからね！」

いたみの方も奏丞を追って窓から飛び出して行ってしまった。もはや何が何だかわからないもがなは、呆然とそれを見送るしかなかったのであった。

「二人とも、留守番御苦労だった！（凜っ）」

「えっあつ、みんな!？」

「……ん？ 窓ガラスが割れているな。怪我はないかい？」

「奏丞もいねー……何かあったのか喜界島？」

「そのっ、あのっ！ 宇城が！ なんか！ ちゅーしようとしたら、先輩?! に追いかけて！」

「「……………」」

状況が読めない三人だったが、しかし生徒会では窓ガラスが割れる程度のトラブルはよくあることだ。なので結論は一つ。

「「……まあ大丈夫だろう」」

「それでいいのー?!」

もがなが生徒会に慣れるには、もう少し時間がかかるかもしれない。

第十六話：風紀委員長と幽波紋！

「え？　雲仙委員長に届け物？　音楽室に？　私がですか？」

同僚にそう聞き返した少女の名は鬼瀬針音おにがせはりかね。彼女は箱庭学園の治安を守る、風紀委員会で働くメンバーの一人だ。生真面目な性格ではあるが、『手錠メリケンの鬼瀬』なんて異名を持つ通り、手錠をメリケンサク代わりに殴りかかるといふ鉄拳制裁主義も掲げている。過去に生徒会と争ったことがあるが（どいつもこいつも服装が校則違反だった）、めだかの露出癖を矯正しようとしたのが運の尽き……これまで規則を厳守してきた彼女が、最終的に胸元が大きく開いたためだかの制服を着るといふ屈辱を味わうこととなった。何がとは言わないが天と地ほどの差があったので、当然服はだぼだぼだった。「ええ、私達は他に用事がありました……このタオルをお願いします。それに近頃あなたはたるんでいるようですからね。一度雲仙委員長の仕事振りを拝見して気を引き締めた方がよいでしょう」

「あー……そりやまーお氣遣いどうもありがとうございマスー！」

「そうすねないでください。きつとためになりますよ」

そうやって語るのには、『箱庭学園十三組』。選りすぐり中の選りすぐり、エリート中のエリート、例外中の例外、人外中の人外が集まる、登校義務さえ免除された特別待遇にも程がある究極の特待生クラス。

「雲仙委員長は昨年弱冠9歳にしてその十三組に選抜された、学園始まって以来のモンスターチャイルド。彼の実行する正義は、まさしく風紀委員会そのものです！」

「……とはいうものの、私はここ最近生徒会のせいで失態続き。特にお咎めがあったわけじゃないんだけど、雲仙委員長とはちよつと顔を合わせ辛いのよね……」

「おや、鬼瀬同級生ではないか。奇遇だな、どこへ行く？」

「やつほー鬼瀬。タオル抱えてどこ行くの？」

「あ……うわつ。黒神さん……と不知火さん（サイアクの二人に会ってしまった！）」

黒神めだかと不知火半袖、以前痛い目に合わされた二人だ。しかも片方はなぜか鼓笛隊の服装をしているし、もう片方は飴を齧っている。どちらも校則違反だ。

しかし、今の針音には仕事がある。なのでとりあえずここは関わらないでおこう。決して逃げるワケではない。そう、決して。

「わ……私はその、音楽室へ行くところなので。それじゃあ……」

「音楽室？ 奇遇だな、私も今向かっている。生徒会からも既に奏丞を派遣しているぞ」

「……………」

音楽室にたどり着いた三人は異様な光景を目にした。——壁にドでかい穴が開いている。慌てて中に入ってみれば、向かい合う人間が二人。雲仙冥利と宇城奏丞だ。

「……………」おー、鬼瀬ちゃんじゃん☆ タオル持って来てくれたんだ、サンキュー。これから使う予定だから、それ持つといってくれや」

「あ、は、はいっ」

「よう不知火。そしてめだか、お前はまた奇抜な恰好しやがって。…………音漏れは防音設備がボロかったせいだった。とりあえず業者呼んで工事だな」

「ふむ、そうなるかとはオーケストラ部の練習時間をすり合わせねば。しかしこの時間は彼らが練習しているはずだが」

「全員帰した。アブネーからな」

「ならば良い」

「(いやいや、何も良くないですって！ なんなんですかこれ?! なんて雲仙委員長と宇城くんが睨み合ってるんですか！ しかも…………)」

風紀委員会は常に風紀を乱す輩と戦ってきた。だから危険物を持ち込んだ相手はい

くらでもいたし、その度に針音は愛用の手錠メリケンを掴んで立ち向かってきた。しかし、この音楽室に見られる風景ときたら、それどころではない。

「(いったいなんなの？ この車は!?! いったいどこから持って来たの!?!)」

☆☆☆☆☆☆☆☆

時間は少し遡る。

この日、生徒会はある案件の解決に乗り出していた。ここ最近、オーケストラ部への苦情が度々目安箱に投書されているのだ。どうやら利用されている音楽室の防音設備にガタがきているようで、そのせいで大音量が漏れ出ているらしい。そこで奏丞は件の音楽室に向かい、どの程度の問題が起きているのかを調べるよう命じられたのだ。ちなみに命じたためだかは準備を終わらせてから来るらしい。ぶっちゃけ衣装の用意のためなのだが。

「というわけで部長サン。周りからの苦情も多いんで、これから解決のために協力してもらいますよ」

「えーと、その、オーケストラというのはそもそも大音量で演奏するものなので、ある程度周りに迷惑をかけてしまうのも……」

「ああ？（ギロツ）」

「はいっ、喜んでキョーリヨクしますっ」

「ぶ、部長。いつもみたいに言い包めてやるってきつき……」

「（無理無理！ 彼絶対カタギじゃないって！ めっちゃ怖い！）」

「（怖くて悪かつたなチクシヨ）」

190センチはある大男に凄まれるのだ、そりゃあ怖い。

「まあ設備の問題もあるので、大したペナルティにはならないスよ」

「それは、ありがたいです、ハイ」

「じゃあとりあえず、どの程度音が漏れているのか聞きたいので、短めのやつを一曲演奏してもらえますか。俺は外で聞かせてもらおうんで」

「はいっ、わかりました！ 皆聞いてたね！ 準備して準備！」

音楽室を出た奏丞。しばらくすると演奏が始まったが……なるほど、確かにこれはうるさい。全然防音ができているようだ。

「これは駄目だな。エコーズを遠くまで飛ばしてみても、まだ音が聞こえてくる。こーなると工事でもするしか……」

「よお、宇城くん☆ オケ部の様子はどうかナー？」

「ん？ 誰かと思えば雲仙先輩じゃないですか。なんでこんな所に？」

「いやー風紀委員会にも苦情があつてよ。こうしてオレ自ら対処しに来たわけよ」

「そーすか。仕事が被つちまったみたいですね」

雲仙冥利は風紀委員長としてかなりの有名人だ。年は子供で体格も小さいが、彼の影響で風紀委員の取り締まりは過激になったというし、何よりめだかと同じ、登校している数少ない十三組の生徒。奏丞も遠目にその姿を確認したことがある。

「あーあー、うっせーなーしっかし。こんな騒音出してよく生きてられるもんだねー。今まで殺しかつてくれるヤツがいなかったのかよ」

「まあうるさいと言えはうるさいスね。でも演奏自体は見事なもんじゃありませんか」

「いやいや、これは紛れもない雑音だ。これはオレの出番だわ。……とところでデメエ、頭がたけーゾ」

「ー」

そう言つて、冥利は突然腕を振るい、奏丞に攻撃を放った！

「ケケケ、まずはひと……り？」

しかし妙なことに、奏丞は倒れるどころか痛がる様子もなく、変わらず立っている。

「おつかしーな。外しちまったか？ 手元が狂つたかね」

「……もーほんと、こういうトコだよ。どいつもこいつも気軽に暴力沙汰に持つていきやがる」

「あん？　ゴチャゴチャ何言ってるんだ？」

「大した球速だがよオ……弾速ほどじゃねーな」

奏丞が冥利の前でコブシを開いてみせた。その手の中にあつたのは……スーパーボールだ。冥利が放つたはずの。

「なんだと？」

「説明書をちゃんと読んでくださいよ、先輩。こーいうのは『人に使っちゃいけません』って書いてるもんだぜ」

体格の小さい冥利は、主な武器としてこのスーパーボールを使っている。勿論ただのスーパーボールではなく、魔改造されたスーパーボールだ。反射力、反発力ともに凄まじく、どんな角度でも、どんな身長差があろうとも、跳弾によって攻撃できるわけだ。

……しかし、奏丞のスタンドの多くは銃弾にも容易に反応できるほどのスピードを持つ。よって、この程度の攻撃ならば十分に対応可能。

「……面白れー。中途半端な異常アブノーマルとは聞いてたが、初見で、しかも不意打ちされながら自慢の手品を見破るとは。流石のオレちゃんも度肝を抜かれたぜ！」

「アンタに攻撃される謂れはないんだが」

「いいや、残念ながらあるんだわ。何せテメーは、下っ端ながら生徒会の関係者だから」

「そりやまた、クソみたいな理由スね」

「だろ? そんな下つ端のクソが……どこまで抵抗できるか見せてみな!」

今度は両手いっぱいボールを投擲する。壁という壁に反射しながら、あらゆる角度から奏丞に迫る。

「フン!」

『おらおらおらおらおらおらおらあつ!』

「!」

そして、その全てをスタープラチナがキャッチしてみせた!

「スーパールを使うた全方位攻撃。反射角を計算しつくすのはクレイジーと言うしかねーが、攻撃方法としちや案外月並みな発想だぜ」

先ほどと同じように、両手に溢れたボールを見せつけた。奏丞が身動きしたようには見えなかったのが更に異常。

冥利は自身が冷や汗を流しているのを自覚した。

「……理事長もついに耄碌したみたいだぜ。何が紛い物だ。マジモンじゃねーかよ、コイツは!」

「どーやら陰で人のこと好き勝手言ってくれてるみたいだな。……ところで先輩、俺も手品は好きだぜ」

「……………」

そうやって、奏丞はボールでひよいひよいとお手玉をし始める。手元ではボールがいくつか出たり消えたりしているようで、なるほどそれらしい手品ではあるが……

「……ケツ、どんなタネかと思えば子供騙しなミスディレクションの繰り返しじゃねーか」

「おつと流石先輩、難なく見破るかあ？」

「当たり前……だ……？」

一見消えたと思えるボールの行方も追えていた冥利は、ふと気付いた。本当に消えているボールがあると。一つ、また一つと、ボールはだんだん奏丞の手元から消えていく。やがて最後の一つになったボールを奏丞が両手で挟み込み、それで全てが消えてしまった。

「……どジャアアア〜ん」

「どういうこつた！ オレはタネを見破ったハズだ！」

「(手先の器用さは結構自慢だったんだけどなあ、自信なくすぜ……)」

スタンド無しで手品するつもりだったのが冥利相手には通じなかつたので、格好を付けるためにスタンドを使った次第だ。裏事情カツコワルイ。ちなみにスーパーボールは何かと便利そうなので、このまま拝借する予定だ。

「とまあ、からかうのはこれくらいにして。曲もとつくに終わってることだし、ここは引いてくださいや。オケ部のことは生徒会が責任持つて解決しときますんで」

「……はあく、オレもつくづく情けない先輩だぜ。後輩になめられてちやあ立つ瀬がないっつーか」

「……………」

「ここは一つ、先輩の威厳を見せつけるしかねー……なっ!!」

「そりゃ引くわけねえか!」

冥利が飛び蹴りをかましてきた。しかし勢いや体格差を見るに、大したダメージはないだろう……とは奏丞は考えない。

「死んどけや!」

「チッ」

奏丞がその場を飛び退く。冥利の蹴りは狙いを外れ、壁に命中したのだが。

「ムッ!?!」

ドンッ、という爆音とともに、その壁がぶち抜かれてしまった。奏丞は『猫草』のスタンドを使い空気のを展開。飛散する瓦礫をガードした。

「ケケケ! コーんなプリティなお子様の蹴りを慌てて避けるなんてよオ! 図体の割には臆病過ぎるんじゃないぞ!?!」

「もーちよい学校は大切に扱えやクソ風紀！」

「音楽室があ?! ちよつと宇城くんどーなってるんだ！」

「オケ部の皆さーん。本日は音楽室が使用できませんので、私物だけ持ってさっさと帰りやがれ！」

「と、突然そんな」

「この壁みたいになりたくないなら駆けああああし!!」

「あわわわわ……皆撤収！ 撤しゅーう！」

「「はいいい!!」」

「馬鹿かテメーらは。オレの虐殺おしごとに付き合ってもらわねーといけねーのに、逃がすわけねーだろー！」

「エコーズ ACT2! GO!」

攻撃しようとする冥利の足元に、エコーズが『しっぽ文字』を投げつける。

「まとめて殺……?!」

地面に貼り付いた『ピタリ』という文字を冥利は踏んでしまった。触れれば実感となるエコーズの文字に触れた冥利は、体が『ピタリ』と止まって動かなくなったのだ。

「か、体がまったく動かかぬエ!? クソが、今度はどんな手品だよー！」

「今のうちにさっさと行け！」

「「ひいひい！」」

結局、冥利はオケ部員を全員見逃すことになった。奏丞にいいようにあしらわれ、苛立ちは募るばかりだ。

「（腹立つぜ！ 天下の風紀委員会委員長、雲仙冥利サマがこのアリサマかよ！ 体が動いたら間髪入れずに攻撃をブチ込んでやる！）」

「（体が動いたら間髪入れずに攻撃をブチ込んでやるってツラだな。無理もねーが、相当苛立つてるみたいだ。だがそれをされると、ちつとばかりマズい）」

迎撃をエコーズで行うにしろ、他のスタンドで行うにしろ、まずは『しつぽ文字』を回収しなくては迎撃に移れない。それには少し時間がかかるので、速攻で来られると対応できないのだ。

「（このままオサラバして、離れた所で解除できたら満点なんだが。後で来るめだかに丸投げはできないな……）」

そこで奏丞は音楽室に入り、敢えてゆったりと椅子に座り込む。冥利の気をそらすために、ここは冷静な雰囲気を作ってトークで時間を稼ごうという作戦だ。

「さて、雲仙先輩。さっきも言った通り、アンタに攻撃される謂れはない。あのオケ部の連中だつてそうだ。いくらか人様に迷惑をかけちゃあいるが、別に殴られるほど悪質でもなかったはずだ」

そう切り出しつつ、エコーズを解除した瞬間。落ち着くどころか、逆に冥利は奏丞に向かつて一直線に走り出した！

「ケケッ！ 演出ゴクローサン！ 『間髪入れずに攻撃されるとマズい』って感じがしてたぜ！ 宇城奏丞！」

「なんだとッ」

エコーズはまだ文字を回収できていない。スタンドの防御はできそうにない。冥利は腕を振りかぶり、スーパーボールを投げようとして――

「……………仕方ねー、だったらなんとかするしかねえよなあ〜」

「ハッ!?!」

冥利には、奏丞が一瞬で懐から紙切れを取り出し、それを広げたように見えた。次の瞬間、冥利は仰天する。

「どっから湧いて出た…………?! このジープは?！」

互いを遮るように現れたその巨体は、ゴツゴツのオフロード車。流石に冥利も攻撃を中斷せざるを得ない。

「コイツは完全に違う！ あの宗像形……………あのヤローは『技術で身体中に暗器を隠して

る』。そういうのとは全然別格だ！ 『超越する』何かを身につけているヤツだ！」

「壁にもなつて出鼻もくじける物ついたらジープぐらいしかなかつたぜ。真黒さんに貰ったヤツだが、怖くて値段は知らないし知りたくない……」

「（どーすつかね。タネがわからない以上、ここでカードを切るべきか……？）」

奏丞はいざという時のため、エニグマによつて色々な物を紙にして持ち運んでいるのだ。このジープもその内の一つである。

無事にスタンドは引つ込められたし、あとはめだかが来るのを待てば……と思つていたところで、ちょうどめだか達がやつて来る。

「……おー、鬼瀬ちゃんじゃん☆ タオル持つて来てくれたんだ、サンキュー。これから使う予定だから、それ持つといてくれや」

「あ、は、はいっ」

「よう不知火。そしてめだか、お前はまた奇抜な恰好しやがつて。……音漏れは防音設備がボロかつたせいだった。とりあえず業者呼んで工事だな」

「ふむ、そうなるかとはオーケストラ部の練習時間をすり合わせねば。しかしこの時間は彼らが練習しているはずだが」

「全員帰した。アブネーからな」

「ならば良い」

さて、めだかと冥利の二人だが。実は面と向かつて話したことはない。

「雲仙二年生。私の友人と何やら揉め事があつたようだが、どういう経緯なのか貴様の口から説明してもらいたい」

「俺は悪くねー」

「奏丞は黙つていろ」

「ひでえ……」

「あひやひやひや！ どーせ話がややこしくなつたのは宇城のせいなんでしょー？ ゲロっちやえゲロっちやえー！」

「バツカお前、なんでも俺のせいと思つたら大間違いだぞお前」

「……と、彼は言つているようだが」

「いやなに、ちよつとした立場の違いつてやつよ♪」

そう言つて冥利は近くの椅子に座り込む。

「オレ達は風紀委員会、オマエらは生徒会。厳罰で不正を正したいオレ達と、なあなあですませちまうオマエら……水と油つてやつだな」

「校内を取り締まる貴様達には、日頃私も感謝している。見たところ随分不穏な空気を感ずるが、私達は協力することこそあれ、対立する理由はないはずだ」

「対立する理由はない？ ケケツ、ケケケケケ！ だからだよ！ テメーのような生温

い平和主義者のせい、犯罪者どもは思い上がってやがる！ 『理由があれば赦される』ってなア！」

冥利は腹立たしそうに腕をふるい、傍にあったデカイコントラバスを粉碎した。

「話は聞かねえ！ 事情も知らねえ！ ルールを破ったヤツには厳しく罰を！ そんなオレのポリシーに、テメーは敵対してんのさ！ 『やり過ぎなけりや正義じゃねえ』！」
挨拶代わりとばかりに、めだかに向かってスーパースポーツボールを一発放つ。跳弾を繰り返して、めだかの死角から攻撃したが。

「悪いな、雲仙二年生！」

めだかはボールを掴み取ってみせた。

「——貴様から攻撃される理由がない。ゆえに、攻撃を受ける理由もないッ」

「……あーらら。日に二回も見破られるたあ、いよいよ今日は厄日だね」

「良おくしよしよし、ちゃんと防いだな」

「なーんで宇城が満足そうなのさ？」

「いやあ、色々と口出した甲斐があつたな」と

「ここで『避ける理由がない』とか言ったら説教してやったところだ。

「やめてください委員長！ いくら気に入らないからと言って、生徒会と敵対する理由にはならないでしょう!？」

「そうだそうだー、いいこと言ったぞ鬼瀬ー。私情を挟むなー」

「理由ならあるじゃねーか鬼瀬ちゃん。いつの時代だって正義は聖者を弾圧するモンだろ？」

「ふざけないでくださいー！」

「そうだそうだー、少なくとも現代日本でケーサツが宗教弾圧なんてしてねーぞパーカ」
「テメーさつきから調子乗ってんじゃねーぞ?!」

「……とにかく、私と貴様では主義が違うかもしれん。だがそれも話し合いで解決できるレベルだろう」

「チツ、とことん上から目線だな黒神！ だっけどもうそんなレベルじゃねーとオレは思うぜえ？ なんせ生徒会潰しのための刺客を三名、既に放ちまってるんだからなあ!!」

「!!」

「テメーみたいな奴にはこういうのが一番効くんだろ？ オラ、もっぺん同じコト言ってみな。それができたらベタ褒めしてやんよ！」

「……奏丞」

「あいよ」

「……は任せたぞ」

「任せろ。お前もな」

「任せろー！」

「ああ!? なに通じ合ってたんだよテメーらはよ！ 今からこつから間に合うワケねーだろが！ ムダな悪アガキしてんじやねーよボケ!!」

走り去ろうとするめだかの背に複数の攻撃を放った冥利だが……なぜかあらぬ方向にある教卓がボールで破壊される。

「なツ……またテメーの仕業か宇城イ！」

『『チヨコレート・デイスコ』』

攻撃のエネルギーや物質そのものを別の地点へ正確に落下させる事ができるスタンダードだ。めだかに対して行った攻撃を教卓があつた場所へ移動させたのだ。

「アイツは子供の時から、やる時はやる性格のヤツだからな。アイツを邪魔するってんならそれこそムダな悪アガキってやつだぜ」

「……おもしれー。だつたらこつちは高みの見物させていただくぜ。テメーの成敗はその後のオタノシミだ！」

「そりやありがたいね。不知火、お前もさっさと帰っちゃまった方がいいと思うぜ。いつ雲仙先輩が暴れだすかわかんねーし」

「宇城後はアィ？ 人を猛獣みたいに言うもんじやねーぜ？」

「なになに、心配してくれてんの？ だいじよぶだいじよぶー！ なんせ風紀委員長は校則違反してない生徒には手え出さないから！」

「ほー、言うじゃねーかエアオツパイ」

「エアオツパイ!?! (がびん)」

「なんて言い草ですか雲仙先輩！ エアオツパイだって頑張つて生きてるんすよ！」

「オマエオボエトケヨ☆」

「(こっわ……)」

冥利よりよほど怖かった。

「えーと、いやー、でも俺はあいつらと違って校則違反してないのに襲われてるからな。服の改造とかしてねーし、着こなしもフツーだし」

「はあー？ 何勘違いしてやがる。生徒会関係者つてだけでも確かに有罪だが、テメーはそうじゃなくとも肅清対象だからな」

「はっ。」

はて、何かまずいことをしただろうか。主張の激しい服装をしたわけでもないし、バイトも特に禁止されてなかったはずだし。

「オメー賭博部だろ。違法賭博の容疑がアガッてんだよ」

ガチの有罪だった。

スタンドをジープに憑りつかせ、強度とパワーを上げた車体で壁をブチ破って外に飛び出す。

「あのヤロー校内でなんて無茶しやがる！」

冥利がそれを追って外を見るが、既に姿はどこにも見えない。

「逃がしたか……いや、このままじゃ終わらせねエ！ ここからは男一匹雲仙冥利の個人的な戦争だ!!」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「……で、めだかちゃん達は風紀委員会と敵対しちゃったと」

「うむ。しかも相手はかなり過激な方針だ。こうなるとどう落としどころをみつけたものか……」

「まったく、服装違反なんかするからだぞ」

「そう言うオメーは違法賭博ってハンパねーなオイ！ 逆にイカしてんじやねーかよ！」

「中学の時散々しかした俺が言うのもなんだけど、君付き合う相手は考えた方がいいぞ……」

「へー、ぎゃんぶるやってるんだ。私も久しぶりに……」

「喜界島!? お前なんか昔の目つきに戻ってるぞ!」

生徒会室に戻った奏丞とめだかは、他のメンバーにも事情を説明した。

「しっかし真昼間から闇討ちかけてくるとは、聞きしに勝る物騒さだぜ風紀委員会! カツ、どうするよめだかちゃん! 敵の底も知れたことだし、このまま泣き寝入りするつもりもねーだろ?」

「おーつと、だからって風紀委員会に殴り込みなんてよしてくれよー?」

「! アンタは」

「失礼失礼、勝手に入らせてもらったぜ」

いつの間にか部屋に入ってきた冥利は、そう言つて後ろ手で扉の鍵を閉める。

「ま、確かに俺の武器もバレちゃった。知られちゃえば手品もそこまでだ」

冥利の袖口からボールがポロポロと零れ落ちてくる。

「手品の解説に来てくれたわけでもあるまい。何の用だ雲仙二年生」

「用がなくちゃ来ちゃいけねーつてののか? 冷てーことおっしやるなよ悲しいなあ!

学年は違えど同じ十三組の……」

「善吉ー、箒と塵取り持つて来てくれー」

「奏丞空気読んで!」

「何言つてんだ、生徒会にはいつオキヤクサンが来るかわかんねーのに、散らかりっぱなしにできるかよ」

そう言つて今度は扉の鍵を開ける。

「つたく、勝手に閉めないでくださいよ先輩。誰か相談に来るかもしれないンスから」

「……宇城！ ややこしくなるからテメーは大人しくしてろ！ 掃除なら後でオレがしてやるよ！」

「おや？ 先輩、俺そんなにおかしなこと言いましたか？ もう少し余裕を持ちましようや」

「……………」

「奏丞、あまり雲仙二年生を困らせるものではない。話がしたいと言うならば話そうではないか」

「……へいへい。俺はそこで座つとくとするよ」

「（……なんだ？ 今のやり取り、妙に違和感があるな。奏丞のやつ、また何か企んでるのか）」

善吉がそう考えている間にも、めだかと冥利の話は進む。そちらの内容もどこかおかしい。めだかを言い負かそうとしているようでもあるが、はつきり言つて今更な話だ。

「——上から目線性善説とかよー。実際その聖者つぷりはヒデエや。聖者の理想に従え

ない奴はイコール愚者^{ダメ}つてコトになっちまう。テメーがスゲエのは誰もが認めるよ。だけどそのスゴさを他人にまで強要すんなや。人間に強要していいのはみんなで決めたルールだけだぜ？」

「どうやら二つの誤解があるようだな雲仙二年生。第一に上から目線性善説などは善吉が勝手に言っておるだけで私は聖者などではないし、第二に——」

そこまで言つて、めだかはコロコロと足元に転がるボールをふと見る。同時に、恐ろしい想像に思い当たつてしまった。

「!! 貴様達離れろ! さつきこやつがバラ撒いたのはスパーボールではない! 火薬玉だ!!」

「おつとバレたかい? ダメだなーオレつて本当にダメだ! 手品下手過ぎ! だがまあ遅い。仕込みはギリギリ終わつてる。オレの本筋、炸裂弾『灰かぶり』^{シンデレラ}! これだけあればこの辺一帯は消えてなくなるぜ! その宇城は気付きそうだったけどな」

「……………」

「……密閉状態の部屋でそんなの爆発させたらキミもただじゃすまないよ」

「そうだ! 子供っぽい脅しはやめろ! 悪ふざけにしても度を越している!」

「テメーら知らなかつたみてーだが……ケケケ。オレも『やる時はやる性格』のヤツなんぞでな」

「やめた方がいい」

「……………」

「火薬玉で一網打尽、自分はその高そうな服で無事生還って考えなら……お前は後悔することになる。やめた方がいい」

「(コイツ、オレの特服『白虎』にも気付いてやがるのか)」

「もう一ぺん言うぞ。たつぷり。お前は後悔する。火薬を爆裂させるならな」

「宇城くん！　あまり挑発するような言い方は……！」

「……奏丞、大丈夫なのだな」

「さて、どうかね」

音楽室でのことといい、冥利が見るに、どうもめだかは奏丞を随分と信頼しているようだ。能力を買っているのか、あるいは……

冥利はもう一人の幼馴染である善吉を見る。

「……雲仙、テメーは冷静なヤツだ。実に計算された行動をとる。俺は結構熱くなるタイプだし、勝負すればどうなるかわからねえ。だが、俺はこの奏丞を信じてる。こう言うのにどういう意味があるのかは知らねーが、それでも俺は奏丞を信じて賭けるぜ」

「こいつはまあ……三人ともあまりの恐怖で頭がおかしくなったみてーだな」

——火のついたマッチを放り投げる。

「面白れエー！ 後悔するのはどっちか試してやるぜ！」

この期に及んで動こうともしない三人を見ながら、冥利は来るであろう爆発に備え体を丸め――

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

――爆発は起こらない。

「……………あり？」

「ここには水の張った花瓶がたくさんあるんだが……」

生徒会では誰かの悩みを解決する度に、花を一輪ずつ飾っている。その花を活かしている花瓶だ。

「そのせいで結構湿気てんのかもしれねーぜ」

「んなわけあるか！ 湿気程度でオレの『灰かぶり』^{シンデレラ}が不発なんて……」

その時。ジュツ、という音が冥利の耳に届く。さつき投げたマッチだ。火が消えてい

る。

「なんで火が……あつ」

そのマツチは、水に濡れていた。

「ま、まさかッ」

近くの火薬玉を見てみれば、これも水でびしょ濡れだ。おそらく、部屋中に転がる全
てがこうなのだ。だから不発。500体ものハーヴェスト達が、花瓶から水を運んで濡
らしたのだ。

「……なんなんだ」

「……………」

「なんなんだテメーは！ 何もかも台無しにしやがって！ オレの計画はテメーのせい
でことごとく失敗だ！」

「勝手に敵対しといてよく言うぜ。だが、俺に構ってるヒマがあんのか？」

「ああ？」

「雲仙二年生」

めだかが呼びかける。それだけで、冥利は異様な雰囲気を感じ取った。

「哀れなことだ。貴様もかつては人の善性を信仰する心優しき美少年だったかもしれない。奏丞のおかげで未遂に終わったとはいえ、これほど残酷無比な行いをするのは、情

「状態量に値するだけのきつかけがあったのだらう。——しかし！ だからと言って私は貴様を許さない!! よくも友達を危険な目に遭わせてくれたな!」

「!!」

「後悔つてのはこのことかよ……! 黒神めだかの真骨頂その④『乱神モード』!」

「人吉クン、めだかさんがあの状態になるのはいつ以来だ?」

「……阿久根先輩が見たのは中一の夏休み以来、だから三年振りですか。奏丞と組手する時はちよくちよくなつてたから、俺は散々見ましたけどね」

「宇城クン、あれを何度も相手にしてたのか……」

「あのバカ、俺なら何しても死なねーと思つてやがるからな。毎度毎度死ぬ思いで訓練してたな……」

「だったら宇城! 止められるんだよね?! 止めないとあの何するかわかんないよ!?!」

「理性はあるから一線は越えない……はず」

「今『はず』つて言ったあ!?!」

「まあ、中途半端に終わらせて後で反撃されてもやつかいだ。ここらで一つ、あいつの心に敗北感てやつを植え付けてもらおうぜ。めだかを聖人君子か何かと勘違いしてやがるようだしちよくだいいいだろ。俺だつていい加減キレたかったところだし、この際めだ

かがきつーく叱つてやりやいい」

「そんな無責任な！」

「……ケケケ！ オレを叱るだど!? やつてみな！ 乱神だろーが魔神だろーが、火山の前じゃ——」

目にも止まらないスピードで冥利に接近したためだが、冥利の顔面をアイアンクローで掴み上げる。

「!?」

「良い服を着ているな」

「へ、へへつ、耐圧繊維で縫製された自慢の服よ。ダンプにはねられたってへっっちゃらなんだぜ☆」

「そうか、それは重畳」

めだかの拳が鳩尾を貫いた。

「ガハツ……」

「つまり三発……いや二発までなら大丈夫ということだよな。私が本気で殴つても!!」

窓を突き破り、それどころか勢いあまって向かいの校舎に突っ込んだ冥利。先日張り替えたばかりの窓ガラス、早くもご臨終。

「（一発目で既に血へド吐いてるぞオイ）」

つまりめだかのパンチはダンプ以上の威力ということか。まともにくらつたら奏丞でも死ぬので、勘弁してほしい事実だった。

「阿久根先輩、喜界島。もしも引き際があるとするとするなら多分ここだけ。めだかちゃんの中身は見ての通りあんなのだし、生徒会にいる限り雲仙みたいに所構わず襲ってくるやつを引きつけるかもしれない。辞めるか、続けるか。ここで決めてくれ」

「善吉ー、俺は？」

「オメー実のそこ生徒会役員じゃねーだろ！ しかも今更だしな！」

「そーいやそーだったぜ」

「……そうだよ人吉。そんなの今更じゃない」

「ああ、その通りだ。君に言われるまでもない！」

「……そっか」

冥利のもとへ歩きながら、めだかが奏丞達に声をかける。

「……私の主義に巻き込んで悪かったな、貴様達。後で腕章を返して」

「水臭いこと言うなよめだか！」

「！」

「そうだよ！ あたし達は黒神さんに巻き込まれたいんだ！」

「めだかさんになんと言われようと、俺達は生徒会を辞めません」

「俺達はもう二度とお前を一人にはしないからな！　だから……」

「二」「そんなヤツやつつけちまえ（ちやえ）!!」「二」

「……ふ、そうか」

口元の血を拭い、冥利はフラフラと立ち上がる。

「（お高い衝撃吸収素材着込んでるつてのにこれかよ……！　キャノン砲みたいなパンチ打ちやがって、殴るなら砂袋でも殴つてろや！）」

「雲仙二年生。貴様は誤解していたようだが、私には大層な信念などないし、聖者でもない。友達が傷つけば怒りもするし信念だって捨てる。ただのちっぽけな人間だ」

「ケツ、バケモン女がよ……一丁前に仲良しゴッコかよ」

「ゴッコではない。仲良しなのだ」

「そーゆー問題じゃねえ……」

「貴様がしたことは実に許しがたい。しかし未遂は未遂だ。なので、チャンスを示しよう」

「チャンスだあ？」

「一言謝罪してもらおう。もちろん彼らにだ」

「……………」

冥利は、この期に及んで甘い、と思わざるを得なかった。敵に体勢を整える機会を与

えてどーすんだ、と。そして確かに、この提案にのれば、後々めだかを打倒するチャンスも得られるが……

「(できるかよ、謝罪なんざ！ こちとら風紀委員会！ 正義の看板背負ってここに立つてんだぜ！)」

懐から切り札である『鋼糸玉』スティングボールを取り出す。

「上から目線で言うんじゃねーぞ黒神イ！ テメーを取り締まる！ それが今！ この場でオレが下す決定事項だ！」

「あくまでも戦争を選ぶか」

投擲。

「またスーパーボールか？」

「(この玉に巻いてある『糸』アリアドネは、一本で五トンの重量を支えられるっつー最新科学技術の結晶だ！ この攻撃を避けようが受けようが、張り巡らされた細く見えない糸はテメーの身体を拘束する！)」

めだかはこの攻撃を今までと同じだと勘違いしている。もはや逃れることはできない。

「正義は勝つツ！」ジャスティス

その時、冥利は勝利を確信した。

「——しかし何度見ても見事だ。これだけのボールの軌道を自傷なく計算し尽くすとは。だが」

めだかが飛び上がり、天井を粉碎した。上の階から机や瓦礫がガラガラと降り注ぐ。

「しよ、昇龍拳?!」

「さあ、障害物が降って来たぞ。計算し直すと良い」

「なんて事しやがる!?!」

完全に冥利の狙う軌道から外れたボールは、四方八方へ牙をむく。めだかだけにはない。当然、投げた冥利にも。

「しまった、糸が! クソ、巻き付いちまった!?!」

「……む、なんだこれは。体が動かん」

「このアホタレー!!」

冥利が吠える。

「(どうするどうする!?! あんな力技で対処するとは、思いもしなかったぞ!」

『シンデレラ灰かぶり』で糸を瓦礫ごと吹き飛ばして……だがそれだと黒神も自由になる! 最後の

の切り札まで使っちゃったから、もう対抗手段が……」

「どうやら細く丈夫な糸が巻き付いているようだ。奏丞、頼む。なんとかできるであらう?」

「……『魔術師の赤』」
マジシャンズレッド

鉄をも溶かす炎のスタンドで糸を焼く。糸の耐熱性は鉄ほどではなかったようだ。

「おお、自由になったぞ。いやはや便利なものだ。いい加減貴様の能力について教えてくれてもいいのではないか?」

「うっせ、秘密だ秘密。俺の生命線なんだよ」

「……………」

冥利は、そういえば宇城奏丞という意味不明な敵もいたということを思い出した。しかも考えてみれば、自身の武器は全部コイツに攻略されている。

「……………はあく」

壁際にへたり込む。もうネタ切れ、手詰まりだ。

「降参か? 雲仙二年生」

「……降参? バカ言うんじゃない。誰が参るかよ。ただちよつと疲れたんで、座つただけだ」

「ほう、その心は?」

「確かにもうオレが打てる手はない。フェイクのスーパーボールは見切られたし、本筋

の火薬玉は筋を通せねえ。挙げ句の果てには切り札の鋼糸玉ストリングボールなんざまるで切れやしねー。だが……それでもオレは負けちゃいねーぜ！ 信念は曲げねエ！ 改心もしねエ！ オマエは結局オレに勝てなかつたのさ！」

「……………」

そう言つて冥利は目を瞑る。

「さあ、トドメを刺しな。大好きな人間を守るために、オレを排除してみせな」
「なるほど、よくわかつた」

ゴン、という痛々しい音が、冥利の頭から鳴つた。めだかがゲンコツをしたのだ。

「——ツてえ〜!?」

「もう一つ誤解があつたようだ。トドメを刺すだの排除するだのと言っているが、私はそんなつもりはない。なぜならこれは説教だからだ」

「せ、説教だと?」

顔を上げて見れば、めだかの乱神モードが解けている。

「悪い子供にはゲンコツと相場が決まっている！ 雲仙二年生！ 『過ぎたるは猶及ばざるが如し』だ！ 貴様のやり過ぎはよくないぞ！」

「な、な……………」

「これから貴様がやり過ぎた時には、何度でも私がゲンコツを届けに行くからな！ 覚

えておくがよい！」

「テメーこの期に及んでそんなことを……！」

「それともう一つ！」

「！」

「貴様生徒会に入らないか？ もとより副会長には私に敵対的な者に就いてほしかったのだ。そう考えるところここまで私と張り合つた貴様は中々に適任ではないか！」

「……つ、ぎっけんな！ オレは風紀委員長だぞ!! 誰とでも仲良くできると思つてんじゃねーよボケ!!」

「そうか、残念だ。だが私はこれから、誰とでも仲良くできると思い続けるよ」

めだかは踵を返す。

「しかし今回は私もやり過ぎた。すまなかつた雲仙二年生。私が悪かつたよ。貴様には己の未熟さを学ばせてもらつた。これからもご指導ご鞭撻のほどをお願いするぞ！」

「……………チツ、なんなんだアイツは。何度でもだと？ そんなの、周りから黒神に会うために問題起こしてゐるみたいに見えちまうじゃねーかよ。ザけやがつて」

「正直に言えば、俺はアンタがそれ程間違つてゐると思わないんですよ。俺だつて別にそんなに褒められた人間じゃありませんしね」

舌打ちする冥利に、善吉が話しかける。

「めだかちゃんと同じくらい、アンタは正し過ぎると思つています。そうなるともうあとは好みの問題でしょう？　俺はアンタよりめだかちゃんの方が好きだ」

「……………」

☆☆☆☆☆☆☆☆

「——では黒神さん。雲仙くんに代わり、『フラスコ計画』に参加していただけないのでしょうか」

「……………申し訳ありません不知火理事長。お話自体は興味深く聞かせていただきましたが、雲仙二年生をリタイヤさせてしまったことは別の形で償わせてください。では、これで失礼します」

「……………」

そう言つて、めだかは部屋を出ていってしまった。

「……………で、君達はどう思いました？」

声をかけて出てくるのは、以前も隠れて奏丞を見ていた『表の六人』フロントシックスの面子だ。

「以前の彼に妙な感覚を覚えた分、彼女は彼より大したことないんじゃないかと」

「いやいや、あの女ちゃんと俺達のことには気づいてたぜ。五回ぐらい殺してみようと

したけど全部失敗しちゃったもん。あれなら前のヤツよりは期待できそうだけ」

「んー、あの子が雲仙くんに勝てたのはただのマグレだと私は思うよ（あの子が名瀬ちゃんの妹ちゃんなの？ 案外普通だね？）」

「私は意見を有しない。思うことなど何も無い（んなわけねー。アイツ比較的大人しいってだけで、中身はマジでバケモンだからな）」

「いいんじゃない？ あれなら人数合わせくらいにはなるでしょ。結局ボクと王土がいればそれでフラスコ計画は成り立つんだし」

「うむ。あれだけの美貌だ。俺の視界に存在することを許してやってもらおう」

「ふふふ、いやはや。君達にかかっちゃあ化物生徒会長も形無しですねえ。まあ彼女のこととは問題ないとして、気になるのは宇城くんのことです」

傍の柵から取り出した資料には、奏丞が今回見せた『異常』について書かれている。いたみも横からそれをこっそりと覗き込んだ。

「宇城くん、結構派手にスタンド使ったみたいだね」

「（相手が相手だからな。それよか行橋先輩に思考読まれないように注意しろよ）」

「（わかってるわかってる）」

「私の知る異常性とは、どうにも方向性が違うようにも見えます。今後のためにも、再確認が必要でしょうねえ」

「ならば高千穂と宗像。お前達二人で行ってこい」

「はあ？ この前『試してやるか』とかなんとか言つてたのはそつちじゃねーかよ」

「それに僕まで行く必要はないだろう？」

「黒神を見て気が変わった。俺は黒神を口説き落とすことにしよう。それに、仮にも雲仙を手玉にとつたのだ。少しは楽しめるかもしれないぞ？ 宗像も会えば何かに気付くかもしれないな」

「えへへっ、まったく気まぐれなやつだな！ まあボクはそんなお前について行くだけだけどね！」

「おいおい、俺たちや残飯処理係じゃないんだぜ」

「……やれやれだ」

……さて、そんな話をされているとは今回気付いていない奏丞はというと。

「158722(困るぞ)！ 62387133604249718496528099

4125(だって私は引きこもりで弟以下の女なんだぞ)！」

「そうかそうか、お前も大変だったんだな。よく頑張ったな」

一つの出会いを果たしていた。

第十七話：数字言語と幽波紋！

「オレのお姉ちゃん——雲仙冥加は箱庭学園十三組のスタンダードモデルみたいなモンですよ。独自に開発した数字言語でしか喋らねーから、まず言葉が通じねー！ 当然こっちの言葉も通じねーから黒神泣かせもいいトコだ。話したってわかんねーんだからよ。宇城も口先が通じないからやりにくいだろーな」

呼子の膝の上で冥利がそう言う。善吉と半袖が昼食を食べに食堂へ来たところ、ちょうど居合わせた冥利からそんな話を聞いたのだ。

「学校に来てるっていうアンタのお姉ちゃんつてのは……なんだその、戦える奴なんですか？」

「んんー？ ああ、そうだな。戦えるぜ、スゲー戦える。怪力無双の鉄球使いだよ。オレはケンカするたび泣かされてたな！」

善吉からすれば、めだかや奏丞と張り合った冥利がここまで言う相手なんて、ちよつと想像がつかない。怪力無双というほどだから、たぶん筋肉はムキムキなんだろう。絶対ヤベー奴だ。女やめてるタイプの。

「こうしちやいられないぜ。急いでめだかちゃんと奏丞探さねーと！」

☆☆☆☆☆☆☆☆

「4136、163735641?」

「(なんかヤベー奴に捕まった……)」

残念ながら善吉、間に合わず。奏丞は目の前で数字を羅列するヤツ、雲仙冥加を見ながら、内心帰りたい気持ちでいっぱいだった。相手はゴスロリっぽい服を着た小柄な少女だが、鎖付きの厳つい鉄球を手足に六個も下げている。その合計重量、実に600キロ。本当は発泡スチロールでした、というオチを期待したいところだが、廊下の引きずられた跡から見るに本物らしい。

「12415325865871608512 (仮にこの世で一番強い奴がいたとして)、68874647184186464522 (そいつが食中毒で死んだら料理を作ったコックが最強なのか)? 68764564162137468 (核兵器を作れるような世界一の頭脳を持つ学者さんが)、3643543787678676187 (意地悪クイズに答えられなければ出題者は宇宙一か)?」

「(実際に見てやっと思ひ出したけど、こいつは雲仙の姉だったはず。名前は忘れたが、

確か引きこもりのおっぱい好きだったか……? 見てくれは美人なのになあ……もつたいねえ)」

「……0912 (まあ)、3543646542168768214141245 (かよ
うに考えれば考えるほど最強の正体はわからないけれど)、364356468734
313 (とにかく私が目指すのはそれだ)。2141254465787654632
4『1332513』(そのためにはモルモット集団『十三組の十三人』^{サーティーン・パーティ}への加入は必須
条件だ)! 435674852248576 (悪く思うなよ宇城奏丞)。463245
36474312436 (お前の次は黒神めだかを潰すことにする)。091 (ま)、1
435256 (とはいえ)、5328832752399 (私の言葉が理解できるわけが
ないか)……」

「何言ってるのかわかんねーんだよ日本語喋れ日本語」

「……244 (ふん)。767565324428465 (何を言いたいのかさっぱりだ
な)」

「今時一カ国語しか話せないようじゃ、社会に出て苦労するぞー」

「75127575452483421164 (なんだか引きこもりの私をバカにして
いる気がするぞ)……! 7297 (もつとも)、57347857627011525

91126 (壁のシミになれば喋ることもできなくなるがな)!!」

「おわっ!？」

えげつない風切り音とともに、鉄球が迫る。奏丞はそれを後退することで回避した。「あつぶね……けどリーチはわかりやすいぜ。距離を開けば避けられない攻撃じゃないな」

「4647(ほほう)、91233782915284(生意気にも避けるか)。665725612612561(だったらもう少し遊んでやろう)」

「さて、どーすつか?」

冥加は100キロもある鉄球を分銅鎖のようにブンブンと振り回し始める。奏丞としては、女子供にバキツとやるのは遠慮したいところだ。しかしどうにかしなくては話が終わらない……なのでここは一つ、とっておきの作戦を取ることしようと思う。

「2948178(くらつてくれたばれ)! 2248576(宇城奏丞)!!」

「おーつと、そんな攻撃くらわねーぜ!」

再び距離を取って攻撃をかわした奏丞は、そのまま傍の窓を開けて外に飛び出した! 「……………8(は)?」

一瞬思考停止したが、何をしているのか察した冥加は怒りのままに鉄球で窓を粉碎し、奏丞に怒鳴る。

「4136(お前)! 15759987430113(どういうつもりだ)!!」

「お前の相手なんてしてやんねーよー! ほーらるるるるばー!」

「8 (き) ……8262 (貴っ様ア)、13291764 (一組ノーマルの分際で)!!?」

あからさまな挑発だったが、それを見て我慢ならず冥加も外へ飛び出した。

「76 (うつ)、1534 (暑い) ……!」

途端に、むわつと押し寄せてくる熱気。空を見上げてみれば、太陽がギラギラと輝いている。

「3 (た)、3561076325184 (確かに今は七月で夏だが)、7667394521971564 (今日はこんなに暑かったか)!!?」

学校の敷地内を逃げ回る奏丞のスピードは大したことはない、冥加がちよつと頑張ればすぐに追いつけるだろう。だったらさっさと捕まえてしまおう。捕まえて、すり潰して、熱々のコンクリートの上で干してやる。自分はそれを冷房の効いた部屋でアイスドリンクを飲みながら眺めてやるのだ……!

そんな決意をしつつ、奏丞を追うのだが……なかなか追いつけない。奏丞が付かず離れずの距離をずっと保って逃げているのだ。

「8 (はあ) ……! 8 (はあ) ……!」

「ペースが遅れてるぞー! 運動不足かー!」

「5 (こ)、50746118235743637892 (言葉が通じないからって好き

勝手言ってるなお前) !?」

息が切れる。暑さを感じないかのように走る奏丞とは裏腹に、引きこもりだった冥加の体力はみるみるうちに削られていく。

「……7961(ああもう) ! 4642417543495631(十三組アフナーマルの私があるんで追いつけない) ! 89(くそ)、3945615948361(この拘束具てっきゆうのせいだ) ! 0470683157345618(これを外して身軽になれば)、45631(あんな男に) ……!」

暑さで熱すら帯びた鉄の錠を外そうとする冥加は、あることに気付く。

「……………5961(なんで) ?!」

錠が外れない。

「47018356(そんなバカな)、170456864537(どれも開かない) !

074561374651(整備不良なわけが) ……13754(いやまさか) !?」

冥加は熱射を放つ太陽を見る。

「7431603883561(弟から聞いたことがある) ! 365347365416701932(猛暑日は熱を溜め込んだ鉄道のレールが歪んでしまうと) ! 4475601『57234』(原因は『天候』だ) ! 50417370589(レールは歪むのを考慮して作られるが)、0567166414(この錠は違う) ! 7989(あ

あくそ)、971380489565431 (内部が熱で変形してイカれてしまったんだ!!)

『ウエザー・リポート』! 気温を操作した! 鉄球を外された方が厄介そうなんadena 手を打たせてもらったぜ!

冥加には言葉が通じないため、奏丞が何を言ったのかわからないし、まさか天候を操作しているなんてことも考えつかない。しかし、それでもわかっていることが一つある。

「引きこもりにこの状況は辛いだろ。『ハイウェイ・スター』使うよりは回りくどいが、このまま体力削ってやるぜ」

「……132915464 (一組ノーマルが私を)! 2141284 (なめるなあ)!」

「なにイ〜?!」

なんと冥加は、素手で次々と鉄の錠を引きちぎり始めたのだ。

「む、無茶苦茶だな!? 例えるなら! 知恵の輪ができなくてカンシヤクを起こしたバカな怪力男という感じだ」

「342418 (弟に勝る)、578124493 (数少ない私の取り柄だ)! 54158291942584650377 (お前の思惑など簡単に乗り越えてやるぞ)! 109 (そして)、3684 (最強に) ……!」

「うおおお!!」

残った力を振り絞り、逃げる奏丞の背中に飛び掛かる。600キロの重りを外して身軽になった冥加はあつという間に距離を詰め、奏丞を馬乗り押し倒した。

「いつてー!!?」

「8 (はあ)ー! 8 (はあ)ー! 3 (つ)、3327146 (捕まえたぞ)ー!」

「目が怖いよオネーサン!!」

「222 (ふふふ) ……7064 (これで)、4138 (お前を) ! 413 (お前) ……

8 (を) ……」

「おっ……とお」

倒れかかってきた冥加を、ウエザー・リポートが受け止める。

「……うーん、いろんな意味で大したやつだな」

奏丞は冥加を背負い直し、鉄球をスタンドで引きずりながら、その場を後にした。

☆☆☆☆☆☆☆☆

「……………66 (んんツ)」

サラサラと涼しい風が吹くを感じ、冥加は目を覚ました。

「754 (私は)、3568925 (たしか熱中症で) ……?」

「おりゃ (ピトツ)」

「にゃあつ!? 1839 (冷たっ)！」

「おお、悲鳴は数字じゃねーのな」

声の方を向いてみれば、冷えたスポーツドリンクのボトルを冥加に差し出す奏丞がいた。周りを見てみると、ここが学校のどこかにある木陰なのだとわかる。

「ほら、水分補給しとけ」

「……………」

「ん」

冥加が無言でそれを受け取ると、奏丞は横に座って自分の分のドリンクを飲み始める。それを見た冥加も、貰ったドリンクをしばし見つめた後、飲んでみた。体が水分を欲していたからか、なんだかやけに美味しく感じた。

「……………5361 (昔は)」

「……………」

「5361791 (昔は私も)、74290180814519093451 (ただのおっぱい星人だったんだ)」

「(何言ってんだコイツ)」

「87451608161476（日々のんなおっぱいを研究し）、16805517（美乳化に勤しみ）、6891301135（たまに喧嘩を売ってくる弟を泣かせる日常）。3791594764（冥利はやんちゃだったが）、7560489908116

71534（AAカップのおっぱいがじやれているのだと思えば苦ではなかったよ）」

「（わかんねーけどたぶん過去語りしてんだろーな。雲仙先輩の話とかかな）」

「88（はは）……48317（そう考えると）、31582248576（さしずめ宇城奏丞）。805114853（お前はHの巨乳といったところか）」

「（なんか傍げに笑ってる。こうしてみるとやっぱ美人ではあるんだよなあ）」

「4534（でも）……」

冥加は読めるはずのない日本語のラベルをじっと見てみる。

「69318007821945551（世間の評価は言葉の通じない私より弟の方が良かった）。4417883519615684（弟は飛び級して私の先輩になってしまったよ）。86419841693（弟に劣る姉なのだ）、1084974135（随分シヨックを受けたものだ）」

「……………」

「07834163517（私は最強になりたかった）。46171567459016

35（誰からも認められる最強になって）、9561215679（弟よりも凄いと

きりさせて)、1745659401073695 (冥利の自慢の姉になりたくて)
……………314317905631796 (ついにノーマルに負けちゃった) ……

冥加は膝を抱えて丸くなってしまふ。

「……………673258963615941793650 (お前も内心では冥利より大したことないって思ってるんだろ)? 5670319 (結局私なんか) ……」

「……………えい (ピトツ)」

「きゃあ!?!」

「何落ち込んでんだよ」

「4 (お)、4136 (お前)! 1351796 (またやったなあ)!?」

「お前が何を言ってるのかはさっぱりわからねーけど、そう悲観することねーだろ」

「6 (や)、6134767565324428465 (やっぱ何を言いたいのかさっぱりわからないけど) ……」

「ありえねーほどの腕力もあるし、一から言語作っちゃまえるくらい頭も良いし」

「67043351946175 (もしかして私を慰めてくれているのか)?」

奏丞は冥加にサムズアップする。

「結構根性も……………あるみたいだしな」

「(74961852490 (サムズアップしたぞ)!? 07367545186 (まさ

か言葉が通じてるのか) !?)

冥加は驚くが……まさかそんなはずはないと思い直す。会話だけで解説するなんて、冥利ぐらいにしかできないはずだ。

「07389226(まさかとは思うが)……67545186(言葉がわかるのか)……?」

「ま、世の中には人を巻き込んだり実験体扱いするのが得意な、お前以上にブツ飛んでる奴らがいるもんだよ」

やれやれ、と奏丞が首を振る。

「(470158236(首を横に振ってる) !?) 145256136(これ完全に通じてるだろう) !?) 6345(いやでも)、205784373(言葉は通じてないって) ……8(ハッ)、073(まさか) !?)」

「ん? どした?」

冥加と奏丞の目と目が合う。

「5981485523(大事なのは気持ちなんだな) ! 61342248576(わかったよ宇城奏丞) !! 4134276(お前の意思が) ! 652『373』14623『143』(『言葉』ではなく『心』で理解できた) !」

「おっ、もしかして俺が言いたいこと伝わってる? いやーやつば会話は言葉より気持

ちが大事なんだな」

「9431566315（しかし猶更わからないぞ）。848147115692430

3（私はお前にとつたらメーワクな存在のハズだ）。965541465673242

（どうしてそんな私を慰めてくれるんだ）……？」

「それでよ、めだかなんてこーんなちっちゃい時から色々としてかすヤツですよ……」

「……………!!? 2（そ）、264156716（その手の動きはッ）!!?」

宙を撫でるように動く奏丞の手のひらを見て、冥加は全てを察した。

「26415671617081394676173（その手の動きは間違はなくBサ

イズのおっぱいを示すジエスチャー）！ 6656719100814348（それは

つまり私のおっぱいのことだ）！ 2248576（宇城奏丞）、4137651708

1（お前の好みはBサイズのおっぱいなんだな）!!?」

「話聞いて驚いてんのかな？ 何て言ってるのか気になるな」

「6（ま）、6159083（間違いない）！ 570136973576（こいつ私に

気があるんだ）!!」

冥加が両頬に手をやると、かつてないほど顔が熱くなってるのを感じた。木陰にいるのに、まるでまた炎天下に出て来たみたいだ。

「943（しかし）！ 74390154989163（世間の男は巨乳好きばかりのは

「ずじやないのか）！ 5792243（弟もそうだし）！ 27378410081（な
んで私のBおっぱいが）……」

「でなー、巻き込まれた善吉なんか大変な目にあつて……あれいつだったかなア」

人差し指を立ててフラフラと動かし、何かを思い出そうとしているようにも見える奏
丞だが……生粋のおっぱい星人である冥加には何をしているのかわかる。

「222（そそそ）、23511658323947（その指先の動きは私の乳輪のサイ
ズ）！ 8641（そんな）、641358100815417843923（私のおっ
ぱいは何から何までお前好みだつてことなのか）!!?」
「そうそう、あいつの十二歳の誕生日の時だった！」

正解！ とでも言うように、奏丞は冥加に指を向ける。

「8000000（はわわわわわ）……」

「あれ、なんか顔赤いぞ。まさか、また熱中症ぶり返したんじゃねーだろうな……ウエ
ザー・リポートのおかげで涼しいはずだけど」

「158722（困るぞ）！ 62387133604249718496528099
4125（だって私は引きこもりで弟以下の女なんだぞ）！」

「そうかそうか、お前も大変だったんだな。よく頑張ったな。何言つてんのかわか
ねーけど」

「!? 35(ちよ)、41319565986(お前なんか近いぞお)! 15343(離れる)!!」

「あ、悪い。なれなれしかつたな。ちよつと待つてろ。なんか暑そうだし、濡れタオルでも持つて来てやるよ」

「1(あつ)、24(いや)、143796057165651(別にどつか行けと言うほどもなくて)……!」

冥加はどこかへ行こうとする奏丞を見て、思わず制服の裾を引つ張つてしまう。……100キロの鉄球を振り回せる腕力で。

「おわっ!?!」

「!!?!?!」
 「!!——奏丞が(引つ張られたせいで)冥加に覆い被さつてきた。」

「77795742396074162554143169119276571073
 42309569081347072289716991091624359405
 17565(そそそんな突然過ぎるこんな所でいくら心が通じたからつてお前もつと段階踏んでから私のおっぱい味わえ冥利ごめんお姉ちゃんが先に)ーッ!!」

「すまん大丈夫か! わざとじゃないん……だ?」

「……………9(キュウ)」

「……し、死んでる」

雲仙冥加。恥ずか死により再起不能——

「と冗談は置いといて……この状況」

突然顔を真っ赤にして挙動不審になった女子が、男に覆い被さられて早口で何かをまくし立てて気絶。

「なるほど……ラブコメ主人公かよガツテム」

知らない間に何かとんでもない勘違いをしている気がした奏丞は——冥加を保健室に送ってトングズラすることにしたのであった。

「……お、宇城はつけくん。いくぜ宗像」

「はあ、仕方ない。早くピオトープで水遣りをしたいから……ここは『瞬殺』だ」